
探索はあくまでも副業です

めたとろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探索はあくまでも副業です

【Nコード】

N9954U

【作者名】

めたとろん

【あらすじ】

これは行く気も無かった迷宮にやって来た農民の物語。人よりスタートは遅いがその経験で……商売を始めます。迷宮の探索？それは副業です。地道な主人公の送る迷宮都市ライフ。果たして主人公の行きつく先は？

展開上戦闘描写は少ないです。説明が多いです。多少のご都合主義はあります。不定期更新。息抜きで書いてます。

1・農民は夢を見ない（前書き）

最近迷宮物を色々と読んだので、触発されて書いてみました。
物書きとしては初心者なので、誤字脱字、用法の間違いなどあれば
どんどん御指摘下さい。作者は豆腐メンタルなのでお手柔らかにお
願いします。

1・農民は夢を見ない

1・農民は夢を見ない

迷宮……それは人（主に男）の夢と欲望が渦巻く場所。力さえあれば金、女、地位、名声が思いのままの人生を過ごすことができる。古今東西、その魅力に惹かれぬ若者は少ないだろう。

「もう日も傾いてきたが、干し草はどんな具合じゃ？」
「問題なし、全部乾いてます」

が、それも実力があれば、の話だ。
迷宮と、それを取り巻く都市の華やかさに隠れて、成功者に数倍する……あるいは数十倍の落伍者が存在する。
そして敗北者の話が語られることは無い。

「そつえば来週じゃったか」
「何がですか」

「ほれ、迷宮行きの馬車が出るじゃろう」

「ああ……別にどうでもいいですし、忘れていましたよ」

一攫千金、成り上がりを夢に、多くの若者が迷宮に挑戦する。

だが考えて欲しい、迷宮はただお宝探しをするための構造物ではない。リターンにはリスクが付き物……宝だけではなく、魔物と闘、そして獲物をかすめ取る盗賊でも満ち溢れているのだ。
はつきり言えば危険極まりない。

そんなところに碌な戦闘経験もない村人が挑んだところで、あつさり命を落とすだけだろう。

実際、迷宮で最も死亡し易いのは初心者なのだ。

「相変わらずじゃな、普通お前さんの年頃はもつと夢見るもんだぞ」
「夢見て食べていけるならいいですけどね、そんな保証はない……」
それに無理に行く必要もないですよ」
「違ういのう」

流石に物心つけば、危険があることぐらいは誰しも承知している。
まあ。中には自分ならどうにかなると楽観的な奴や、俺が成功しない訳がないと増長している奴もいるが。
それでも迷宮に人が集まるのには訳がある。

貧しさだ。

地方の村ではよくあること。

とりわけ不作の年には多いという。家族のため、自分が食べていくため、理由は様々だが、なんにしてもその貧困ゆえ、若者は村を出ていく。

そしてそのほとんどが次男以下だ。

勿論働くなら迷宮でなくともいいのだが、特に技能のない若者が働ける場所など限られている。そして迷宮都市は常に人手不足である。当てがなければ一番働き口が見つかり易い場所でもあるため、出ていく者の8割は迷宮を目指すのが通例だ。

口減らしなどは極端だが、行き場のない者が集まるのは確かだ。

貧困が理由の者は多いが、純粹に出世を夢見て、という者も多い。元手の無い者が成り上がるなら、軍人が探索者だと言われている。

「もうすぐ日も暮れるしそろそろ上がるよ」

「おう、気いつけて帰れや」

「わかってますよ、危ないのはごめんだ」

しかし出ていく必要が無ければ、裕福とは言えなくても真っ当に暮らせれば、自分から危険に飛び込む必要はないはずだ。

夢を見るのは結構だが、地に足を付けた生き方が一番だ。
憧れはしても夢は見ない。

私はそう、思っていた。

1・農民は夢を見ない（後書き）

読める文章を書くのが難しいです。こればかりは数をこなしていくしかないですね……。

2・家族と村（前書き）

プロローグはストックがあります。

書き続けられそうなので投稿を開始しました。

2・家族と村

「~~~~~」

畑で採れた収穫物を積み込んだ荷車を、鼻歌を歌いながら引つ張っていく。

凹凸の多い道で荷車が揺れるが、いつもの事なので気にならない。本当は牛やロバを使えば楽なのだが、他の仕事に回しているのと、体を鍛える目的があるのとで使っていない。
足腰は重要、体力も重要、体は資本なのだ。

一面に広がる畑を眺めながら、今年の村の収穫について考える。
今年は良くも悪くも無く、天候も例年通りである。ただ隣国で小競り合いが起きているためか、穀物が少し値上がりしている。村の収穫はここ数年でだいぶ上向いているので、問題なく冬を越せるだろう。

問題があるとすれば領主くらいか。思いつきで行動しやすい人物で、2年ほど前には突然河熊の毛皮を納めろという命令がでて、村中総出で苦労した覚えがある。

まあ相場より大分安い報酬は出たので、そんな酷い領主ではないようだ。噂で聞く他の土地では、若い娘を交代で侍らせたり、収穫の7割を持つていたり（ここは5割だ）と、やりたい放題の場所もあるらしい。そういう領主にはぜひ爆発して欲しい。

まあ、一村人が悩んだ所でどうしようもないので、現状を良くする努力をするだけである。

そうこう考えているうちに、家が見えてきた。
村の外れにあって、特に代わり映えのない普通の家だ。農家は基本

的に、出入りし易いように外れの方にあつて、それ以外の生産業（鍛冶とか織物とか）を営む家は中心付近に集中している。どうでもいい話だが。

村を囲う柵を抜け、家の脇を見ると、今自分が引いているのよりも大きな荷車が軒下に止まっている。

「2人とも帰ってきているのか……、景気が良ければいいけど」

大きい荷車は、街に収穫物を売りに行くのに使っている。

街まで片道2時間程かかるため、毎日というわけにはいかないが、週に2回父と兄が市場に売りに出ている。

軽く戸を叩いて、帰ったことを知らせる。

「ただいま」

すぐに戸が開き、2人の男が姿を見せた。

「おかえり諒二、遅かったな、もう日が暮れる時間じゃないか」

「まったく……おかげで一服しちまったよ」

まず出てきた壮年の男性が父親の籐真、髪には白いものが混じり始めているが年輪を感じさせるいい男だ。

後ろの、父に似ながらも柔和さを感じさせる男性が兄の晴一だ。街での交渉は兄がいつもやっており、結構な商才の持ち主だ。

2人とも外に出てこようとするので、私は笑いながら追い払うように手を振った。

「疲れているのなら休んでいいよ？ 俺一人で片しておくから」
私が収穫してきた物を仕舞い込む作業があるのだが、別に1人でも大した作業ではない。

「何言ってるんだ、さっさと片付けて飯にするぞ」

父親がぶっきらぼうにそう言っ、すぐに荷物を運び始めてしまう。兄と顔を見合わせて互いに苦笑すると、皆で同じように運び始めた。穀類の刈取りは先日終えたため、収穫物は芋類が中心である。根菜が3割程度で、葉物はない。葉物は萎れやすいため、売る日の朝収穫することになっている。

「よっ……せ」

最後の袋を倉庫に放り込み、一息付く。
何時の間にか、家の中から夕餉の匂いが漂っており、空きつ腹が催促を始める。

「よし、飯にするぞ」

父の一声で、疲れた体を持ち上げる。

家に入る前に、井戸の汲み上げ機……ポンプの取手を引いて水を出し、体を洗う。手拭いを浸して体を拭く。

家族からはやり過ぎじゃないかとよく言われるが、清潔にしておくことに不利益は無い。

家に入ると、女性2人が待ち受けている。母親と妹だ。

「おかえり、早く座りなさい」

「もう、先に食べちゃうよ？」

まあ母親は……特筆すべき点の無い人だが、自分を育ててくれた愛すべき母親だ。

妹は……私の妹がこれほど可愛い訳がない、と言いたい位可愛い。嘘じゃあない。多少の臍目はあると自覚しているが、少なくとも村一番であることに疑いを差し挟む余地はないと思っている。村の若い男どもが狙っているが、私の目が黒い内は連中の指一本触れさせる気はない。

若人諸君。妹が欲しければ父と兄と私を倒してからにしたまえ、ははは。

話が逸れたが愛すべき家族たちだ。

さほど裕福な生活とは言えないが、蓄えもあり、こうして笑顔で食卓を囲める日々は何よりも代えがたい。

食卓に着き、味噌仕立ての茸汁を味わいながら平和を噛みしめると、いつの間にか話題が今日の売り上げのことになっていた。

「……で、余り欲張らずに3割で手を打った訳だ。双方にとって良い付き合いが一番だからな」

兄が今日の交渉について語っている。母と妹はただ笑って聞いているのだが、父親と私はかなり真剣だ。交渉の内容は、生活に関わる話である以上、知らないでは済まされない。

「そうだな、向こうにとっても良い仕入れ口なら、無茶も言われ辛いだろう」

父親も頷いている。

まあ私としては、作った物が正当な評価を受けているかが最大の関心事なのだ。

なので自分から聴くことにした。

「それで、あれの市場での評判はどうだった？」

「ああ、赤耳茸か。それがなあ、一応市場で並べる前に、戸川の旦那に見せたんだよ。そうしたらどうなったと思う？ 全部買わせてくれたさ」

楽しそうに兄が語る。

赤耳茸とは、倒木などに生える赤茶色の傘をした茸で、煮てよし焼いてよしの秋を代表する食材の一つである。市場にもそれなりに出回るため、普通の家庭でも季節を楽しめる程度の品だ。食べても残機は増えないし大きくもならない。

「高級種じゃないとはいえ、あの肉厚と大きさを揃っていれば、目の色を変えるよな」

「ああ、まあ全部は売らなかったが、付き合いで2籠分は下ろしてきた。市場での評価が重要だからな。あれ位の品質で一定量を定期的に下ろせるなら、買い手はいくらでも付く」

天然ものではなく、我が家で人工的に栽培した商品である。質には気を使っている。

珍しく兄が意地の悪い笑みを浮かべ、言葉を続ける。

「戸川商会にだけ下ろしていたら、評判まで向こうの総取りになってしまう。そこは譲れない点だろう？……しかしこれは本当に旨いな。赤耳茸が肉厚になると、ここまで味が濃厚になるとは知らなか

った。昨年よりも育ってないか？」

「ようやく安定して栽培できるようになったんだ、大きくて肉厚の方が付加価値が増すと思ってね。天然ものはある程度の大きさになれば、見つけたそばから他人に取られない内に取ってしまうから、市場でもこの大きさは出回らないと思うよ」

肩をすくめる。

今でこそ楽しく語っているが、市場に出せるようになるのに6年かかっている。

そもそも赤耳苺を始めとした苺類の栽培法はほとんど確立されていないのだ。一部種類に関しては成功して出回っているが、倒木に生える苺ではまだ聞いたことがない。

そんな中で、今回私が栽培を成功させた訳だが……別に私は天才でもないし、特殊な能力がある訳でも無い。

この世界には無い成功例を識っているというだけの話だ。

食後の後片付けも終わり、私は家の裏で日課の鍛錬をしていた。別に武術とか大層なものではないが、この御時世身を守る力があるに越したことはない。獣も野盗も容赦はしてくれないからだ。

「ふう……終了だ」

もう十年以上続けている鍛錬を終え、丸太を割って作った手作りの長椅子にごろりと寝転がりながら汗をぬぐう。

ゆっくりと息を整え、目を閉じて頭をからっぽにする。
瞑想する。

「……………」

雑念が消えるまで瞑想を続ける。

しばらくすると、暗闇だった脳裏に幾つかの情景が浮かび上がってくる。それはこの村の生活のものではなく、もっと色彩豊かな、どこか別の、知らないはずの光景だった。

“自動車”、“ビルディング”、“電気ねずみ”、そして……“地球”。

脳裏に浮かぶ「星」の姿に息を呑んだ所で、水面が波立つように情景は消え去った。

ゆっくりと目を開ける。気付けば、またびっしりと汗をかいている。

「つ……、全然持たないな」

思わず愚痴をつく。

「あれ」を意識的に見ようとすると、意識せずに集中するという自分でもよく分からない行為が必要になり、未だ安定して見られた試しがない。

あれとは何か。

それは知っているはずのない光景、知識。既視感という生易しいものではなく、間違いなく知らないはずの内容。

5歳くらいだったろうか、変な夢を見始めた。

自分がどこか別の誰かになって、見たことのない場所でよく分からないことをしている。

いや、夢の中では知っている場所でしていることも分かっているのだ。

目が覚めてみれば、習っていないはずの知識がある。

子供心に何が起きているのか判らなくて怖くて、ひどく泣いた覚えがある。最初は母親に相談したが、しばらくしてそれも止めた。

おそらくどうにもならないし、それで家族に迷惑が起きたらいけない。という結論に至ったからだ。5歳児の考える話ではない（天才は除く）が、そういう考え方を、夢の中で身に付けてしまったからだ。

18歳になったが、夢は今でも続いている。

おそらくは他人の記憶……の断片。いわゆる前世というやつだろうと思っっている。

曖昧なのは、その情報が文字通り断片的だからだ。時間も場所も無視して、見るたびに違う記憶の「欠片」が入ってくるだけなのだ。それでも10年以上見続けていれば、大体の事は整理がつく。

夢の中でも自分は農家……のような仕事をしていたらしい。

ただ、今とは比べ物にならない位大規模かつ効率的な「農業」というものだっただ。

結婚していたらしく、女性の顔も印象に残っている。

どう死んだのかは流石に分からない。年を取った時点での光景が出てこないため、若くして亡くなったのかもしれない。死んだ時の事は、当然覚えているはずもない。

もしかしたら何者かが夢に介入しているのかと考えた時期もあった

が、確かめる方法もないのでどうでもよくなった。

別に日常生活で不便になる訳でも無く、強引に見ようとしなければ出てこない記憶など、周囲に吹聴でもしなければ害になりえない。

まあ、時折変な表現が頭の中に浮かんでくることはあるけれど。

例えば赤くしたら3倍とか、もう訳が分からないよ。

知識自体は断片的ではあるが、上手く利用すれば、茸の栽培方法のように生活を豊かにしてくれる。

苦労は並大抵ではなかったが。

記憶にあつた、しいたけ、という茸の方法を利用してみようと思ったのが約6年前。

1年目：まずその方法でいけそうな茸の選別に費やす。

2年目：木に植え付ける種菌の増やし方を試行錯誤する。

3年目：赤耳茸に決め本格的に入るも種菌が上手く蔓延しない。

4年目：種菌の植え付け方、原木の寝かせ方等を試行錯誤する。

5年目：ある程度栽培は上手く行くも、ほとんど獣に食われてしまった。

6年目：今年であり、獣除けも徹底したため無事出荷中。

……実に苦労した。やり方がわかって、それですぐ大儲けとか不可能である。自分が如何に凡人かというのを思い知らされた。

余談だが、茸としては価値が並の赤耳茸を使ったのは、栽培のし易さ以前に、すぐに目を付けられないよう、「一般的にある程度出回っている茸」を選んだからだ。これが希少価値の高い茸の栽培に成功しようものなら、やばい所に目をつけられてしまう可能性がある。赤耳茸なら、質と量で売り込む程度で済むという寸法だ。

まあ、いずれ方法に目を付けられるだろうが、その前に村に広めて特産品化してしまえば、発案者も誤魔化せるだろう。来年からは村

で作れるよう村長に提案するつもりだ。

余談が過ぎたが、もし問題があるとすれば、この夢の知識が正しいとすると、この知識はこの世界のものではないということか。夢の世界地図がそれを示している。

実際には余り役に立たない、もしくは応用するのにも酷く苦勞する知識ばかりである。

正直役に立てば儲けものという程度でしかない。

ただ、幼少期に夢で別の人生を体験したせいで、すっかり“ませた”子供になってしまった。うん、それで色々と面倒事が起きたんだ、済まない。夢が影響しているの部分としては、一人称が「私」であることだ。農村で余り丁寧な言い方は普通しない。おかげでいじめられそうになったことがあるので、しゃべる時は、なめられない様「俺」で通すことにしている。

「まあ、過去より現在、現在より未来とね」

前世の自分が言っていた言葉だ。

色々考えているうちに汗も引いたので身を起こし、ゆっくりと体をほぐす。

体を拭いて寝ようと井戸に足を向けた所で、急に村の方から騒がしい気配が伝わってきた。

(……?)

どうやら村の入り口の方だが、こんな時間に来訪者が何かが来たようだ。

別に物見高くないので様子を見てみると、しばらくして何事も無く静けさが戻ってきた。

「ま、いいか」

誰にともなく呟くと、さっさと寝ることにした。
(何も無ければいいがね……)

翌日、一つの報せが村を駆け巡ることとなる。

『領主交代』

2・家族と村（後書き）

会話が少なくと読みにくいでしょうかね？
意見を頂きたいです。

3 ・布告とその後（前書き）

これでプロローグは終わりです。ようやく本編を始められる（笑）

3・布告とその後

「集会所に行ってくる」

次の日の朝、父親はそう言って家を出た。

妹が不安そうな表情でこつちを見上げてくる。不安な表情もまた素晴らしく可愛いが、そつと頭を撫でてから、いつも通り農作業に出ることにした。

人間の事情に関わりなく作物は成長するのだ。

「兄さん、俺はあつちの畑に行ってくるよ」

長男である兄は家にいた方が良い。兄も私が言いたいことは理解したのか、すぐに頷いた。

「分かった、俺は倉庫の作業をしよう」

売り物の選別や器具の補修。家に居ても農家に暇は無い。

私は昨日同様荷車を出し、いつも通り畑へと向う。

がたがたと荷車を揺らしながら畑に向かうと、同じように作業に出てきた者達と遭遇した。

とりあえず挨拶をする。

「やあお早う」

「ああ、お早う」

「おっはー」

近所に住む銀壺と、高秋だ。私と同年代で、いつもは陽気な連中な

のだが、今日は難しい顔をしている。
言うまでもなく、皆不安なのは一緒の様だ。

農作業をしながら、時折一服して会話を交わす。

「で、新領主さまの話はないのか？」

「いや、全くないな」

「まあね、でも変なんだよ」

間延びした声で話す高秋。いつも思うがお前も変だ。

「変、というと？」

「何で交代するのかしらないけど、普通なら息子が後を継ぐでしよう？」

そう言わないってことはどっか別の人だね？　なんで？」

なんで？と言われても困るが言いたいことは分かる。

普通に引退なり死亡なりで交代するなら、同時に新領主の名前も含めて報せが回るはずだ。そうでないということは……駄目だ、情報が少なすぎる。

面倒なことになりそうな気配はあるんだが。

（所詮は一村人、何かができる訳じゃないが……、備え位はしておかないとな？）

農作業自体は特段何事もなく、いつも通り進んだ。

昼近くなったので、汗を拭いて木陰で休憩する。

水路に浸しておいた竹筒を引き上げ、冷えた茶で水分を補給する。

別に水でもいいのだが、この茶を飲んだ方が、精が出る気がする。

「くう……この仕事中の一杯が堪らない……」

薬草を自分で焙じたお茶なのだが、このやや癖になる感覚はもしかしたら変な成分があるのかもしれない。今更止める気はないので手遅れだが。

腰に下げていた袋から、豆を取り出して噛む。

都市部はともかく、ここのような村では1日2食、朝夕に食事を取る。小腹が空いたらこのような豆や干し飯で紛らわせる慣習である。この豆は軽く炒っており、香ばしさが心地良い。

適度な量で止め、茶で口の中をすっきりさせてから仕事に戻る。

豆は水分で膨らむため、腹持ちが良いのだ。

水路から水撒き用の如雨露に水を汲み、作物に撒いていく。3年ほど前にこういうものだと言明して製作してもらってから、作業し易いと村では評判である。

作業の傍ら、今後何が起きてもいいように想定を重ねておく。

何事も想定内に収めておくのが、上手く生きる秘訣だと夢で学んだ気がする。

いつも通りの作業を終えて夕方になり、家に戻ると既に家族が勢ぞろいしていた。

「ただいま。その様子だと厄介ごと？」

「ああ」

父親も大分難しい顔をしている。

無言で続きを待っていると、

「領主……前領主が亡くなったのは、政変のせいらしくてな」

「政変？」

また面倒な話だが、それだけなら下々の人間にとって大した話ではない。

「で、どうも前領主は負けた方に属していたとかで、領主の首の挿げ替えになったらしい。それで正式な布告と一緒に王都から役人が来るそうだな、その準備を始めなきゃならん」

「いつ来るの？」

「主要な街が先だからな、ここは3日後らしい」

そして何事も無く3日が過ぎた。こんな普通の村でぼんぼん何かあっても困る。

その間にも商人等から噂を集めて整理してみた。

どうも権力争いらしいのだが、領主達で構成される評議会で領主数人が殺されるという事態が起きた。犯人はある大領主……国の経済政策を推し進めている商工長の地位にある人物に恨みがあり。その復讐だということである。調査によれば確かに商工長の政策によって落ちぶれ、両親が首をくくったという悲劇があつて、怨恨からの暴挙というのは間違いないようだ。で、取り押さえようとした周囲の領主も数人斬って、お縄となった。

死亡した者達について、犯人の動機を元に調べてみれば色々よろしくない事も見つかったので、これは問題だと潰された。

ここまでが表向きの話。

まあ、犯人の事情は概ね事実らしいのだが、噂では拡大政策を声高に唱えている軍務長の暗躍があつたとか。死亡したのが経済政策推進派の領主ばかりであり、暗殺者でもない犯人が会場に侵入できたという事実が噂を後押ししている。当日の警備は当然王軍……軍務長の指揮下にあつたはずだからだ。

経緯はどうあれ、結果として、商工派（経済力を高めて他国を圧倒しよう派）が大きく力を落とし、軍事派（文字通り軍事力を高めて他国を圧倒……侵略しよう派）が主流に乗ってしまったのが事実。おそらくはこれまで国内投資に向けられていた予算の多くが軍拡に使われるようになるのだらう。

国の宰相は中立らしいが、議会の流れには逆らえないらしい（行商人談）

私は念のため荷物を整理していた。

何かあると決まったわけではないが……心配性の身なので何かしてないと落ち着かないのだ。

袋の口を紐で縛り終わるところで、後ろから声がかかった。

「おーい」

振り返ると、いつの間にか銀壺がいた。

「何だい突然。驚かせないでくれ」

「全然驚いているようには見えないんだけど……、お役人様が来たようだよ」

「そうか……何で来たんだ？」

「機甲馬車だつてさ」

機甲馬とは生き物ではない。

疲労を知らない疑似生命体の一種で、元々はとある迷宮に出現する機獣と呼ばれるものを、残骸を解析して人間が造り上げた物だ。

馬より早く、疲れることもなく、下手な刃も矢も通らない機甲馬は傑作として世界中から絶賛されたい。国が技術を独占したかったようなのだが、開発者はそれを嫌って中立国へ亡命し、競争による発展を謳って世界中に基礎技術を広めてしまったという代物である。

欠点は、すごく高価。そして操縦者にある技能を求めるのだが、それはどうでもいい話だ。私には無理だし。

村の中央にある広場に行くと、既に大半の村人が集まっていた。

広場の端に噂の機甲馬車が停まっており、身なりのいい文官らしき人物が数人、大時計の前で作業をしている。その周りには何人かの兵士が立っていて、人が近づかないようにしている。ていうか人が多くて前に行けない。

しばらくして、大時計の針が正午に差し掛かった頃、代表と思われる髭をたくわえた壮年の役人が人々に向き直り、咳払いをする。

「うおっほん！」

それを合図としたのか、役人の隣に居た兵士が腰に下げていた角笛のような物を手に持ち、吹き鳴らした。村中に甲高い音色が響き渡る。

その音色を聴いた瞬間、私の中に、「音色の出所に注意を向けなければいけない」衝動が生じた。

みれば周囲も同じく、おしゃべりを止めて役人の方に顔を向けている。

おそらく、使用者に注意を向けさせる効果の術具なのだろう。

（流石国の役人……機甲馬車といい、道具だけは良いもの揃ってるよな……）

私は見たことのない道具に思わず興奮してしまう。普通の村で、直接的に人に効果を及ぼす術具を見る機会など無いからだ。

髭の役人は辺りが静まったことを確認し、再度咳払いをして偉そうに話を始めた。

同時に横に大きな巻物が掲げられるが、私の居る後方からは、何が書かれているかは良く確認できなかった。

「あー村民諸君。知つての通り領主が交代することとなった。

前任者は残念ながら罪を犯したためその任を剥奪されている。

新たに領主の座に就かれる太刀洗卿は……であり……先代より輝かしい戦歴を……」

再び始まったざわめきに紛れてよく聴こえない部分はあるが、新領主の紹介の様だ。戦歴うんぬんを語っているあたり、軍事派なのだろう。家名に武器が入っている事からも、武門の家だということが判る。

この国では、基本民は皆姓……家名を持つが、使われている文字でその人の出身を表す場合がある。特定の種類の単語は制限が掛けられており、平民には使用できない。その制限の一つが戦いに関する単語の使用である。戦場で功を上げた者に下賜される貴族としての家名であり、太刀、槍等の名称が多い。

ただしその家名を継ぐにも武功・戦功が必要とされるため、一代限

りで家名が変更になる場合も多い。その場合は読みの同じ別な文字に変更される。

役人の話は続いている。

「……で、このたび放置されていた治安の強化を進め、一層の地位の向上を図ると共に、非常時への備えを万全にし、領主としての務めを果たしたいとの所存であられる」

（……悪い予想が当たらなければいいが……）
顔には出さずに内心でため息をつく。

治安の強化とは言うが、ここ数年は飢饉も無く、この辺りは概ね治安がいい。街道も整備されているため、野盗も滅多に出ないし、害獣も森の奥まで行かなければそうそう被害はない。別に放置していた訳ではないはずだ。
非常時への備え、地位の向上と合わせれば、つまりは軍拡、戦力の増強である。

そのための増税及び徴兵が、私の想像する悪い構図だ。

「……新たな取り決めについては、太刀洗興が実際に着任してからとなる。来月の3日に行われる代表会議にて発令される故、それまでは従前どおりの取り決めに従って生活するように」

「承りました」

私が思考している間にも布告は終わったようで、村長が頭を下げている。

「さて、皆様長旅でお疲れでしょうし、まずはこちらでお休みください」

「うむ」

そして村長の案内に従い、役人達が連れ立って村長宅に入っていく。それを見て集まっていた村人も、思い思いに散っていく。機甲馬車の方を見ると、何人かの兵士が……おそらく階級が低いのだろう、見張りについている。疲れているだろうに、背筋を伸ばして立ち続けているあたりは流石だと思う。

余り眺めていても不審に思われるので、さっさと家に帰ることにした。

心を落ち着かせるため、納屋で耕作機械の手入れをすることにする。冬は使わないので、しっかりと手入れをしておかないと錆びや腐食が発生するのだ。錆び止めの油を塗っていると、妹がそばにやってきた。珍しいこともあるものだ。

「兄さん」

そう言つて、隅の椅子に座る。

「なんだ、汚れるぞ」

ぶっきらぼうに言葉をかける。内心可愛がりたくて仕方がないのだが、甘やかしては将来のためにならないので距離をおくようにしている。

それでも妹は笑顔でこっちの作業を眺めており、なんとというか背中がむずがゆくなる。

「別に汚れたっていいじゃない、また洗えばいいのよ。ね、新しい領主様が来てどうなるのかな」

「……前の領主はあれで良い方だった。正直俺たち下々にとっては、

今以上に良くなるとは思えないな。だから……………そんな不安になる必要はない、どうにかしてやる」

答えている途中に不安そうな表情になったため、思わず優しい言葉をかけてしまう。

いかん。もっと冷たくしないと。

「ふふー」

いつの間にやら妹は満面の笑みを浮かべている。

村の男共が揃って骨抜きになりそうな笑顔だが、家族として見慣れている私にはそんなもの効か…………効かない。

うん。思わず勝手に手が撫でてしまっている気もするが効かないのだ。

まったく、これも全部新領主のせいだ。

で、色々と備えをしている間に代表会議とやらが開催されてしまった。

取り決めは多岐にわたるが、今回直接関わる部分について要約すると、以下のようなになる。

1・税率の変更：納める主要作物の割合が5割から6割に上昇。

一家の人数に応じた住民税の引き上げ。

2・防衛力強化：14歳以上の次男以下の男子は兵役に就くか、迷宮の探索に従

事すること。

兵役なら領主の雑軍に、探索なら領主の探索隊が

用意されている。

免除金を払うか特別な事情があればその限りではない。

私は18歳だが、勿論兵役等の対象になる。

仕方ないので準備しておいた計画を実行することにする。

「父さん」

夕食が済んだあと、まだ全員揃っているうちに声をかける。

父親は私の表情を見た後、無言で手を振って母妹にも再度座るように促した。

兄は最初からお茶をすすっている。

全員が座ったことを確認して、話を切り出す。

「今回の…「わかった」」

みなまで言うなとばかりに父親が重々しく頷く。お父さん早い、まだ何も言っていないよ。

次に兄の方を見る。

「じゃあ兄さん、後の事はよろしく頼む」

「ああ、任された。できればこうならぬことを祈っていたけどね」

兄は肩をすくめて、ため息をつく。やはり商人であるため、今回の税の上昇はそうとうに頭が痛いのだろう。

「母さん御免」

「仕方ないわね。体に気を付けるのよ」

母も悲しそうに了解する。

「え？なに？え？」

分かってないのは妹だけだ。

それもそのはず、他の3人は事前に説得済みだが、妹だけは話を切り出せなかったからだ。
我ながらへたれである。

覚悟を決めて、妹の目を見据えながら言う。

「俺は家を出る」

「えええ……！？」

驚愕に目を見開いた表情もまた新鮮で可愛い……なんて考えてる場合じゃない。
説得の時間だ。

「なんで……！」

あ、兵役なの！？ そんなの免除金を払えばいいじゃない、うち
はできるでしょ！？」

「いや、兵役じゃない」

「え？」

「迷宮都市へ行く」

そついうと妹は再度固まる。

「どうして！ あんなに行かないって言っていたのに！！」

淡々と答える。

「家で働いている方が堅実だったからな。だが今回の話で、このまま家にいるのは負担が大きいため、出た方が良いと判断した」

「うー、そういう問題じゃないの！ 馬鹿馬鹿馬鹿！！」

つとめて冷静に説得しようとしたが効をなさず、罵られる始末。でも妹に罵られるというのも案外……いやなんでもない。というか殴るな、痛い。よせ。

ようやく兄から援護が入る。

「まあ騒ぐのは止めなさい、これもしつかりと考えた末の話だ。確かに免除金を払うだけならどうにかなるだろうが、決して少ない負担ではない。そしてこれは他家とも話した末の判断なんだが……おそらく今後税率や免除金は上昇していくだろう。作物を増産するにも限度があるし、増やせば単純に収入が増える訳でも無い。それに……」

「それに、なによ」

険しい表情で妹が唸る。

ここは私から言うべきだろう。

「要はだ、確かにうちは免除金を払う余裕がある。だがそれで俺が居座っていて、他の家は兵役に出て行ったら、正直周りからすればどう思う？」

「むづ……確かに余りいい気はしないかもしれないけど、兄さんは

働き者だし兄さんのおかげで稼いでいるのも分かってるじゃない」

「無用な軋轢はないに越したことはないさ」

（それにお前まで変な目で見させたくはないしな）

心中で呟きながら、妹の頭を撫でる。妹は大人しく撫でられながらも、こちらを睨んでくる。

「で、だ」

それまで沈黙していた父親が言葉を放つ。

「迷宮に行くといっても、お前の事だ、何か考えがあるんだろう？」

「ああ、まず探索隊には入らない。登録して活動していれば問題ないはずだからね」

「ほう、組織の方が色々と安心だとは思いますが、何故だ？」

試すように聞いてくる。全部分かっているような雰囲気だが、本当になんで農民やっているのか不思議な人だ。あ、別に余所から来たとかそういうことはなく、普通に数代前からこの村にいる家系だそうですね。

「探索隊と言えば聞こえはいいけれど、実質は兵士と変わらないらしいからね。強制的に隊を組まされて、定期的に決められた額を納めなきゃいけないとか、自由が少ないのはまっぴらさ」

「それも最初から支援や指導を受けられ、命の危険を減らせると思えば安いものだと思うが」

「それは否定しないよ。ただ、新領主に関する情報だと、下手を打つと契約違反で兵役に回されるという話なんだ。おそらく迷宮を訓練所代わりにしているんじゃないかな」

「なるほど、迷宮でふるいにかけて、使える人材はそのまま投入し、それ以外も兵士として促成するというわけか。地道に訓練するよりも収入はあるし経験はつめると……よく考えられているじゃないか」
なにも憶測だけで話をしている訳ではなく、知り合いの行商人から入手した情報の中にそういう話があったのだ。

「まあお前なら大丈夫だろう。人手が減るのは痛いが……これ以上規模を拡大しなければ問題ないだろう。茸の栽培についてはどうする？」

「あれは前にも話した通り、村の特産にしようと思っていたからね。一応簡単な資料は作っておいたから、後はちょっとコツを現場で説明すればできるはず」

余所にすぐ真似されたら嫌なので、資料にはおおざっぱなやり方しか書いていない。直接人を引き抜くのでない限り、資料で再現するには5年はかかるだろう。そしてその頃には市場を村の品が席巻しているだろう。

父親は大きく頷く。

「そつがないな。ならば後は任せておけ、村長辺りが何か言ってくるかもしれないが、気にしなくていい。やりたいようにやれ」

「ずいぶんと寛容だね？」

「お前ももういい年をした大人だろう。いつまでも家にいないで世の中を見て、荒波に揉まれてこい。……といってもお前が慌てている姿が浮かばないがな」

そう言って苦笑する。

確かに私は基本落ち着いて行動するよう心掛けているが、それは言

い過ぎだと思う。同世代の連中と比べれば、精神的に余裕があるのは確かだが。

「お前の事だ、もう準備はできているのだろうか？　いつ出発する予定だ？」

個人的には父の方が何もかも見通しているようで底が知れない。

「ん、なじみの隊商が2日後にくるはずだから、それに代金払って乗せていってもらっさ」

父親は、それで話は終わりとはかりに茶をすすり始める。再度妹の顔を窺うと、未だに不穏な表情である。兄も母も茶をゆつくりと飲んで目を逸らしており、説得に手を貸してくれる気配はない。長い夜になりそうだ。

結局色々と条件を飲んで、妹が折れるまでに5時間を要したとだけ記しておく。

出立する日になり、私は所持品の確認をしていた。

旅に必要な基本的な持ち物に加え、個人的に細工や狩りなどに使う小道具をまとめてある。

色々前世知識から考案した道具もあるため、かなり重要だ。

護身用に小刀を数本、鉈を一振り。応用が効くため重宝している。

そして鍛冶屋の爺さんに以前作ってもらっていた鋼の棒。村では剣術など習うべくもないが、昔巡礼で来た神官の人に基礎を教えてもらって、後は門番のおじさんにたまに稽古をつけてもらっていた。後は鍛錬用の装備を付ければ準備完了だ。鉄板を仕込んだ革を手足胴に巻き付ける。いざとなれば防具の代わりにもなる優れものだ。ここ数年ずつと付けているため特に負担は感じない、もう少し増やしてもいいかもしれない。

資金も準備はしてある。盗まれないよう財布は鎖で繋いであるが、他にも非常用にあちこちに隠している。

基本的に自分で稼いだ金だ。狩りの腕前は本職並だと自負している。ただし弓に関しては壊滅的だ。直接投擲するなら狙えるのに弓だと明後日の方向へ飛んでいくとはどういうことか。だから弓は持っていけないじゃない。

玄関を出ると、家族が揃って待っていた。

「別に待つてなくていいのに」

胸にこみ上げてくる物を押さえながら、敢えてそっけなく言う。

「ふん、何を言っておるかこの餓鬼が。あるいはもう会えなくなるかもしれないというのに見送らない親がいるか」

「そうそう、幾つになっても可愛い息子なのは変わらないのよ」

「そういうことだ」

「……約束、忘れないでよね」

口々に言う中、妹だけは涙目になりながら、何かを差し出してくる。

「これは？」

「お守り。帰ってこなかったら一生許さないんだから」

睨みながらお守りを差し出してくる。気持ちは非常に嬉しいので有り難く受け取っておく。

手作りだろうか、縫い目がやや不揃いで温かみを感じさせる。

お守りを懐、心臓の上の位置にしまい、家族に向き直る。

「じゃあ、行ってくる」

別れの言葉はあえて軽く。

私の、冒険の始まりだ。

ことん ことん

馬車で揺られながら思いを馳せる。

色々理屈はこねたが、残ろうと思えば確かに残れたはずだ。

では何故、今自分はここにいるのか？

地道な生き方が一番だと思っていた。今でもそれは変わらない。未来の夢は見ないつもりだった。実際見ているのは過去の夢だ。

では何故、今自分はここにいるのか？
憧れはしても、夢は見ない。憧れは昔も今も、ある。

「何だ、簡単なことじゃないか」

思わず苦笑する。

「男は幾つになっても、憧れには勝てないんだな」

心のどこかで、村に居なくていい理由を探していたのかもしれない。
ひとまずは迷宮に挑戦するが、いずれは、もっと世界を見てみたい
と思う。

「ま、何事も地道に行こうか」

こうして私は迷宮に挑むことになった。

3・布告とその後（後書き）

実はこのプロローグ、無くてもいいんですよ……。都市に着いた、さあ始めようでも良かったんですが、テンプレって嫌なので。

ああ導入描くのは難しい。

4 ・正しい都市での暮らし方（前書き）

いつ……ギルドへの登録などというテンプレを書く……錯覚した
……？

今回も説明分が多いです。注意。

4・正しい都市での暮らし方

『迷宮とは何か。』

そのとらえ方は様々であるが、古い言い方では、災厄を封じ込めた「穴」と言われている。

その由来として、世界に多々ある神話において、ほぼ共通している描写が存在する。それが神による災いの封印である。世界を脅かす災いを地の底深く封じ込めたとされているのだ。近年では、研究を進めた学者達による統一見解として、迷宮は世界の「歪み」を吸収している場所だとされている。

歪みとは、太古の昔より魔物の発生源とされていて、また様々な災いを生みだす「災害」である。一説には世界の裏側への入り口、あるいは異界との衝突点であるとも言われているが、これについては未だ結論が出ていない。この歪みを消すには、調律者という存在が必要となるが、それについては後述したい。

さて、つまり迷宮はおそらくは神々もしくはそれに匹敵する存在の造り出した、世界の安定装置だということだ。周辺の歪みを吸収するということは、逆に迷宮の周囲には歪みが発生しないということである。歪みの量は発生する魔物の強さに関係し、また魔物も歪みから力を得るため、結果として迷宮周辺は強い魔物が存在しない。そのため、人は迷宮周辺に集まって集落を作り、国へと発展させてきた。それがこの世界の歴史である。

したがって、古い国には迷宮が存在する。代表例としては、“灼熱洞の迷宮”を持つアグナス公国、“深き水の迷宮”を持つポセイディア共和国、“幽玄の魔宮”を擁する清華帝国、千年を超える歴史は迷宮が造ってきたものだと言っても過言ではないだろう。

そして、迷宮を抱える国はほぼ例外なく強国である。迷宮から産出される多様な素材を目当てに経済が発達し、挑むことによって戦士の力は上がる。勿論、迷宮を持たざる国でも強国は存在するが、その質の違いとして大きく上げられるのは“加護”と“恩恵”である」

『東

域迷宮見聞録』 著：芦屋 清明

「ふむ……」

本の頁を捲りながら、その内容に感心する。

これまで情報という形である程度は知っていたものの、きちんと纏められた内容を読むのは非常に有意義だ。

整理された知識があるとないつでは大違いなのだ。

内容を更に読み進めようとした時、声がかかる。

「すいませーん」

素早く本に琴を挟んで脇に置き、笑顔で相手に向き直る。

「はい、いらつしゃい！」

「黒胡椒とチーズを1つずつ」

「はい、お待ちください」

蒸し器から芋を取り出し適当な大きさに切り、特製バターを絡めて器に入れる。大粒の黒胡椒をかけたものと特製粉チーズをかけたものを用意し、匙を添えて出来上がりだ。

「はい、計銅40になります!」

代金を受け取り、笑顔で客に商品を渡す。

客はそのまま広場の方に行き、連れと思しき人と一緒に食べ始める。さりげなく観察するが、表情からすれば手応えは悪くなさそうだ。

「うむ、売れ行きは上々だな」

「いや、それでいいのかよ」

呟いた独り言に返答を返される。声の方を見ると、呆れたような顔をした同年代の男が立っていた。

「子栄^{しえい}か、いつ来たんだ?」

「今日昼に着いた、それでお前を探してみればこの有様だ……説明してみる」

子栄は長い付き合いの友人だ。隊商長の息子で、幼いころは村に来るたびに遊んでいた。ここ数年は個人的な取引もしており、村にいた時の情報源の一つでもある。この蓬萊国ではなく隣国清華の生まれで、外の事には色々詳しい。

余談だが、この都市にまで乗せてもらったのもこいつの馬車だ。

それが約2週間前の話。

「言ってる事が今一よく判らん、西方語でいつてくれんか?」

「ゆ……あー……ユーアーフル!」

「何だと!」

「つまり迷宮探索に来たのに露店で食い物売ってるとは馬鹿かと言いたい!」

「要約しすぎだ阿保！」

まあ冗談も言い合える仲だが、ふざけるのもこれぐらいにしよう。ちなみにこの世界の言語は大別して3種類に分けられる。共通語として東方語・西方語・南方語があり、他に各々種族固有の言語、神々が使っていたとも言われる古代語がある。

私は東方語の他は西方語を少し齧った程度だ。今古代語については本を買って勉強している。迷宮で必要だからだ。

「まあ落ち着け、とりあえず食ってみろ」

懐柔するため、とりあえず商品である芋バターを差し出す。

「ええいこんなもので、……むぐむぐ……」

沈黙する子栄。険しい表情をしながらもよく味わっているようだ。趣味が食べ歩きなので、これで中々味にはうるさい男なのだ。

「芋は普通だな……だが絡めてあるバターが違う。通常出回っているものはもつと匂いがきつい上にべたつくが、こいつは風味が軽くてさらつとしてやがる……しかも旨味が深い……。それがふかした芋の匂いと上手く競合して、実に食欲をそそる匂いだ……！」

美食家のような解説をしているが、これもいつものことである。昔、村の収穫祭で出た料理でも延々語っていた記憶がある。うなっている奴に、別な器を差し出す。

「くく……それだけではない、これをかけてみるがいい……」
「黒胡椒……だと!? くっ……やってやろうじゃないか……」

悪人のような笑みを浮かべながら奴の感想を待つ。

「この刺激……！ 油分でややしつこくなった口を引き締め、さらに食欲をそそる！」

あっという間に食べ終えてしまった。

子栄は口をぬぐい、一息つくところを睨みつける。

「これで懐柔したつもりか！」

「いやそんな大袈裟な、美味しくなかったか？」

「いや、美味しいのは認めよう。しかしそれはまた別の話だ」

「まあ。そうだな」

とりあえず夕方なので店じまいを始め、機材を片付けながら、話を続ける。

「まあ簡単に言うただな、迷宮探索の方も忘れちゃいけないさ。

来て早々協会への登録は済ませてあるし、いつでも探索には行ける状態だ」

「ああ、そこまではいい」

「で、探索に入れるからと言って何で、焦って危険に飛び込まなきゃいけない？」

「……」

「協会に登録すれば、協会の方の資料や、図書館の利用が可能になる。実戦に勝る学習はないけれど、命を危険にさらす以上、準備に時間をかけ過ぎるということはないと思うよ。確かに長期間探索しなければ、罰則や資格剥奪があるけれどね」

そう言うと、子栄の目には理解の色が浮かぶ。

「昔から石橋を叩いて渡るような奴だったよお前は……、流石に2週間経ってまだ潜らないのは異常だと思うが。まあその展開で行くと予想は付く。確かに探索者は職業じゃない、資格だ。つまりある程度以上の実績がないと、そこいらのごろつきと変わらない無職というわけだな？」

当然迷宮に入り始めた無職と、評判の良い屋台のお兄さんとは世間様の信用が違う……そう言いたいんだろう？

生活の基盤を確保した上で探索を始める……まして金はあって困ることはないし、利益率は低いが安全に稼げるならなおさらだな」

見事。

幼い頃から商売に関わっているだけあって、世間を良く理解している。

勿論、一気に迷宮を踏破できるだけの強さがあればそんなことしなくてもいいのだが、生憎と一村人に過ぎない自分ではそうはいかない。安全と安定、時々浪漫が一番だ。

もともと、先立つものが無ければすぐ迷宮に潜るしかないのだろうが。

ただ、今回の露店に関しては道楽ではない。荷物を担ぎながら、子栄に問いかけてみる。

「やれ解説の必要も無いとは寂しいな。ところでこの商品の価値について、味だけじゃない冷静な評価を聞きたい」

「この芋バターについてか？」

そうだな……俺個人の味の評価はさっき語った通りだが、値段はほどほど……安くはないが高くもない、ちよつとした嗜好品だな。この国じゃバターは余り使われないから、それを前面に押し出した商品として個性もある。芋を使っていて温まる商品だから、寒くなつてからより売れるだろうな。難点としては、高齢の人は習慣的にバ

ターを受け付けない人が多いため、売れるのは比較的若い層に限定される辺りか。勿論、懷に余裕のできた探索者にも売れるだろうな」

元々この国では、作物から油が採れるせいか、動物の乳から作るバターというものは無かった。まあそれでも200年程前には国外から流通していたが、匂いが強く、保存性も悪いため敬遠されていたのだ。近年は自前で作ったバターを調味料として使うなど、色々な店でも評価され始めているが、一般家庭にはまだまだ普及していない。

「うん、その辺は最初の1週間で調査したからな。評判の露店を調べて、なるだけ独自色を出した商品を出すことにしたのさ。年配層はそもそも外で食べ歩くことは少ないだろうから対象から外した」

「お前商人になった方が良かったんじゃないか？」

呆れたように言われた。

肩をすくめながら、片づけも終わったので、一緒に歩き出す。露店の機材は台車に乗せて運んでいる。

「重くないのか？」

「精々10貫（1貫 3.75kg）程度の重さだ、問題ない。収穫物を満載した荷車を運んでみる、この比じゃないぞ？」

「あれはそもそも人が運ぶものじゃないだろう。筋肉馬鹿め」

「失礼な。俺は鍛えてはいるがそんなむきむきじゃない」

「お前は着やせしているからな……大体の奴は見た目に騙されるよな」

適当に会話をしながら歩いていると、十字路に差し掛かったので足を止めた。

「ああ、道が違つから今日はこれでな」

「うん？ 宿じゃないのか？」

はつきり言えば宿屋は高い。まあ食事やら掃除やらなにやら色々便利だし、あちこちふらついている連中ならいいのだろうが。

私は今集合住宅の部屋を借りている。契約金などかかるが、長期的にはこちらの方が安いし荷物も大量に置ける。

「その方が合理的じゃないか、白鯨荘っていうところの3番だ。夜は大体いるから、何かあつたら訪ねてきてくれ。こっちにはしばらくいるんだろう？」

「そうだな、大口の取引があるから、1週間は留まる予定だ。お前がここに定住するのなら、俺も支店の方に移動しようかねえ」

「個人的にはあちこち回ってくれていた方が色んな情報があつて助かるんだが……好きにすればいいさ」

子栄の属する隊商は、正確には馬超商会というところの一部門である。各地の動向を調べたり、流行りの情報をいち早く見つけたりと重要な部門だ。各地に支店があり、近隣数か国に店を構えている。当然、この迷宮都市にも支店がある。

扱う商品は、基本的には食料品や雑貨、そして馬であり、中堅規模の組織らしい。

せつかなので、別れる前に商談を持ちかける。

「そうだ、北方種の芋を仕入りたいが、扱っていたよな？」

「北方種？……量は多くないが、あつたはずだ。どの程度だ？」

すぐに商売人の表情になり、帳面を取り出してくる。

「余剰分でいい。露店程度で使用する量だからな。今は在庫がある

から、来週初めまでに入れば問題ない」

言いながら必要量と希望価格を書きつける。

「ふん……量は大丈夫だ、しかしこれではな……」

即座に価格を修正される。

「友人にずいぶんと高くするものだな？　もう新物が出始めているから在庫はもつと勉強できるだろう？」

更に修正して返す。

「友人といえど客は客。優先はしても値段で特別扱いはできないな……北方種なんて他の店ではそう扱ってないはずだ、これで妥協しろ」

修正される。

手加減なしの言葉に思わず笑いながら、また修正する。

「今後も定期的に仕入れるからさ……、開業祝いとでも考えてくれ」
「何を言っている……ここまでだ」

変わった値段を見て、頷く。

付き合いを考えればこれで妥協すべきだろう。売れ行きを考えればすぐに回収できる。

「よし、手を打とう」

「まったく、どこをどう見ても探索者じゃないな……」

子栄は呆れている。正直否定はできない。

「まあ探索はするが、本業を探索にする気はないぞ？ 探索は副業で」

「おい」

今の所、本業：露店の料理人、副業：迷宮の探索の予定である。本業は変わるかもしれない。

芋の仕入れについては後で書類をまとめることにして、私は家路についた。

「ふっ」

物置に荷物を置き、私はゆったりとお茶を飲んでいる。

帳簿に売り上げを記録しながら、今後の（商売の）展開について思考を整理する。

金の単位は金・銀・銅の3種。金1〃銀100〃銅10000の計算になる。貨幣にも細かい種類があり、価値の低い方から黄銅、白銅、灰銀、青銀、朱金、白金がある。銅1で黄銅1枚、銅10で白銅1枚を表し、銀・金も同様の計算になる。地域によって呼び方は違うが、貨幣自体は世界共通とされている。ちなみにこの都市の標準的な飯屋で出る夕食が、銅80〜100程度である（酒無し）。

売り上げについては問題なく、順調にいけば初期投資も3ヶ月程度で回収できるだろう。

資金の回収は、評判次第ではもっと早いかもしれない。ただ競合店が出てくる可能性も十分にあるので、樂觀視はできないだろう。負ける気はないが。

北方種の芋がバターとの相性が良いと思うので、新メニューを考えるのはそれからでも遅くはない。

今後の予定としては、露店を週4日、迷宮探索を週末2日、休日1日のサイクルで行おうと思っている。もし探索する階層が深くなれば、2日程度では済まないのだろうが、それはずっと先の話なので問題は無い。週末探索者か、良い響きだ（主観）

初期資金を武具や道具に使わずに、こんなことに使うのも私位だろうか。家賃・家具も含めて、既に金10枚以上消費している。正直手持ち資金は後僅かだ、父からの賤別が無ければ足りなかっただろう。本当の正解は、命の危険を僅かでも減らすために、装備の底上げに使うことだとは分かっている。

「もっと、色々、やってみたいじゃないか」

これが本音だ。

他人がやっていないことがあるとやりたくなる。当初はこんなことをする予定はなかったのだが、露店を眺めているうちにいつの間にか構想を練っていた。

その結果がこれだよ！

思っていた以上に、村を出て開放的になっていたらしい。もっとも一度始めた以上はそうそう投げ出すつもりはない。

記録を終えると、姿勢を崩して傍らに置いてあつた本を開く。

題名は『迷宮の歪みと探索者の成長について』

探索を引退した学者が書いた本だ。少し古いが、理論は現在も主流の説として支持されているらしい。

まだ前書きしか読んでいないが、興味深い内容で、寝不足にならないか心配である。

明日はようやく迷宮に行く予定なのだ。

「明日から本気出す」

4 ・正しい都市での暮らし方（後書き）

まだだ、まだ（迷宮には）入らんよ！
次回は流石に迷宮パートになる予定です。

5・迷宮と成長と年齢と（前書き）

迷宮です。多少泥臭いかもしれませんが、戦闘描写が凄く苦手です。

あと相変わらず説明が多いです。

5・迷宮と成長と年齢と

炎が揺れるたびに、迷宮はその姿を変える。

揺らめく影に注意しながら、私は石造りの通路を進んでいく。

ここは迷宮第1層地下1階、通称『戯れを排除する石の迷宮』である。10階層からなる石造りの迷宮で、ここを突破できるか否かで探索者としての資質が分けられるという。

潜ってから1時間程経つが、他の探索者の姿はまだ見ていない。朝早い時間帯のせいもあるだろうが、そもそも迷宮の最上部であるこの辺りに歪みは少なく、魔物も滅多に発生しないのである。稼ぐにも効率が悪いため、初心者でも雰囲気慣れたらすぐに下へ降りてしまふのだ。入り口から最短経路で進めば、10分程度で地下2階への階段に着くだろう。

「行き止まりか……地図通りだ」

協会では、踏破された階層の地図をある程度公開している。料金はかかるが、第1層程度なら大した額ではなく、当然私も購入している。

今は買った地図の内容を確かめているところだ。

「迷宮」は変化する。

歪みは魔物を生み出すと同時に、無機物に対しても影響を与えている。地上に発生する歪みであれば拡散してそれほどの影響はないが、ここは歪みの集まる迷宮。常に構造は変化し続けているのだ。

もっとも、先に述べたとおり最上部は歪みがほとんど無いので、構

造変化も滅多に発生しない。だからわざわざ1階層で地図を調べる者も普通いない。

最短経路が確保されていれば気にする必要は無いからだ。

「誰もやらないという話を聞くと、やりたくなる」

呟いて地図に印を付ける。

確かに変化は無く、魔物もいなかったが、無駄な時間だとは思っていない。数は少ないものの実際に仕掛けられていた罠の跡や、あちこちに刻まれた古代文字を見ることができた。敵に襲われずに迷宮の観察ができるのは悪くない、はずだ。

ふとカンテラの油残量を確かめる。まだ2割程度しか減っていないかったので、そのままにして引き続き前方を照らしていく。これはここに来てから購入した物で、どこを掴んでも熱くなく、かなりの範囲で明るさの調節も可能で頑丈な一品である。これより上の灯りとなると、術具になってしまい値段が跳ね上がる。買えないことはなかったが、残金的に厳しい値段だったので諦めた。

当然だが迷宮は暗闇である。

一部の階層では天然の照明があるとも聞くが、大体は暗闇に包まれている。迷宮でソロが厳しい理由の一つが、この照明だ。片手を塞ぎ、魔物を呼び寄せてしまう。魔物の大半は当然のように明かりなしでも行動できるので、こちらは奇襲できずに奇襲されるばかりである。そして無くなってしまえば文字通り手探りで進む他はない。私はかなり夜目が利く方だが、光源が全く無い場所ではどうしようもない。はつきり言えば武装以上に生命線となる道具なのだ。

「恩恵」によつては別らしいが……。

地下1階に変化が無いことは確認したので、下に降りることにする。全く変化が無かった訳ではなく、通路に浅い穴が出来ていたりした。長らく誰も来ていないだろうからもしかしたら何かあるかもしれないと思ったが、別に何も無かった。

大事な事だが、都合よく新しい発見なんて無かった。

無駄ではないと自分を誤魔化していたけれど、無駄な体力を使ったかもしれない。

情報によれば、まともに敵が出てくるのは地下3階かららしい。迷宮は5階毎に歪みが溜まりやすくなっているらしく、魔物の出現頻度もそれに比例する。後は上下2階分くらい魔物が移動するので、本格的な戦闘は地下3階からというわけだ。

今度は警戒しながらも最短経路を辿ることにし、15分くらいで地下3階への階段へ辿り着いた。

降りる前に装備を点検していると、階段から足音が聞こえてきた。話し声も聴こえるため人間だろうが、用心して棒は手に持っておく。

「……ここまで来ちまえば後は餓鬼だつて辿り着けらあ」

「まったくだ、早くいつもの店で一杯やろうぜ……ん？」

階段から上がってきたのは男2人組だ。

別に隠れていた訳ではないのですぐにこちらに気付き、探るような視線を向けてくる。

男に見られていても嬉しくはないので、武器を仕舞いながら自分から話しかけることにする。

「どうも、景気が良さそうですね」

「ふん……あんた見ない顔だな」

男2人のうち、やや体格のいい方が剣の柄に手を掛けつつ聞いてくる。

小柄な方は一步下がって様子を見ているようだ。

両手を広げて敵意のないことを示しつつ、脇によって道を開ける。

「こちらには最近来ましてね、宜しく願いますよ」

気負わず、ゆったりとした口調で話す。舐められないように視線はしっかりと相手を見る。

これが初心者に多い、成人したばかりの14歳なら虚勢に見えるかもしれないが、それでも農作業と鍛錬で鍛えた18歳。肉体にだけは自信がある。

「そうかい、俺らの邪魔しないんなら構わんぜ」

相手は剣から手を放して笑う。

後ろに下がっていたもう1人も、やや警戒を緩めて笑みを浮かべる。

「今は気分がいいから……通行料は負けといてやるよ」

「ああ……それは儲けものですね」

冗談のように言われた言葉に、おどけながら言葉を返す。

勿論迷宮に通行料というものは存在しないが、いわば暗黙の了解というものが存在する。恐らくこの2人組、第1層を縄張りにする「狩人」なのだろう。迷宮では、下に進まずに実力に見合うよりもずっと浅い階層で魔物を倒すことを目的にした者達がいて、積極的な探索をしないことから「狩人」と呼ばれている。大体歪みの集中する階にいて、それぞれで縄張りを決めている、らしい。そこから揶揄するように生まれたのが、通行料という言葉だ。

正直敵対することに意味は無いので、冗談として軽く流しておく。
初心者は通行料という言葉を知らないことが多いので、ここで慌てるのだろ。私も都市に来るまでは知らなかったが、その辺抜かりなく聞き込んである。

「あんた……少し変わってるな？ まあいい、俺たちはもう行くから気を付けるよ」

「そうだな、腹減ってたまんねえな、じゃあな」

こちらへの興味はすぐに無くなったようで、2人組みはさっさと行ってしまった。

私も降りることにする。

地下3階になり、ようやく魔物……の死体を見かけた。さっき会った連中が通ったのなら当然か。
魔物の死体は死後一定時間経つと歪みによって分解され、新たな魔物の材料となるらしい。人の死体は生ける屍に変化してしまうそうだ。

こちら辺で出現するのは大蝙蝠、粘体生物、猫又だと聞いている。
スライムの核と、猫又の尾が割と良い値段で売れるらしい。大蝙蝠は特に売れる部位はないそうだ。できればスライムには会いたくない、棒のような打撃武器は効果が薄いのだ。

20分程度歩いた辺りで、微かに後ろから水が流れるような音が聞こえてきた。

足音を殺していなかったら聞き逃していたらう。

注意しながら後ろを確認すると、天井からぐにやりと半透明のスライムが垂れ落ちて来る所だった。

「早速お出ましか……」

手早く通路の隅にカンテラを置き、攻撃に備える……どころか先手必勝。核が降りてきてスライムの身体が伸びきった所に踏み込み、棒で一氣に振りぬく。
薄くなっていた粘液を突き破り、棒は核をとらえて 弾き出す。
核の無くなったスライムの身体は、結合が緩くなりゆっくりと崩れていく。
もはやただの粘液に過ぎない。

「まあ……当然だよな」

そして弾き出された核は、壁にぶつかって砕け散っていた。勿論売れない。
ため息をついた所で、突然、体がこれまでに味わったことのない感覚に襲われる。
筋肉が、骨が、肉が、一瞬軋みを上げる。

「……………っ！」

昨晚呼んだ本で知識として知ってはいたが、これは。

「これが……歪むってことか」

魔物は、歪みから発生したためか、体内にも歪みを内包している。

その歪みが、魔物を殺すことで意思があるかのように倒した者に入り込んできて、その肉体に刻まれた方向性に沿って、倒した者の存在を“歪ませる”。この歪みの作用により、鍛錬では決して得られない力を人は、手にすることが出来る。そしてただ肉体が強靱になるだけではなく、歪みは様々な特殊能力をも発生させていく。

なぜ迷宮を抱える国は強いのか？

それは効率よく魔物を狩ることができるからだ。迷宮の働きもあるのか、外で魔物を倒した場合に比べ、倒した者が得られる歪みの量は倍以上だと言われている。外界では魔物を離れた歪みは拡散しやすいためだと言われている。

もつとも、歪みを受けて強くなるということは、人が魔物に近づいていくのと同義であるともいえる。

歪みにより発生した特殊能力は、協会では「タレント恩恵」と公称されているが、迷宮を悪とする主義者などは、能力を「変異」と呼んで忌み嫌っている。

「結構痛いな……成長した体には厳しいねえ」

学説によれば、歪みの影響は、その肉体の成熟度合いによって異なるという。

未成熟な肉体の方が柔軟に歪みやすい。若い方がより特化した肉体に成長し易く、同時に恩恵を得易いという訳だ。しかも苦痛どころか快感を覚える者もいるようで、快感を得ることを目的とする「歪曲中毒者」が若い探索者の間で増加しているという話もある。

一方肉体の成長が止まった者、あるいは既に高水準で肉体を鍛えていた者は、肉体が歪みにくいためか苦痛を覚えるという。また既に

肉体の方向性がほぼ定まっているため、特化した成長が期待できない。恩恵も発生率が低くなる傾向にある。まわりくどい言い方がされているが、簡単に言うと以下のようなもの。

成長期の若者：目指す方向に成長し易いよ！色んな恩恵を得易いよ！魔物を倒

すのが気持ちいい場合もあるよ！

鍛錬済み大人：今の能力のバランスでしか成長しないよ。恩恵も若者に比べると

得難いよ。魔物を倒すと痛みを感じるよ。

よって協会も若者の探索を奨励している。

歪みの吸収については、余り言葉の響きが良くないため、協会では「経験値の上昇」と表現している。魔物を倒す行為を糧にする……即ち経験を積み重ねる、ということらしい。

恩恵についてもある程度経験則的に分析は進んでいるらしく、日頃をしていると、 $x \times x$ を倒し続けていると 能力が手に入る確率が高いという具合である。

私はまだ成長期だと思うのだが、痛みを感じるあたり筋力的には限界だったのかもしれない。

もし恩恵が得られるとしたら、「暗視」や「歪曲感知」が欲しいものだ。暗視は文字通り暗闇でも見えるようになる灯りいらすの能力。歪曲感知は歪みの発生を感じられるようになる能力である。期待せずに地道に頑張っていこう。

気を取り直して更に進んでいくと、下への階段が見えてきた。

思っていたよりあっさりと到達したもののだが、油断は禁物である。
地下4、5階になれば一気に魔物との遭遇率は跳ね上がり、道も複雑になってくる。この迷宮、下層へ行けば行くほど広く、複雑な構造になるらしい。現在確定している最前線は、地下180階付近で、そこまで行くと1階進むのに3日とかざらだという話だ。

降りる前に耳を澄まし、階下の様子を窺う。

(……………)

特に気配は無いため、慎重に降りることにする。

階段を降りると、半円形の広場の様な空間に出た。特に魔物の影も無いので、そのまま進もうとして

「道が……無い……」

地図上での通路が影も形も無い壁になっている。いや、よく見れば周囲にくらべて汚れが無く、新しく塞がれたのだと判る。

注意しながら棒で軽く叩いてみる。もっと下層には壁に擬態する魔物もいるため、一応の確認だ。

「当然、壁だな」

やはり歪みで道が塞がれただけらしい。音からすればそこそこ厚く、無理やり破壊して進むのは得策ではない。

「仕方ない迂回するか……せつかくだから俺はこの左の道を選ぶぜ」

地図を確認し、左手にある大きな目の通路を進むことにする。
相変わらずの石造りの通路だが、情報では罫の頻度が増すため警戒する。左手にランタンを、右手に棒を構えて怪しい個所を棒で確認しながら進む。

武器としてだけではなく、色々な用途に使える棒。もつと流行つてもいいと思うのだが。

しばらくして足を止める。

灯りに照らされて、前方の石畳に僅かに影が出来ている。通路の3分の2程度の幅か。

好奇心から、棒を該当する石畳の部分に当て、力を加える。

すると、いともあっさりと石畳が崩れ落ち、落とし穴の全貌をさらした。

深さはそれほどでもない。崩れた石に巻き込まれて落下するため骨折位はするだろうが、頭部を強打するなど運が悪くなければ命に係わる怪我は負わないだろう。

とはいえソロだと命に係わる。安全確認の重要性を再認識し、残った足場を進んでいく。

「ふっ」

顔を目掛けて飛び掛かってきた猫又を棒で叩き落とし、足に噛みついた別な一匹を、足を振ってそのまま壁に叩きつける。牙は鉄板で通らないため問題ない。こちらが動いた隙を狙って飛び掛かってきた三匹目は腕に噛みつかせて防ぐ。鉄板で以下略。

二又になっっている尾を掴み、無理やり腕から引きはがして床に頭から叩きつける。二匹が動かないことを確認し、最初に棒で迎撃した一匹がまだもがいていたので、かけよって踏みつける。この靴にも鉄板は仕込んであって重量はかなりのものである。

「ふう……」

掻いてもいない汗をぬぐいながら、鉈に持ち替えてとどめと換金素材である尾の切り取りを行う。まあ、既に二匹は死んでいたが。

尾は、汚れないよう紙に包んで袋にしまう。

部屋に踏み込んで猫又三匹に襲われた時は驚いたが、慌てなければ問題のない敵である。装備の整っていないひ弱な初心者なら、猫特有の素早さに惑わされて苦労するかもしれないが、牙が通らなければただのでかい猫、落ち着いて処理すればいい。

村にいた時に、狩りに行って熊と一対一で戦った状況に比べればどうということはない。

少々優雅さに欠ける戦い方ではあったかと思うが、現実はこのものだ。

辺りを見回すと、部屋の奥に何かがあることに気付いた。

慎重に近づいて確認する。

猫を……かたどった置物のようだ。大きさは両手で持てる程度。全体は銀色の材質で出来ていて、目の部分に琥珀色の宝石？が嵌め込んでいる。

周囲に罨が無いかに注意しつつ、棒で触ってみる。

何も起きない。

強く押してみる。

あ、置物が倒れた。

問題は無いようなので、素手で触らないようにしながら持ち上げて

みる。重さはそこそこだが、純銀と仮定した程の重さはない。混ざりものが多いか、内部が空洞なのだろう。協会で鑑定してもらったにして、これも紙にくるんで袋に入れる。

「猫の置物と猫又か」

置物があつたから猫又がいたのか、猫又が置物を持ってきたのか。考えていても分からないので、引き続き先に進む。

もっとも置物の効果については身をもつてすぐに知ることになる。

「にゃーにゃーうるさいっ！」

今度は二匹まとめて棒で跳ね飛ばす。

置物を拾ってから、何故か猫又が集まってくる。これで今日仕留めた猫又は三十匹になる。

怪我は無いが、来ている服があちこち裂けてしまっている。

断続的に数匹ずつ襲ってくるので、おちおち休んでもいられない。袋は既に猫又の尾で満杯になっている。

いきなり結構な数の魔物を倒したせいかな、体の軋みが続いていて、正直精神的に辛い。

「はあ……ようやく階段か」

明らかに猫又に襲われるのが判った時点で、地上に戻ることにした。一瞬で地上に戻るような便利な道具は恐ろしく高価なので、地道に歩いて引き返すしかないのだ、少し早いかな、位で切り上げるのが不測の事態も考慮して最善だろう。

塞がれている部分がそのままの確認し、階段を上っていく。
念のためカンテラの油を確認すると、残り三割程度になっていたが、
予備もあるため帰る分には問題ないだろう。

地下三階を足早に戻っていく。

流石にここでは、猫も出てこないようだ。恐らくは周囲にいる個体
を引き寄せているのだろう。いなければ大丈夫というわけだ。

地下2階への階段に近づいてきたところで、戦闘音が聞こえてくる。
一瞬、どうしようか迷ったが、そのまま進むことにする。他の探索
者の戦闘を観察するのも悪くないと思ったからだ。

（ま、着く前に終わってなければだけどね）

曲がり角の向こうに灯りが見えたため、棒を構え直して角を曲がる。
そこにいたのは2人の探索者、正確には少年1人に少女1人か。大
蝙蝠が少女の矢を避けた所に、少年が槍を振るって翼を裂く。悲鳴
を上げて大蝙蝠が落ち、間髪を入れずに槍が突き立てられる。
良い連携だ。

周囲に三匹の大蝙蝠が転がっているのを確認して思わず感心する。
と、視界の端に蠢くものが見えたため、気を緩めている2人に向か
って警告を叫ぶ。

「おい、後ろだ！」

私の方を見る2人。
こっちじゃなくて後ろだ、いや、間に合わない。少女の後ろに覆い
かぶさるように半透明の身体が迫っている。

一拍遅れて、少年が少女の後ろのスライムに気付いた。

「アリー逃げる！」

「きゃ……！？」

少女に駆け寄ろうとするが、奴が覆いかぶさる方が早いだろう。ようやく少女が事態を理解し、逃げようとするも間に合わない。

当然私が走っても間に合わないため、咄嗟に強く踏み込んで棒を回転させて投擲する。

（当たれ……！）

間一髪で回転力がスライムを弾き飛ばすが、倒すことはできない。しかしその瞬間に少年が少女とスライムの間に走り込み、大きく形状を崩したスライムに決るように槍を突き立てていく。狙いは核のようだ。

「せいっ！」

槍の穂先が核をとらえたのか、すぐにスライムの身体が力を失っていく。

その光景を見て、私はため息を吐きながら、自分の棒を回収しに近づいていく。同時に他の敵がいなかったかどうかの警戒も忘れない。

「大丈夫だったか」

声をかけると、少年少女も安堵の表情を浮かべながらこちらを向く。

「大丈夫です。どうも有り難うございました」

「有難うございます」

礼を言って頭を下げてきた。探索などという荒事には珍しい礼儀正

しさだ。

年の頃は13か4だろう。顔立ちがよく似ているから双子か兄妹と
いったところか。装備は上等ではないが最低限は揃っているような
ので、食い詰めた孤児というわけでもなさそうだ。むしろ丁寧な物
腰からすれば、そこそこ裕福な育ちだと判断できる。

「どういたしまして、礼はいらないよ」

余り他人の過去を詮索するのはマナー違反なので、言葉は最低限に
して、棒を拾い上げる。

疲れていて早く帰りたいため、手早く別れの言葉を告げる。

「じゃあ、気を付けてな。幸運を祈ってるよ」

そう言つて背を向けると、2人は驚いたようで、慌てた声で聞いて
きた。

「あつ、すみません、お名前は？ 僕は慶斗といいます」

「私は愛紗です」

名乗られたら流石に答えない訳にはいかない。

「諒二だ、縁があつたらまた会おうや」

最低限答えて、今度こそ帰途に着く。

名残惜しそうな雰囲気の後ろから伝わってくるが、無視する。余り
最初から他人に甘えてはいけないと思うのだ。私自身も。

あの2人、名前と顔立ちが少し変わっていたから、もしかしたら西
方からの移民の家計かもしれない。気にしても仕方の無いことだが。

その後、地上に戻るまでに2組の探索者とすれちがったが、軽く挨拶しただけでこれといったトラブルは無かった。
外に出て、日の光を浴び、大きく深呼吸をする。

「ふう、地上は空気が上手い……」

迷宮内の空気については謎が多い。何故澱まないのか、人が呼吸できるのか。未だ解明されていないが、これも歪みが関わっているのだろうと推測されている。

正直良く分からないことは全部歪みのせいにしてるだけじゃないかと私は思っている。

とつと部屋に戻って休みたい所だが、先に協会に寄ることにする。登録してから何度か脚を運んではいるが、資料の閲覧ばかりで探索の報告はしていないのだ。新人が長期間報告しないのは良い顔をされないだろうから、そろそろ窓口に顔を出す必要がある。素材の換金と、置物の鑑定も一緒に済ませておこう。

「経験値の上昇」についても、話を聞いておきたい。ここまで体に負担がかかるのは予想外だった。

私は迷宮を出た足で、探索者協会へと向かった。

5・迷宮と成長と年齢と（後書き）

説明がくどかったですかね？

ゲーム的な部分を無理やり説明したらこうなりました。
流石にレベルの説明は無理でした。

6・探索者支援協会（前書き）

ようやくフルネームが出た主人公（笑）

8 / 1 0 別視点部分を閑話1に移動しました。

6・探索者支援協会

探索者支援協会は、その性質上迷宮出入り口からすぐの場所にある。出入り口から向かって正面、赤煉瓦で造られた3階建ての建物がそれだ。

正面の入り口は常にかかれており、探索者だけでなく商人や役人も頻繁に出入りしている。

ここが、迷宮で栄えているこの街の中心とも言えるだろう。

私は協会の入り口を潜り、広いロビーに入る。

左側に総合受付及び各窓口、右側に買取・鑑定所と資料室への扉がある。中央は吹き抜けになっていて、やや左側に各種掲示板、やや右側に利用者の談話スペース、奥に上階への広い階段があり、階段の影には倉庫への扉が隠れている。2階は会議室・事務室・書庫、3階は幹部の執務室があるらしい。

という説明を最初に受けた。

最初に来た時受付が若い女性だけだったので、余計な事を詮索されないよう伶俐な雰囲気的女性に登録を頼んだのだが、その見た目に似合わず（失礼）丁寧な説明をしてくれて非常に有り難かった。

その後資料閲覧のために3回程来たが、その女性は窓口にいなかったのだと思うていたが、今日はいるらしい。

縁は大切にしたいのであの女性の窓口へ向かう。

「すみません。手続き宜しいでしょうか」

協会の職員に対しては、できるだけ丁寧な話すようにしている。筋肉質の人間が丁寧な言動をすることで、より相手の印象にいい意味で残るのだ。

窓口の女性は眉一つ動かさず、ほとんど無表情に頷くと、椅子に座るように促す。

「分かりました、お座りください」

「はい。どうもお久しぶりです。林^{りん} 明美^{みんめい}さん」

座りながら挨拶をする。すると、何故か驚いたような気配が僅かに伝わってくるものの、彼女は表情を変えずに、傍らにある道具に手を触れて短く言葉を唱える。

一瞬、周囲の空気が震えたように感じた。

これは音を遮断する術具で、窓口での会話が他人に聞こえないようにするためのものだ。窓口事態仕切りで分けられており、後ろには衝立が置かれているため談話スペースからも誰がいるのかは見えないようになっていいる。

手続き程度に術具を用いるのは大袈裟な気がするかもしれないが、なんでも昔驚いた拍子に個人情報を大声で叫んだ職員がいたとかで、現在の扱いになったそうなの。

「さて、今日はどのような手続きでしょうか？」

「記録の更新をお願いします」

そう言つて、左の上腕部から腕輪を外して差し出す。林さんは無言でそれを受け取り、手元の機械にセットする。

この腕輪は協会の一員であることを示す資格証である。資格証の形状は様々で、他にも指輪型や首輪型などがあり、作成時に使いやすい形状を選ぶことができる。どの形にしても、協会を示す紋章と、中央に象嵌された赤い石は共通している。

「確認しました。吉備 諒二様ですね」

赤い石は登録の際に採取した血を元に造られていて、登録者の肉体と同調するようになっていらい。機能としては本人確認と、登録者に蓄積された経験値……歪みの量、それに最大到達階数である。第1層を突破して“加護”を得られるようになるとまた別な機能が追加されるらしいが、現状ではその程度である。登録者の能力を数値化するとかそんな大それた機能は無い。

経験値は肉体が歪みを吸収するたびに記録されるので、どれだけ魔物を倒したかの大まかな目安になるらしい。大物一匹と小物多数では記録のされ方も違うらしく、実は分析すれば色々と推測できるのだという。

林さんが機器を操作しているのを眺めていると、ふいに情報を確認していた彼女が声を上げる。

「更新1回目……ですか？」

訝しげな声だ。登録日が2週間前なのに、今最初の更新だということに驚いているのだろう。

「ええ、ここに来るのはこれで2回目です」

「ふう、更新についてはもっとこまめに来てください。経験値の計測に誤差が出易くなりますし、更新は協会からの連絡事項を伝達する場でもあるのですよ」

咎めるように言われたので、一応反論する。

「いえ、通達については掲示板も確認していましたし、更新に来よ

うにも迷宮に潜ったのは今日が初めてなんですよ」

彼女は眼鏡の奥で鳶色の眼をぱちぱちとさせ、こちらをまじまじと見つめる。無表情だけど少し可愛いと思ったのは秘密だ。

「今日初めて……ですか？ 2週間経ってて？」

「はい、そうです」

「その間ずっと何をしていたんですか。それに4階まで行っている上に結構戦闘しましたね？ 確か登録の際に、まず1〜2階に潜ってみて雰囲気を感じながら3階で1戦して戻ってきて見てくださいと言ったじゃないですか」

「ええと、ずっと準備していたんですよ。心配して下さるのは嬉しいですが、無茶した訳でも無く大丈夫です。……2週間前の会話をよく覚えていますね？」

「当たり前じゃないですか、だって他に……、いえ、心配するのが私たちの仕事ですよ、探索者は多少臆病なくらいで丁度いいのです。とりわけ新人の皆さんは引き際を誤る方が多いので、大丈夫だと笑って帰ってこなかった方がどれだけいたか……」

声を荒げるでもなく、静かに私の目を見つめてくる。内心の怒りを示すかのように、白く細い指が机を一定のリズムで叩いている。

何にしても、心配してくれたのには申し訳ないが、男なら譲れない部分がある。

無理やり場を和ますため、先日情報を集めていた酒場のマスターに教わった通りの台詞を喋ってみる。

「美しい女性を前にして強がりと言わない男はいないでしょう（キラッ）」

「冗談は止めて下さい。それで口説いているつもりですか」

逆に視線が厳しくなった。効果ないよマスター。

「すみません」

全面降伏する。怒っている女性には逆らわない方が良いと父親も言っていた。頭を下げて誠意を見せる。

表情は見えないが林さんのため息が聞こえ、場の空気が和らぐのを感じた。

「そういうことされても困ります」

顔を上げる。すると、資格証の腕輪が目の前に置かれており、無表情に手続きの終了を告げられる。

「はい、更新終了です」

「有難うございます」

「別に礼は要りませんよ？ あなた方の仕事は探索して、生きて戻って、協会に利益を落とすことなのです」

「つまり生きて戻ってこいという励ましの言葉ですね」

「協会の利益のためにですよ」

「分かってますよ」

「……」

睨み合う。

長くは続かず、どちらからともなく目を逸らす。手続きも終わったので、経験値について気になっていたことを聞いてみることにした。

「すみません、経験値についてなのですが」

「はい、なんでしょう」

「経験値を急速に貯めていくと、肉体的に異常が生じたりはするの

でしょうか？」

「異常ですか。そうですね、今日が初めてということでしたがここに来る前に魔物を倒した経験は無かったのですよね？」

「はい、魔物はないですね」

「でしたら、体が歪んだのは初めてですね。まったく耐性の無いところと一度に薬物を投与したようなものだと言えば良いでしょうか。経験済みであれば短時間に多量の経験値を取り込んでも問題ないのですが、体が歪むことに対して反射的に拒否反応を起こしているのです。一晚寝ていれば落ち着くかと思います」

淀みなく説明してくれた。私が感心していると、林さんは僅かに口元を歪めて話を続けた。

「まあ普通は寝ればどうにかなる程度で済むのですけどね。碌でもない事例がありますので軽くお話ししましょう。大分昔の話になります。この経験値理論の基礎が作られた前、当時から経験則で魔物を倒した者が強くなることは当然知られていました。そこである国の王族が、継承争いに勝つためにてつとり早く強くなるうとしたのですよ……どうしたか分かりますか？」

「強い魔物を他人に捕獲させ、止めだけ自分で刺す……ですか」

「大体その通りです。そして意気揚々と魔物に止めを刺した結果……ああ、その王族は剣もまともに握らない人物だったそうです……ひ弱な肉体が歪みによる変化を受け止めきれずに崩壊しました。その上歪みは残っていましたので、崩壊した肉体を材料に新たな魔物……魔人を生み出してしまったのですよ」

「魔人……というと、御伽噺に出てくる」

「ええ、便宜上そう呼称しているだけで、違うものでしょうが。まあそういう事件があつてから、安易な”実力に見合わない経験値稼ぎ”は禁じられています。一般には知られていない話ですが、肝に銘じておいて下さい」

「はい、分かりました」

話も終わったので、私は腕輪を着け直して立ち上がる。そして挨拶して去るうとした時に、ふとあることを思いついて聞いてみる。

「そういえば林さん、普段は窓口にいらっしゃいませんよね？」

「そうですね、私はここの担当ではありませんから。人手が足りない時などに臨時でいるのですよ」

「そうですか……」

普段いないというのは実に残念だが、仕方がない。

僅かに肩を落とす。

「ですが、今日の様な祝日の日中は利用が少ないため、担当人数を減らしています。なので空いた窓口にも私がいることも多いですよ」

！？

相変わらず表情は変わらないが、少し笑っているようにも見える……

…気のせいかな。

とにかく、次の用事を済ませるために挨拶をする。

「もし来た時に貴女がいたら、お願いすることにしたいと思います。今日はどうも有難うございました」

「はい、お気を付けて」

一礼して背を向ける。

何やら口説いている気がしなくもないが……仕方ないだろう？

私だって自分に年上属性があつたなんて知らなかったんだ。シスコンの自覚はあつたんだが……今まで村の年上女性にはこんな風になつたことはない。

まあ、仕事でも魅力的な女性に会えるのは良いことだ。探索を頑張る励みになる。」

窓口を離れた後、閑散とした談話スペースを通り過ぎて換金所に向かう。

そこで私を待ち受けていたのは。

「いらつしゃい、見ない顔だが新人かね？」

禿頭の筋骨隆々としたおやぢだった。

「はい、ここに来るのは初めてですね。よろしくお願いします」

「おう坊主、礼儀を弁えてるじゃあないか。俺は買取・鑑定担当の湊みなと源三げんぞうと言うんだ。よければ源ちゃんとも読んでくれ、うははは」

しかもなんか変だ。落ち着け、クールになるんだ。素数を数えよう

……2！

気を取り直して換金にかかる。袋を出し、猫又の尾を並べる。

「ふむ、猫又の尾が三十組か、状態はどれも良好と……」

素材を出すと、源三さんはさっきまでとは一転して真剣な表情で調べ始める。はつきり言って浅い階の素材である以上大した価値もないはずだが、流石プロというべきか。

「よし、相場は一組銅55枚だから三十組で1650で引き取るがどうする？」

高いか低いか微妙なところだ。

外で狩りをして毛皮を売る方がずっと高いだろう。とはいえその日の食事代・宿代はまかなえる金額だ。駆け出しの探索者にはちょうどいい額かもしれない。

特に問題も無いのでそのまま売ることにする。

「それをお願いします」

「はいよ、まいどあり！」

代金を受け取る。続けて猫の置物を取り出し、鑑定を依頼する。

「すみません、こちらの鑑定も頼めますか」

「ほう……ああ、こいつなら鑑定料はなしでいいぞ」

「何故ですか？」

「迷宮産の物品に関しては格付けがされていてな、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸（こう・おつ・へい・てい・ぼ・き・こう・しん・じん・き）の10段階あつて、最低が甲、最高が癸だ。鑑定する場合は格に応じた鑑定料を頂くが、下の甲・乙種については無料になっているんだ。で、この置物は『猫招き』という代物でな、大体予想は付いてると思うが周囲の猫を引き寄せる力がある」

「だから猫又も寄ってくるんですね」

「こいつは甲種、迷宮の外に持ち出すと力が弱まるらしくて価値は低い、ちなみに迷宮に再び持ち込んでも弱まったままだそうだ。外だとの程度かというと、一応野良猫が集まりやすくなるとかいう実験結果がある位だな。換金するのであれば1,000枚程度になる」

「ご説明有難う御座います。」

売ってもいいが……たいした額でもないしどうしようか。よし、せ

つかくだから、初探索の記念にとっておくか。

「いえ、換金は止めておきます」

「ん、そうか。他に何かあるかね？」

「とりあえずありません。どうも有難う御座いました」

「うん、何か聞きたいことがあったら何時でも来なさい。規則に反しない限りは相談に乗ってあげよう。探索頑張ってくれよ」

なんというか、見た目はあれだが良い人のようだ。

私は一礼して、協会を後にした。

協会を出た後、小腹が空いたので何か食べることにした。

休みたいので部屋に戻って食べることにし、道すがら適当な屋台で饅頭を購入して持ち帰った。

大した量ではない、こちらに来てからも一日二食のままなので、おやつ程度である。

さて、購入したのは煮込んで柔らかくした猪の肉に、色々な具材を加えて作った餡を包んだ饅頭だ。少し時間が経っているが、2つに割ればふわりと湯気が出て匂いが広がり、いかにも食欲をそそる。

「適当に雰囲気を選んだ店だったが……これは当たりかな」

まずは何も付けずにかぶりつき、単純に旨味を味わう。やや濃い目の味付けだが、じゅわりと汁が口の中に広がり、遠慮なく味覚に訴えかける。そして汁のしみた饅頭がほどよく味を緩和して腹に収まり、満足感を加速させる。葱、筍、蕪、おそらく入っている食材は十種類を超えるだろう。

「これは中々……」

勢いのまま半分を食べ終え、お茶を飲む。

残った半分には添えられた辛子を付けて食べる。肉臭さを打ち消しつつ味を引き締め、濃い味に飽きずに食べ終える。最後にお茶を飲んで一息つく。

決して豪勢でも目新しくもないが、安心して味わえる一品と言えるだろう。

「これで銅30の値段、手強い競争相手だ、燃えてくるな……！」

明らかに探索よりやる気を出している気がするが、気にしないことにする。

この饅頭の弱点は既に完成されているが故に、これ以上の発展を見込めない所だろう。個人的には饅頭部分に工夫の余地がないことも無く感じるが、それは前世知識のせいで奇抜な組み合わせの料理を知っているせいだ。

先ほどの屋台では別に甘い餡が中身の饅頭も売っていた。砂糖が高価なため値段は肉饅頭より高いが、あちらも人気商品だろう。露天に甘味の種類が少ないからだ。

他の地域がどうかは知らないが、この辺りでは砂糖を南からの輸入に頼っているため高価なのである。そのため甘味といえば果実が一般的で、砂糖を使った菓子は庶民に縁遠いものとなっている。それを屋台の商品として提供するというのは、砂糖を安定して仕入れられる伝手と調理技術、そして自信の表れか。

かなり手強い。

ただ販売している場所は大分離れているため、客はそれほど取り合わないだろう。

この都市は迷宮への入り口を中心とし、東に王城及び関係施設、南に貴族・豪商の高級住宅街、西に一般住宅、北が工業区域になっている。それほど明確に区分けされている訳ではなく、中央近くには職人街、市場、娯楽施設、花街などが入り混じっている。

私が露天を出している場所は市場の近くで、噴水のある広場が眺められる立地になっている。市場の区画の一部になっているので、市場管理組合に出店許可を申請し、許可を受けて店舗を出している。店舗を出すにも色々制限があり煩雑な手続きが必要になるが、外れに露天を出す程度なので許可は2日で下りた。今後もし経営を拡大していこうとするのなら、資金のみならず信用と実績が必要になるだろう。当面は小さな露天のままだが、規模の拡大については常に視野に入れておこう。

「こ馳走様でした」

饅頭を食べた後、体を休ませるため一眠りする。

激しい筋肉痛の状態と言えば想像がつくだろうか、今朝は早起きしたこともあり、とりあえず寝たい。

明日は地下5階まで行って、魔物の出現頻度を確認しておこう……。

そして私は、夢も見ずに泥のように眠った。

6・探索者支援協会（後書き）

迷宮より料理について書いている方が筆が進む気がします。

さて、主人公はチートじゃないため進行も人並みです。

そのためここからは、何時の間にか作品内で一月過ぎてたりするなど場面が飛ぶようになります。

出来るだけその間何をしていたか分かるように書くつもりですが、ご容赦下さい。

閑話 1・協会職員の憂鬱（前書き）

感想での指摘を参考にし、別視点部分を閑話として独立することにしました。

閑話 1・協会職員の憂鬱

ここは探索者協会、正式名称は「蓬萊国迷宮探索者支援協会」ですが、面倒なので協会または探協と一般的に呼ばれています。

私は協会総務部対外課窓口係の主任を任されており、林明美と申します。

私は窓口業務を担当する部署の実務上での責任者になります。はっきり言えば中間管理職なので、下のトラブルと上の指示が持ち込まれて非常に面倒な立場です。残業が多いです。

主任は直接窓口には立たず書類仕事が主になりますが、それだけだと疲れが溜まり、又現場の雰囲気に分からなくなるため、時々自分で窓口立つことにしています。もっとも、何故か皆さん他の窓口にはかり行ってしまうて、滅多に対応できないのですが。

やはり顔ですか？ 年齢ですか？ 若い娘の方がいいですか？

見た目は大差ないはずだから滲み出る若さですか？ 落ち着け私。

これでも森の民の血を引いているため、肉体年齢的にはまだ普通の人の20台前半のはずなんです（実年齢は禁則事項です）……

ほかの受付担当は皆20前後だから、更に若々しいのです。勝てませんね。

余談ですが、協会はこの国独自の組織になります。支部があるのも蓬萊国内のみです。

迷宮のあるところではほぼ必ず支援組織がありますが、それぞれ独

立しており、組織としての繋がりはありません。ですからある迷宮で名を馳せた探索者であっても、別な迷宮に挑もうと思えば、現地の支援組織に一から登録し直さなければなりません。

もちろん他の迷宮組織と仲は悪い訳ではなく、積極的に交流を進めております。対等な立場での情報交換や物品の取引ですね。特に情報の価値は高く、新種の魔物や弱点情報は高く取引されます。さらに遺物……ああ、人が造った物を術具、迷宮などから発見された現在の技術で再現できない物品を遺物と呼んでおりますが、遺物の売買・貸し借りも頻繁に行われています。また、特定の技に長けた人材が必要な場合、本人の了解を得て探索者の派遣も行っています。持ちつ持たれつの精神です。

例外として、一部の国家においては迷宮を国の完全な管理下においてあり、外部の人材を入れずに探索させている所もあります。そういった場所の迷宮については情報が余り入ってこないのです、色々な倒事があるようです。

協会は国とのかかわりも強く黒い側面も存在してはおりますが、迷宮探索を支援するという理念は設立当初より変わっておりません。私はこの仕事に誇りを持っています。

前置きはこれくらいにして、今日も1日頑張りましょうか。

「……ふっ」

私はため息を付いて、手元の本を閉じました。
今の時間帯は朝というには遅いため大半の探索者たちはもう迷宮に

行ってしまい、窓口はかなり空いている状態です。その上時々来る利用者は他の窓口に行くものだから、はっきり言って暇です。ですから、余り褒められた行為ではないのですが、暇潰しに本を読んでいるのです。

(……何が面白いのかしら)

受付担当の1人に薦められて読んではみたものの、どうしても彼女が言うほど面白いとは思えなかったのです。西方で流行っている小説を輸入して翻訳したものらしいのですが、元からこういう作品なのか翻訳者の腕の問題なのか。

内容は単純で、迷宮都市にやってきた少年が探索に挑み、秘められた才能を発揮して驚異的な速さで迷宮の攻略を進め、様々な財宝・強力な力を持つ装備を手に入れ名声を博していく。一方でギルドへの登録を担当した奴隷のハーフェルフ受付嬢を身請けしたのを皮切りに、裏通りで暴行を受けていた占い師の美少女を助け、異国からやって来た妙齡の猫耳美女剣士を決闘で打ち負かし、邪教の生贄にされていた美少女神官を救い出して仲間としていく。そして国の存亡に関わる陰謀に巻き込まれ、激闘の末蘇った邪神を見事討ち果たし栄光を手にするという物語……らしい。

いささか私の好みではありませんでしたね。

そもそも協会に奴隷なんていませんし。この国では奴隷制はありません。

西方ではそういう国もあると聞きますが……職員にも採用しているのでしょうか？機密保持の観点からは有用だとは思いますが、それならば身請けさせちゃ駄目でしょうし。

創作物として、多少現実離れしている位はいいのですが、ご都合主義だけで構成されているとは夢にも思いませんでした。ハーレムとか良くないと思います！

そもそもギルド職員が特定の探索者に肩入れしちゃいけません！
いや、まあ人である以上好き嫌いがあるのは否定しませんけど。
いくらなんでも出会う女性がごとく主人公に好意を持つとか、
魅了の呪いがかかっているとは思えません。

しかし見方を変えれば、この非現実的な内容が若い子に人気のである
秘訣なのかもしれません。夢物語だからこそ憧れるのかも……つま
り私は年なんですな、うう。

私が意味もなく不機嫌になっていると、入り口から近づいてくる人
影が見えたので姿勢を正して眼鏡のずれを直しました。私の窓口に
来ないからといって、だらけている姿を見せる訳には行きませんか
らね！

（あれ……真っ直ぐこっちに来る……？）

しかし、何故かその人影は私の窓口に真っ直ぐ向かって来たのです。
顔が見えるようになってそこで、私はその若い男性が見覚えのある
人物だということに気が付きました。

記憶を検索……私の記憶に残る若い男性の探索者なんて限られてい
るため、すぐに思い出しました。2週間ほど前に偶々登録を担当し
た新人のはずです。

何故覚えているかというと、私の窓口に来た最後の人物だからです。
その後だれも来てないんです。悲しいです。

顔に出さずに悲しんでいたら、彼が目の前に来てしまいました。仕
事しないといけませんね。

「すみません。手続き宜しいでしょうか？」

「分かりました、お座り下さい」

久しぶりの窓口業務です、張り切っていきましょう！

その時の私は、まさか自分が「冷たそうな女性」と見られていただなんて、知らなかったのです……。

閑話 1 協会職員の憂鬱（後書き）

続く？

7・過ぎ行く日々・1（前書き）

今回は短いです。

7・過ぎ行く日々・1

初めて迷宮に潜ってから2週間が過ぎた。

週末に潜っている訳だが、そうなると当然探索ペースは遅くなる。しかし酒場などで聞いた所によると、通常の探索者も毎日潜り続けているのではないそうだ。無傷で帰還していればともかく、多かれ少なかれ怪我はするし疲労も溜まる。ましてや武具も整備する必要がある、上層の探索でも1回潜ったら最低1日は間隔を空けるらしい。

「当たり前だろ？体調不良で死んだなんてことになってみる、死んでも死に切れねえ」

「いやそれつまり生ける屍リビングデッドですから」

「上手いこと言うじゃねえか」

がはは、と目の前で笑っているのは、同じ探索者の白泉 厳之丈さ
んだ。

身長は私よりも低いのだが、腕の太さは倍はあるだろうか。樽のよ
うな体型だが、侮ったものは痛い目を見るだろう、その筋肉から生
み出される瞬発力は相当なものだ。これで力と素早さを兼ね備えた
優秀な戦士なのだ。

何でも数代前に岩の民ドワーフがいたらしく、その血が濃い目に出たんだと
か。おかげで酒にも相当強く、目の前で空の酒瓶がどんどん増えて
いく。

1週間近く前、私の露店に白泉さんが来たのが縁の始まりだったが、
それ以来意気投合してこうして一緒に飲む仲である。

「だからなあ、よっぽどの事情がなければ連続で潜ったりはしない

ぞ？

お前さんは週末だけだが、実際そこまで同時期の奴と差が開くってことはないはずだ。まあ最初のうちは逸って毎日行く奴もいるだろうさ、だが怪我をすれば強制的にでも休まにやあかんしな。治療院は高いからなあ、切羽詰って無ければ休養して直すだろうさ」

要するに週末探索型の私はどれだけ進行が遅いか、という話だ。

日数的には余り差は無く、私が週2日の所を通常は3、4日だという。まあ半分か。

「日数が進行具合に直結するんなら、とつくに迷宮自体が踏破されてるだろうよ。他人の事は気にせず、自分のやり易いペースで潜るのが一番だぜ？」

一息に蒸留酒を飲み干しながら、白泉さんは言う。

私は麦酒をちびちびやりながら、つまみの燻製を齧っている。

先達である白泉さんの言葉が身に染みる。こうして実際の経験を元に話を聞くと、自分の理論が薄っぺらく感じられてしまう。

彼は到達階層100階を超えるベテランであるからして、その経験の前には駆け出しの悩みなど悩みにも見えないのだろう。

「まあなんだ、領主お抱えの連中なんて無視するに限るぜ？

あいつらは我が物顔で狩場に割り込んできて、権力をかさに占有しやがるしよ。争った所で何の特にもなりやしねえ」

「わかつちゃいるんですけどね……」

こうして私が珍しく愚痴を吐いているのにも理由がある。

故郷の新しい領主が探索隊を組織しているのは周知の通りだが、活動しているのは私よりもずっと深い所なのでこれまでは関係することも無かった。

だが先週、新しい部隊がここに到着したのだ。

つまり最近徴収された人員で構成された面子である。どうやら別の所にある兵士の訓練施設で戦闘訓練を受けていて、基礎が終わったので投入されたいらしい。

その部隊の中に、村時代の知り合いがいたのが事の発端である。訓練期間が短い気がするのだが、迷宮での経験値を考えれば基礎だけ教えて放り込む方が効率的なのだろう。

偶然協会で顔を会わせてしまったため、仲が悪いわけでもなかった。ので会えば多少の会話はしていた。そこまでは良かったのだが。

「おいおい、まだ1層にいるのかよ、ちんたらしてんなあ俺たちは今日10階突破したぜ？」

「そうそう、これで加護が受けられるんだぜえ……ひゃっはー！」

「ソロでやるから俺らに置いていかれるんだぜ？　今ならまだ探索隊に入ってもいいぞ？」

「俺に妹さんを下さい」

本日昼の会話である。

やたら上から目線なのは仕方ないとして、そもそも隊を組んでる連中と一緒にされても困る。しかもお目付け役として、ベテランの隊員が1人付いているそうだから、それは突破も早いはずだ。

とりあえず加護を受けさせようという上の魂胆が透けて見えるだけに、促成栽培で大丈夫かと不安を感じる。

で、散々な言われようだったので思わず白泉さんに愚痴を吐いてしまったと言っただ。最後の言葉が一番頭に來たのは秘密だが。奴らに妹をやらないうよう強くなる必要があるそうだ……。

「とりあえず今は10階突破が目標なんです、8階からが面倒なんですよね」

「うむ、1層はそこから山場だからな。確か大蛸螭と灰色蛇だっ
たな？複数で群れてるのが大半だからソロにや厳しい所だ。とはい
え挟み撃ちにさえ気を付ければ、それほど手強い相手じゃない……
お前の力なら一撃じゃないか？」

「まともに当たれば倒せますが、問題は片手が灯りで塞がることな
んですよ……」

棒は両手で扱う動きが多く、片手では制限が多い。なのでどうして
もランタンを床に置くという一手間が必要になる。それは攻撃を1
回捨てているのと同じで、その間敵に行動を許すことになってしま
う。

「それは分かかっててソロやってんだろ？ なら弱音は吐くな。単独
で突破したいという意気込みはいいと思うぜ？ 加護にも影響出る
しな」

「そうですね……」 明光の球”でも買えば話が早いでしょうけど”

” 明光の球” とはある術具の名称だ。鍵言葉キワードを唱えると光って浮か
ぶ球体である。

資金に余裕ができると、これをつかう探索者が多くなる。自動追尾
機能などという便利な機能はないので、基本的には鎖を繋いで体の
どこかに繋げておくか、杖の先につけるといいう使い方をする。浮か
ぶ高さは一般的な成人男性の頭より少し上程度である。

燃料は無く、迷宮なら周囲の歪みを利用して光るという画期的な機
構を搭載し、人気は高い。ただ寿命があり、継続使用時間次第だが
3日間……72時間が目安である。買い替えを考慮するとランタン
に比べ相当高価だが、そのメリットは語るまでもない。

節約のためランタンで通そうと思っていたが、ソロでは流石に厳し
いかもしれない。幸い資金には余裕がある…… 剣に比べて棒は手入

れが簡単だし刃こぼれもしないため、その辺楽ではある。

まあソロなのは、平日は露店販売をしているせいでパーティーを組み辛いという自業自得の結果である。後悔はしていないが、色々辛い。

店員が次の料理を運んできたので、思考を中断して食べることに専念する。「大白鱈の吉河風煮込み」というこの店の看板料理だ。

「やっぱこいつだよなあ、酒に良く合うのがたまんねえな」

「この煮込み具合がまた絶妙ですよ、口の中でほろりと崩れてとろけるような感触。最高ですね」

面倒な事は忘れて互いに料理をつついていく。食事は楽しく食べることが一番で、その点私と白泉さんは一致している。

「そっいえばだ」

しめの雑炊を口に運んでいると、ふと沈黙していた白泉さんが話し始めた。

「なんですか？」

「俺の知り合いには傭兵も結構いるんだがな、昨日そいつらと久しぶりに会って飲んでたんだが、どうもきな臭いらしいぞ。北が」

「北ですか……」

この蓬萊国は、本土である半島とその周囲の島々からなる国家だ。元々の現地住民と、清華帝国から流れてきた民が協力して造られた国だとされている。その後戦争や世界的な災害やらあったが王朝は

当初より続いており、歴史はおよそ800年になる。これは世界的に見るとまあ中の上といった長さだ。で、本土が接している国は3つあり、南から清華帝国、東岳国、そしてパーシアス北域連合国だ。北といえば連合国のことを指している。

「しかしあそこは、”迷宮なし”のはずですよ」

「おお、”迷宮持ち”の国に仕掛けるなんて誰も思わねえだろうな。だがあそこは”迷宮なし”でも強国だ。なにせ領土の広さが違う」

連合国の領土は蓬萊国の倍以上、それが雪に閉ざされた土地が大半であっても、決して侮っていい話ではない。迷宮に鍛えられた精銳の能力では勝っていても、一般兵の質でいえば確実に負けているだろう。

どれほど鍛えられた探索者も、数の暴力には勝てないのだ。

「連中の悲願は迷宮を手に入れることだ。『埋もれた迷宮』なんてものを探すよりは、侵略してぶんどったほうが早いだろうさ……」

きな臭いには理由があるぜ、傭兵はあちこちの国に行ってる訳だが、そこかしこの迷宮で連合国の連中を見かけるようになったんだと。表向きは別な国出身らしいがな、実際に剣交えた顔が混じってりゃ分かるわな」

「……戦力の底上げですか」

「ま、すぐ戦になるってことはないと思うが、気をつけとけよ？」

私は頷いて残りの雑炊をかき込む。冷めかけていたが美味しかった。

翌日私は”明光の球”を買いに行った。ランタンと併用して使うことにする。

探索隊の事は無視して、あくまでも安全を重視して探索を進めるこ

とにしたのだ。

結果として、私が地下10階にたどり着くことが出来たのは、それから1ヶ月程後のことになる。

7・過ぎ行く日々・1（後書き）

展開についてはいちいち書くか飛ばすか悩むところです。

8・ここからが本番（前書き）

作者は某狩りゲーのユーザーです。

分かる方は轟竜とか迅竜とかのイメージでお読み下さい。

7/29 怪我の描写が間違っていたので修正しました。

8・ここからが本番

そこは迷宮としては例外的に明るかった。

小さな広場程度の円形の空間であり、上部はドーム状でぼんやりとした光を放っている。

背後で勝手に扉の閉まる音が聞こえてくるが、振り返る余裕はない。目の前に広がる空間の中央には、黒い鱗を持ち二本の巨大な角を生やした蜥蜴が唸りを上げている。その体躯は下手な小屋よりも大きく、爛々と輝く三眼が私を捉えて離さない。

「おお、怖い怖い。でも倒さなきゃ進めないしねえ、早速狩りを始めようか『門番』さん」

私は余計な睨み合いなど不要と判断し、即座にその巨体に向けて駆けた。

『双角蜥蜴』と名付けられているその魔物は、2層へ続く階段を塞ぐ『門番』であった。

迷宮においては、各階層の最深部に次層への道を塞ぐ魔物がいる。決して定められた場所から動くことなく、他の魔物と違い徘徊せず、ただ下へ向かおうとするもののみを襲うことから、『門番』と呼ばれるようになった。

迷宮自体が生み出している防衛機構だという説が主流であり、それを裏付けるように何度倒してもまた出現する。迷宮を踏破する者への試練だという説も根強いが、どちらにしても現在に至るまで無数の探索者達を骸に変えてきた存在である。

第1層とはいえ双角蜥蜴も甘い存在ではない。

かつては、ここまで調子よく進んできた初心者探索者の半数がここで脱落すると言われていた。現在では装備・道具の改良、ベテランによる指導が進み、脱落は3割程度に抑えられている。だが、それもパーティーを組んでいての話である。

「はっ！」

私は反射的に迎撃しにきた爪と牙の連撃を避け、隙のできた脇腹に向けて突きを放つ。

硬質な音を立てて鱗を砕く感触が手に伝わる。今の攻撃力でも通用することを確認し、素早く後方に跳ねた。

次の瞬間、鱗を逆立てた尻尾が目の前ぎりぎりを掠めていく。間一髪だ。

尻尾の反動を利用して再び正対する双角蜥蜴。一拍の間を置き、今度は向こうから攻撃を仕掛けてきた。

「GUOOOOO！」

一声咆哮を上げると、一瞬体を沈めた後空中へとその巨体を跳ね上げる。大きく広げた口に並ぶ鋭利な牙の群れが、上空から迫ってくる。

咄嗟に斜め後ろに跳んで回避したものの、その顎が床を砕き、周囲を大きく揺らす。揺れに巻き込まれ、それ以上の行動がままならない。

「くっ……！」

（聞いた通りだが、思った以上に面倒な揺れだ）

双角蜥蜴については、誰もが通る道であるだけにその攻略法も出回っている。

効果的な武器は重量があり威力の高い斧・戦鎚などで、まず破壊力のある武器で鱗を剥がし、その下の柔らかい肉を集中して攻撃するのが基本である。視野はそれほど広くないため、素早い者が正面で注意を引き、その間に尻尾に注意しながら後ろ脚を狙う……とされている。

（独りならそれ相応のやり方がある）

揺れに束縛されながら、腰にぶら下げていた小さな缶を引きちぎり足元に落とす。

すぐに揺れが収まり行動の自由を取り戻すが、その時点で既に双角蜥蜴は突進の体勢に入っている。

回避は困難。

が、その瞬間私の足元から強烈な閃光が放たれる。

「GO A A A A A!？」

三つの眼を閃光が直撃し、網膜を焼かれた双角蜥蜴が苦痛の叫び声を上げる。私は目を閉じていたため被害は無かったが、瞼を通して眩しいほどの光量だ。

戦闘用秘密道具その壱、閃光筒だ。効果は名前の通りである。

「GYAU! GUUU……」

双角蜥蜴は攻撃を止め、眼を閉じて悶えている。尻尾を見境なく振り回していて危険だが、攻撃のチャンスには違いない。

手早く秘密道具その貳を取り出し、棒の先に取り付ける。

時間が勿体無いが、奴の視力が回復するまでの秒数を数えながら冷

静に隙を狙う。雑魚ならともかく、門番ともなれば目潰しの効果はそう長く続かない、おそらく効果時間は10〜15秒程度だろう。

「G A A A A !」

奴が一際大きく尻尾を振り回す。

出来た隙を逃さず踏み込み、最初に鱗を砕いた箇所再度正確に突きを放つ。

（手応えあり！）

肉に突き刺さる感触が伝わってくる。

手首をひねり付けた傷を抉りつつ、前足が迫ってきたため再び後退する。

秘密道具その弐が傷口に刺さったままなのを確認し、緊張で乾いた唇を舌で舐める。

「後は……持久戦といこうじゃないか、黒蜥蜴」

秘密道具その弐はかえしのついた着脱式の穂先で、形状は鉈のようなものだ。対巨獣用に造られたバリスタの矢を流用したものであり、かえしが3重に付けられていて、もがけばもがくほど食い込んでいくという恐ろしい代物だ。

単独での攻略法を練りながら店を巡っていた時、壊れた武具などを格安で売っているがらくた屋で見つけたのだ。お買い得だった。

「G Y A O O O O O O ! !」

奴が一際高く吼え、こちらを見据える。

既に視力は回復したらしい。効果時間は12秒といったところか。脇腹の穂先が痛みを生んでいるのか、鱗を逆立ててその怒りを示している。吐息が荒くなり、三眼が危険な光を宿す。

「憤怒状態っていうやつだね……」

聞いてはいたものの実際に目にとると迫力が違う。奴の体が一回り大きくなったように感じ、威圧感が倍増する。

無意識に後退してしまいしそうになるが、こらえて動きを見切ることに集中する。

(……！)

双角蜥蜴が吼え声も上げず一気に間合いを詰め、その前足を叩きつけてくる。

その一撃は床を砕き、先ほど同様周囲を揺らし行動を束縛する。

私はぎりぎりで横っ跳びに躲し、揺れの範囲から逃れる。だが反撃する間も無く逆の腕が迫り、再び目の前の床を砕く。それを避けると最初の腕が再び振り上げられ……連撃が続く。

「痛っ！」

回避に専念し、辛うじて躲すことに成功しているものの、砕かれた床のかけらが飛礫となって襲ってくる。これを防ぐことはできず、顔を庇うのが精一杯だ。

要所は皮鎧で防御しているものの、布一枚の部分に飛礫が当たり、僅かだが血飛沫が舞う。

双角蜥蜴は片腕につき3回ずつ……合計6回の攻撃を終えた所で一旦動きを止める。

油断無くこちらを見据えながら荒く呼吸をしている。

私は痛みを我慢しながら投擲用の小刀を抜き出し、奴の眼に向けて放つ。この距離であれば的が小さくても外すことは無い。

当然、奴は素早く首を振って眼に刺さるのを回避し、怒りの唸り声

を上げ、再び攻撃態勢に入る。

「GUOOOO……」

奴を休ませてはいけない。怒らせ続けなければいけない。

今回の作戦では、双角蜥蜴の憤怒状態を長引かせるのが攻略の鍵である。

通常時よりも速さと力が上昇するため、明らかに危険きわまりない行為では在るが、その状態は双角蜥蜴自身にとっても好ましい状態ではない。

魔物に生物的な常識を期待してはいけないのだが、既存の生物を模した魔物は生物的な制約が存在する。

疲れるし、眠るし、痛がるのだ。そして血は流れており、臓器や骨も存在する。”歪んだ”存在である以上例外はあるが、少なくとも上層の魔物は”常識的”なのだ。

双角蜥蜴を始めとする大型の魔物は、怒ることと肉体のリミッターを一時的に解除していると考えられている。その間は痛みも抑えられているのか、攻撃を受けてもひるまずその力で探索者達を追い詰めてくる。

その反面、限界を超えた動きは肉体に負担を掛けているのだ。

「ははっ、とはいえ一歩間違えば即お陀仏じゃないか」

込み上げてくる恐怖を押し殺し、奴の攻撃を避け続ける。流石に体力と言う点で人間が魔物に敵う事はないため、どう考えても疲れて一撃貰う確率の方が高い。

だが私はそんな後ろ向きな戦いをする気は無い。

分の悪い賭けは嫌いなので、打てる手は全て打ち、計画通りにいけば8割方勝てる策で乗り込んだのだ。

これで勝てなかった場合、悪いのは計画通りに動けなかった自分自

身である。

時に隙を見て攻撃を加えながら、10分は経過しただろうか、体力には自信のあった肉体も悲鳴を上げている。そろそろ仕切り直しの時間だ。

「秘密道具、その参だ」

飛び退りながら腰から缶を引きちぎり落とす。

しかし双角蜥蜴は缶が落ちたのを見た瞬間、その三眼を閉じてしまう。門番は学習能力も高い存在であり、同じ手は何度も通用しないのだ。

同じ手であればだが。

落ちた缶から凄い勢いで灰色の煙が噴出していき、辺りを覆っている。

私は素早く移動し、煙の範囲外へ脱出する。

煙は部屋の大半を覆いつくし、濃霧と同等の視界不良をもたらしている。

秘密道具その三、煙幕筒。効果は以下略。

長年にわたる分析の結果、双角蜥蜴の認識方法は主に視覚と嗅覚だと判明している。

そのため、刺激性のある煙幕により視覚・嗅覚の両方を潰すことが出来る。

この煙幕も長くは持たないため、素早く次の行動に移る。下げた容器から瓶を取り出し、双角蜥蜴のいる方に向かい投擲する。こちらからも姿が見えてはいないが、あの巨体の生み出す音で居場所は容易に把握できる。

破砕音がすると同時に、赤々と炎が立ち上る。

「GYAAAAA!」

狙い通り奴の体に当たったらしい。

西方から輸入された道具で、何でも2つの液体が空気中で混ざると発火するらしいが、詳しい原理は知らない。実際の所、燃えるだけなので威力はそれほどもないし、ぶつけなければいけないため使い勝手は悪いのだが、今の私には貴重な炎攻撃の手段だ。値段自体は結構するのだが。

様子を見守りながら息を整える。

懐から栄養剤（探索者用）と書かれた瓶を取り出し、一息にあおる。苦い。

これは専門店で売られている薬品で、疲労回復等に劇的な効果を発揮する薬剤である。資格証が無いと買えず、探索者でない（強靱な肉体のない）者が使うと色々酷いことになる劇薬だ。探索者でも1日3本までという使用制限がある。

煙が薄れ、双角蜥蜴の姿が見える頃には、先ほどまでの疲労が嘘のように体に力が漲っていた。

「大したもんだなこれは……実に清々しい気分だ……、いや麻薬じゃないのかこれ」

私の声に反応し、こちらを向き吼える双角蜥蜴。背中が煤けているものの、まだその動きに衰えは見られない。

「GUOOOOO!」

「よし！ 第2回戦といこうじゃないか!」

即座に仕掛けられた突進を跳躍して躲し、そのまま背中に飛び移る。双角蜥蜴が反応する前に、炎にあぶられた箇所には棒を叩きつける。熱で脆くなっていたのか、あっさりと鱗を破壊し、下の肉を抉る。振り落とされる前に飛び降り、奴がこちらの位置を視認する前に全力で回転を加えた突きを放つ。

狙いたがわず、棒は後ろ脚の関節に潜り込み、固いものを砕いた手応えが届く。

間違いなく骨を砕いたと確信する。

「GOAAA!」

だが、調子に乗って全力で攻撃したがために、私は隙だらけだった。その尻尾の一撃が目前に迫り、すぐに動けない状態では辛うじて棒を間に滑り込ませるのが精一杯だった。

「が……はっ!」

その一撃で部屋の端まで吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。肺から空気が絞り出され、衝撃が体中を駆け巡る。遠くなる意識を繋ぎとめながら、薬で浮かれ隙を見せてしまった自分を心の中で罵る。

崩れ落ちた体はすぐには立ち上がれそうにない。

視界の端では、怒りで鱗を逆立てた双角蜥蜴が足を引き摺りながらも攻撃態勢に入っている。

（これは……やばい……!）

震える手で効くか分からない閃光缶を落とす。

だが奴は再び目を閉じ、そのまま突進を開始する。閃光が無意味に部屋を照らし出す中、その巨体が迫ってくる。

「くっ……!」

私は必死で体をずらすが、間に合わない。

「G A A A A A A A A A A A A A A A ! !」

勝利の雄たけびを上げながら奴が最後の跳躍をしようとし
異変
が起こる。

「G O A ! ?」

その体が硬直し、飛ぶことが出来ない。
が、その体は慣性のまま私目がけて滑り、激突する。

「うあああああっ！」

迷宮へ来て以来最大の衝撃が突き抜ける。
先ほど以上の激痛が 足に走り、不快な音が響く。

だが、それだけだった。
必死でもがいた結果、上半身は激突を逃れ、足が犠牲になった。
命があるだけで充分だ。

「まったく……ようやく効いたか……遅いんだよ……」

双角蜥蜴は、壁に体をめり込ませながら痙攣している。
苦しげな呻きを漏らしてはいるが、意思に反し動くことはできない
ようだ。

何も偶然でこうなった訳ではない。
序盤で打ち込んだ秘密道具その忒の穂先に、遅行性の麻痺毒を仕込

んでおいたのだ。

雑魚はともかく、門番級の魔物には毒物は通常効かないのが常識である。

しかし、協会の書庫に納められていた憤怒状態を研究した資料に興味深い情報があつたのだ。

憤怒状態を発生させ、維持するのは奴らの体内で生成される物質が鍵となることが分かっている。肉体のリミッターを解除するため、その肉体の防衛反応を抑えて云々……正直専門用語は理解できなかったが、一つ確かなのはその状態だと薬物が効きやすくなることである。

ようは怒ってる間は毒が効き易いという話だ。

双角蜥蜴に対する実験結果もあつたため、今回保険として使用したのだが……やっておくものである。

そんな物に頼らず倒せれば一番だつたのだが。

「いやあ……栄養剤は冷静さを失って危険だな……」

反省する。

本当は動きが鈍くなってきた所を時間をかけて足を狙って仕留める予定だつたのだが。

腕に力を籠め、無理やり足を引き抜く。

激痛が走るが、無視して立てるかどうか試してみる。

「う……ぐうえ……」

歯を食いしばりながら、転がっていた棒を支えにして立ち上がる。

左足は確実に折れているだろう。

右足はまだましなので罅が入っているくらいか？

外側も傷だらけで、早く手当をした方が良さだろう。
だがその前に。

「麻痺してるうちに、仕留めないとな」

別に双角蜥蜴は死んだ訳ではない。

遅行性である分効果も高い麻痺毒だが、魔物相手に余り期待してはいけない。

未だ痙攣を繰り返している双角蜥蜴の体を腕の力だけでよじ登っていく。

頭の後ろ……首の部分に辿り着き、鉈を抜く……壁に激突した時に曲がったようだが、どうにか使えるだろう。

「G U A A A……」

もう麻痺が薄れかけているのか、僅かに頭をもたげてこちらを睨んでくる。

残念だが、王手だ。

感慨に耽っている余裕はないため、手早く鱗の隙間から全力を込めて延髄に刃を滑り込ませる。

一瞬びくん、と巨体が震えたが、直ぐに力を失って動かなくなる。確実に死んだことを確認し、ようやく体の力を抜く。

「はー……終わった……」

安堵感から意識が途切れそうになるが、根性で繋ぎとめる。

とりあえず傷の手当てをするため、荷物から色々道具をとりだす。

「げえ……半分以上割れちゃってる……」

壁に叩きつけられた時に、予備にしまっておいた薬の大半が駄目になっただけだ。

特に飲み薬は全滅だ。

今回準備した薬品だけで、金6枚以上を費やしているため。実に手痛い被害といえるだろう。

肩を落としながら、包帯と軟膏を取り出し、治療する。骨折はどうにもならないため、表面の怪我だけだ。

応急手当を済ませると、痛みを堪えながら素材の剥ぎ取りに入る。細かく解体できる余裕は無いため、倒した証拠である二本の角と前足の爪で我慢する。

そもそも重い荷物を背負える足では無く、剥ぎ取るだけ無駄である。角と爪を袋に入れ、支えにしている棒に引っ掛ける。

「あれ……棒が斜めになって……げ」

そこに至って棒が曲がっていることに気付いた。

尻尾が叩きつけられた時に受け流すことも出来なかったため、緩いくの字型に曲がっている。むしろ折れていないだけましなのかもしれない。

「親方御免……」

目を閉じて、鋼の棒を鍛えてくれた村の親方に謝る。

武器については後で考えることにして、今は無事に帰ることに専念する。

左足をかばいながら、私はゆっくりと下への階段を降り始めた。

長い階段を降っていくと、重厚な扉が目の前に現れる。

人の手では傷一つ付くことのないこの扉は、この迷宮の階層を隔てる“界門”と呼ばれている。

一方通行で、上から下に行くことしかできない。

材質・作動原理の一切が不明であり、迷宮の謎の一つである。

私はもたれかかるようにして扉に触れる。

すると扉の表面に光の線が走り、そこに刻まれた幾何学的な模様を浮き上がらせていく。

私はぼんやりと眺めていたが、その模様があるものに酷似していることに気付いた。

（協会の紋章か……？）

何か意味がありそうだとは思ったものの、足から痛みが走り続ける状態では頭も働かず、すぐに思考を放棄する。

光が扉全体に広がった後、地響きと共に扉が開いていく。

倒れそうになる体を支えながら扉を抜け、明るい光が出口から差し込んでいる。

「中継地点に到着……と」

このすぐ先に、協会の設けた中継地点が存在する。

迷宮の階層を繋ぐ通路には安全地帯が存在したため、踏破が進むたび協会が施設を設けて探索の助けとしてきたのである。

そこには当然、地上と迷宮を繋ぐ“門”も存在している。門の設置により、探索者は地下1階からではなく、各階層から先に進むことができるようになっていく。

門の通行許可はその実力があると証明した者でなければ得られない。つまり、今回の様に門番を倒して降りてこなければ許可は得られないのだ。

安堵に包まれながらも、気を引き締める。

どんなにぼろぼろでも、付け込まれないように余裕を見せなければいけない。

まだ足が耐えられることを確かめ、最後の一段を降りる。

目の前が開ける。

中継地点は正方形の部屋に置かれており、降りてくる通路と降りていく通路が対面に存在している。

私から見て左側に“門”と呼ばれる装置があり、扉となる術具、それを支える台座と周囲に設置された器具で構成されている。

ここから第2層を探索する者が出入りしているのだ。

右手に協会の駐在員が常駐する駐在所が造られている。基本的な道具を揃えた売店にもなっているらしく、警備も含め常に2〜3人が詰めているとか。

ゆつたりと（実際にはその速さでしか歩けないのだが）駐在所に近づき、職員に挨拶をする。

「どうもお勤めご苦労様です」

「はい、第1層の突破おめでとうございます」

当然ながら、私が通路から出てきた時には気が付いていた職員がにこやかに返答する。

資格証を出し、更新をお願いする。

「更新をお願いします。」

「はい。多少時間がかかりますので座ってお待ちください。もしお

急ぎであれば、一旦地上に戻って頂いて後程本部での作業にもできますがどういたしますか？」

「今お願いします」

「分かりました、こちらを飲みながらお待ちください。多少の疲労回復効果が御座います」

差し出された飲み物を飲んで待つことにする。座っていれば大分楽だ。

「はい、吉備 諒二 様ですね。

記録を確認致します……御一人で双角蜥蜴を突破したのですか？」

職員が驚きの表情で尋ねてくる。

私は笑いながら頷く。証拠である角も出して見せる。

「おお、これは素晴らしい。その様子だと苦勞なさったでしょう。

今年の単独突破はあなたが最初ですよ！」

「有難うございます」

話によれば、大体私の様に無謀な人物が毎年のようにいるらしい。成功するのは1人か2人で、成功者がいない年も珍しくはないそうだ。

「更新が終了いたしました。これで吉備様は、この第2層の門を使用する許可と、“加護”取得の儀式に挑戦する権利が得られます。また協会本部にて、各種依頼の受領が可能となります。詳細については本部窓口で説明をお聞き下さい」

戻ってきた資格証を腕に嵌める。

話が終了し、それまでにこやかに対応していた職員が真面目な表情で私を見つめる。

私は姿勢を正し、言葉を待つ。

「さて、吉備様はこれで正式な“探索者”となりました。

これまでは素養の無い者をふるいにかけるための試しの迷宮。

これからは挑む者の力と知恵、そして運を試し続ける試練の迷宮。ここからが本番です。」

貴方様の御武運をお祈りしております」

職員が一礼する。

私も痛む体を動かし、礼を返す。

「微力ながら、期待に応えられるよう努力いたします」

副業なんですけどね、と心中で呟きながら、私は怪我を治すため、治療院に向うことにした。

迷宮都市に来て約2ヶ月、第1層を突破。

8・ここからが本番（後書き）

戦闘はもう少し派手な方がいいですかね？
主人公は使える道具はいくらでも使います。

9 ・過ぎ行く日々・2 (前書き)

今回は場繋ぎ的な内容なので短いです。戦闘無しです。
むしろ戦闘無しがデフォルトのはずです。

9・過ぎ行く日々・2

「はい、お待たせしましたー」

客を捌き終えて一息つく。

お茶を入れるために薬缶を火にかけ、沸くまでの間に残り少なくなつた芋の仕込みをする。

蒸し器に芋を入れた後、薬缶に茶葉を入れた小袋を投入して煮出す。適度な所で火を止めて、お茶を保温容器に移し替える。

ついでに自分の湯飲みにも入れる。

とりあえず一口。

「……ふう、温まる」

秋も深まり、そろそろ冬に入ろうという時期である。

風も冷たく、体のあちこちが痛みを訴えてくる。

服で隠してはいるが、実は体中包帯だらけになっている状態なのだ。

先日第1層を突破した後、迷宮に併設されている治療院で怪我の治療を行った。

治療院とは、都市により運営されている探索者用の医療機関である。勿論一般市民でも治療は受けられる。

外傷、病気、呪いと迷宮内で受けると想定される負傷等の治療を行うことが出来、通常治療の他に回復術式を用いた高度治療も行うことが出来る。この回復術式はそれなりの設備が必要なため、行える場所は限られている。

今回私が治療してもらったのは足の骨部分だけで、残りの打撲裂傷は一般的な治療しかしていない。

術式を用いた高度治療は高額のコストがかかるという面もあるが、使いきると肉體本来の自己治療能力を衰えさせてしまうという悪影響があるのだ。

それで仕方なく休養中である。

治療院に払った費用も含めると、迷宮探索は現在かなりの赤字である。双角蜥蜴との戦闘で使った術具の調達に、露店の利益からも資金を回したので頭の痛いところだ。

しばらくは療養も兼ねて商売に専念したいと思っている。

冬に近づき、冷え込んできたためか売れ行きは良い。

またいくつか具の種類を増やしたことで、合わせて暖かいお茶の販売を始めたことが効を奏しているのだろう。

お茶は単品だと銅5枚で、芋バターを購入した人には無料で提供している。

茶葉は村で自分が飲んでいた物を再現した。元となる薬草を自分で焙じて作っている独自商品である。

くせになると評判だが……いやなんでもない。

「胡椒の大盛りを頂戴」

「はい、毎度あり」

最近はどうして露店で食べ物を売りながら、人間観察を進めている。商売のネタになるかもしれないし、ならないかもしれない。

失礼にならない程度に訪れる客を観察し、客がいない時は周囲の人々を観察する。

迷宮都市だけあって武装した人物が多いが、実に多彩な服装・種族

で溢れている。

この世界の種族については、簡単に説明すると以下のように分けられる。

私の属する人族。「変化の種族」と呼ばれ、細かく分類すると、無型種、獣型種、鱗型種、鳥型種に分かれている。

別種族として妖精族。「精霊の子」と呼ばれ、森の民、エルフ岩の民、ドワーフ水の民が代表例だ。
マイマン・マーメイド

独立して竜人族。伝説曰く神竜が人化して作った子が始祖と言われているが、詳細は不明。閉鎖的で謎の多い種族である。ちなみに協会の長が竜人族だという話で、ここ100年位代替わりしていないとか、寿命は長いらしい。

他にも少数種族が存在するらしいが、未だお目にかかったことはない。

余談だがどの種族同士でも子供は作れる。まさに生命の神秘である。

「よう、繁盛してるか？」

「ぼちぼちでんな」

「意味が分からねえよ……」

午後、久しぶりに子栄がやって来た。

結局支店に異動してきたらしく、あちこちで商談をしている姿をよく見かける。

「こっちの売り上げ自体はそこそ順調だ、ただ探索の方で少しへまをしてね、余り余裕はないかな」

「お前が失敗するのは珍しいな、仕入れの方は問題ないのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

軽く会話をしていると子栄は店舗を回り込み、内側に入ってきて勝手に座ってしまう。

「おい、勝手に入ってくるなよ。狭いんだぞ」

「固いこと言うなって。外に立ってると販売の邪魔になるだろう？」

……それでだ、商売柄色々噂を聞きこんでいるんだが、聞く気はあるか？」

「噂程度ならお前に聞かなくても耳に入ってくるさ。……とはいえ、一般の情報よりは詳しいことを聞かせて貰えるんだろうな？ 芋バター 1 杯でどうだ」

親友ではあるが、こいつが商人として重要な情報は言う訳がない。一般の噂の精度が上がった程度と見て現物払いを申し出る。子栄はにやりと笑って首を振る。

「おいおい、そこまで安くは無いな。……友人価格としてスパイス 3 種の大盛りで手を打とう、お茶も付けてな」

「まったく食い意地のはった奴め、……ほらよ」

了承し、大盛りの器を子栄に渡す。

いつ客が来るとも限らないので、私は正面を向いたまま子栄の話に耳を傾ける。

「いやー暖かい食い物はいいいねえ。」

じゃあ何から話すかな、まあ半分はお前も知っている事の確認にしかないと思うが……そうだな、身近な話からいこうか。

北側広場の方に芋バターの店ができたぞ、想定より遅かったが、そこそこ売れているようだ。まあ問題は中身だがね？」

「噂は聞いたが俺は直接見ていない、味は？」

「営業時間が被ってるから敵情視察もできないよな、そう思って俺

様が食べてきてやったぞ。個人的に味はこっちが上だと断言するがね、決め手はバターの質と芋の違いだな。このほくほく感が向こうには足りない……ほくほく。ただ向こうの方が安い」

それは聞き捨てならない話だ。今の質と値段を維持するのも大変なのに。

「……いくらだ？」

「量はほぼ同じで銅35枚。

まあ芋の差だろうな。あれはこの辺の芋だがこれは北方種だ、輸送費の分少し高いからな。

場所が違うからすぐに客足がどうのうこのとはならないと思うが、注意しとけよ」

「そうだな………はい、いらっしやい！」

話をしている間にも客は来る。

私の対応が終わると子栄は話を再開する。

「次は…最近住宅街の方で変質者が出没するそうだ。なんでも幼い子供相手に色々口では言えないことを見せつけるとか……見せつけるだけで、直接手は出していないため警備隊も余り本腰は入れていないようだ」

「馬鹿が多いな、確か逃げ足がもの凄く早いと聞いたが」

「ああ、何度か駆けつけた通行人が追いかけたそうだが、あっさりと撒かれてしまうらしい。紅い仮面を着けていて正体は不明、夕暮れ時に出没しおそらくは成人男性という程度しか分からない」

「世も末だな……」

「後は………そうだな、迷宮にも関係するんだが、この街には『食の迷宮倶楽部』という集団がある。ようは金があって食べることが好

きな連中のあつまりなんだが、迷宮産の食材に目を付けたらしくてな、最近ミノタンを買い漁っている」

「その集団は初耳だが、奇矯な連中がいるもんだ。ミノタンという
とあれか？ミノのタン？」

「ああ、徘徊型魔物の代表といえる牛鬼の舌だ。ミノタウロス本来魔術薬の材料になる舌だが、それを普通の牛みたいに食べられるんじゃないかと誰かが言い出したらしい」

「馬鹿な真似を……」

「いやそれが、上手いこと処理をすると食えるという話だ。今はそれを如何に美味しく仕上げるかという品評会を開催するんだと」

「……………」

人間の食欲って際限ないよね。

牛鬼は第2層以降から出現する魔物で、現在最前線である第6層までの全ての階層において存在が確認されている。

特定の階にいたのではなく、獲物を探して広範囲を徘徊している徘徊型魔物の一種で、出現する階層によって見た目が変化するらしい。

第2層では普通の牛のような頭部に両手斧・腰布一枚。

第3層では頭部の角が大きくなり、両手斧・皮鎧。

深くなるにしたがって装備が充実し、頭部が変化するという特徴がある。

強さはその階層の中では上のほうで、もし攻略序盤に遭遇したら逃亡を推奨される。

知名度の高い魔物だが、上記のような部分で不明な点も多く、『鳳来迷宮7大謎魔物』の一つに数えられている。

それはともかく。

「……まあ、今は出会ったら逃げるだけだし、関係ないよな」

「だよなあ、お前ソロだし」

「うるさい、仕方ないだろう」

探索だけで食べていくなんて真似はしたくないのだ。
手に職を持つことの重要性を知らないとは言わせない。

「続けるぞ。更に迷宮関連だが……南方のワダツミ諸島王国の要人が今この都市に来ているらしい」

「へえ……」

ワダツミ諸島王国とは、蓬萊国の南東に位置する海洋国家である。迷宮の無い若い国で、造船技術が発達している。主な産物はやはり魚で、周囲を漁場に恵まれて世界でも有数の漁業大国である。ただし国土は小さい。
海産物の加工技術に優れており、蓬萊の市場にも色々と出回っている。

「なんでまた」

「それは流石に分からないが、協会に出入りしてたそうだから、探索者の派遣依頼とかじゃないかな、もしくは引き抜きとか」
「なるほど」

協会は登録している探索者に対し、仕事の斡旋もおこなっている。魔物が出現するのは迷宮だけではないため、実力のあるものには討伐依頼などが頻繁に出されている。受けるかどうかは自由だ。
また優秀な人材に関しては、国の戦士団や護衛などへの勧誘も多い。受けるかどうかは本人の自由だが、余り優秀な人物を引き抜かれても困るので協会は良い顔をしないそうだ。

「でもまあ、勿論関係無いよな」

流石に駆け出しの自分には遠い話である。

迷宮で名を上げて仕官するというのも、探索者の一つの目標かもしれない。

私は戦わない職業の方が良いのだが。

その後もしばらく雑談をし、子栄は去っていった。
販売を続けながら考える。

しばらくは飲食物の販売でやっていけるだろう。

自分の実力ではなく知識のおかげだが、目新しさを出すのならそこそこ自信がある。

日銭を稼ぐ分には問題ないだろう。

しかし自分はプロの料理人ではないので限界がある。

やはり迷宮に潜っていることを生かすべき。

迷宮産……。

……。

ミノタン……。

食材探し？

「はっ、いかんいかん、思考が変な方向に」

何時の間にか思考が妙な方向に逸れてきたので、頭を振って振り払う。

気が付けば辺りは暗くなり、営業終了の時間である。

手早く荷物を片付け、帰途に着く。

今はやれることをやるだけである。金も無いし。

翌日の夕方、私は販売を早めに切り上げてある場所に向かっていた。鍛冶屋である。

主武器の棒が曲がってしまっているため、修理もしくは買い替えに来たのだ。

ぐねぐねとした職人街を進み、ある建物の前で足を止める。

『木之下鍛冶工房』と書かれた看板がかかっているが、文字は大分薄れ掛けている。

「御免下さい」

扉を開けて中に入る。

中を見回すと、武具屋とは違い多数の商品が陳列されている訳ではないが、壁に何振りかの武器が飾られている。

私は目利きではないが、どれも無骨ながら良い品に見える。

ここにくるのは初めてだが、紹介してもらった白泉さんの言によれば腕は間違いなく一流、世渡りは三流だとのことだ。

無愛想な親父らしい。

そんなことを考えていると、奥から無愛想な人影が出てくる。

「……いらつしゃい」

年は50前後か。頭には白い物が混じり、かなりくたびれた外見である。

私は一礼した後、紹介状を差し出した。

「白泉さんの紹介で参りました」

無言で受け取る鍛冶屋の親父。

読み終わると、私に向って頷いてみせる。

「分かった……用件は何だ……？」

その視線は既に、私が背負っていた棒に注がれている。
棒を外し、目の前の台に置く。

「これを打ち直しをお願いします。もし無理があるようであれば、同等以上の物を買いたいと思います」

鍛冶屋の親父は無言で棒を手に取り、真剣な眼で調べている。
すぐに棒を台に戻し、口を開く。

「打ち直しはできる……だが少し弱くなる」

「そうですね、もし買うとすれば良いものはありますか？」

そう言うと、鍛冶屋の親父は少し考えてから奥に行き、2本の長物を手に戻ってきた。

そして目の前に置かれる。特に解説は無い。
自分で確かめるとのことらしい。

まず片方を手に取る。

形状が円ではなく八角形……八角棒か。材質は鋼で、長さもこれまでの棒とほぼ同じ。

これなら余り違和感無く使えるだろう。

もう一つは形状が端と真ん中で違う棒のようだが……手に取ると、重い。これまでの棒の3割り増し程度か。もっとも、重さは威力に繋がるので上手く扱えれば悪い話ではない。

重いほうを持って尋ねる。

「こちらは幾らになりますか？」

「……金15だな」

高い。

思わず手元の棒を見つめなおす。

「……形状維持術式がかかっている……こちらなら金5だ」

どうやら術具だったらしい、高い訳だ。

おそらく術式が無ければ両方とも値段に差は無いのだろう。

だが壊れにくいのは魅力的な話であるため欲しいが、手持ちの金だと厳しい。

「……打ち直しはお幾らですか？」

「銀30で構わん……」

「ではとりあえず打ち直しをお願いします。こちらに関しては、また今度買わせて頂きます」

今回は諦めることにした。

買おうとすると、露店の運転資金まで枯渇してしまうのだ。無理はいけない。

ひとまずは今の棒でもどうにかなるだろう。

第2層でも、武器を破壊できるような魔物はすぐに登場する訳ではない。

「……分かった、明日以降取りに来い……」

「はい、宜しく願います」

曲がった棒を預けて工房出る。

思わず溜息が出てしまう。

やはり世の中金か。なにをするにも金が入用で、頭が痛いことだら

けだ。

気分転換も兼ねて協会に向う。

2層の魔物について詳しく調べておこうと資料を眺めていると、突然後ろから声をかけられた。

「あの、すみません……」

訝しげに振り返ると、そこには少年と少女が1人ずつ立っていた。

（……どこかで見たような？）

思い出そうと努力していると、彼らは頷きあつて、

「諒二さん。あの時は助けていただいて、ありがとうございます御座いました

！」

「ありがとうございます！」

深く頭を下げてきた。

あれ、誰だっけ。やばい、思い出せない。

9 ・過ぎ行く日々・2（後書き）

あからさまな伏線の回です。

何か急に閲覧数が増えてプレッシャーが重いですが、頑張ります。

10・妹思いと書いて変人と読む

「いやあ、慶斗君と愛紗さんだよけいと あじさね！」

うん、覚えてるよははは！」

「……忘れていましたね？」

「……少し会話しただけですから、覚えていなくても仕方ないですけれど……」

ここは協会の隣にある喫茶店。

私は冷や汗を流しながら、彼らを覚えていなかったことを誤魔化している最中である。

出会った時は迷宮の中だったのでよく判らなかったが、2人とも濃い茶色の髪と瞳で、整った顔立ちの持ち主だ。慶斗君は明るく快活な、愛紗さんがやや冷たいような雰囲気を受ける。頑張って誤魔化してみる。

「別に礼なんていりませんよ？」

通りがかりに少し手助けした程度でそんなことをしたら、ただのぼったくりじゃありませんか」

「何で急に丁寧になるんですか」

「私達が年下なんですから、もっと普通に話して下さい」

何故睨まれるし。

仕方なく彼の言葉に甘える形で、素の口調に戻す。

「やれやれ……分かったよ。」

でも種族によつては見た目と年齢が一致しないから、どっちが上とか即断できないけど?」

「幼い見た目で年上はあつても、年上の見た目で幼いというのはまずないですから」

それもそうか。

納得して、まだ手を着けてなかった熱い黒豆茶で喉を潤す。健康にも良いと評判のお茶で、味も苦味が無く独特の風味と甘さが後口をさっぱりとさせている。

「ただ、実際に大したことをしたわけじゃないのに大袈裟に礼を言われるのは、どうにもむず痒いんだよね。もう1ヶ月以上前の話だし」

「そんなことありませんし、それでも結構探したんですよ? あの日情報屋にも聞きましたけど、分からなくて諦めていたんです。偶然にも会えて良かったですよ。」

そもそも可愛い妹に怪我をさせないで済んだのにちゃんと礼をしないなんてあり得ません!」

きりつと言われてしまった。

やはり兄妹だったかと思いつつ、視線を隣に移せば苦笑している妹さんの姿があつた。

改めて彼の方を見る。

その瞳を見れば、まさしく決意の炎が燃えている。なるほど、妹を守りたいという思いに偽りなしか。ならば何も問題は無い。

私は真面目な表情で彼に向けて頷く。

「なるほど、君の気持は良く分かった」
「分かったんですか!？」

横で妹さんが驚いているが、私と彼で見つめ合い、共に目に理解の色を灯す。

どちらからともなく立ち上がり、固く握手を交わす。

「その思い……いや誓いを、これからも大切にしようじゃないか」
「ええ、理解して下さいって嬉しいです。しかし同志といえど妹は差上げませんよ?」

「案じるな。君の妹が魅力的であるのは認めるにやぶさかではないが、妹は別格として私の好みは年上だ」
「ご理解頂けてなによりです」

互いに笑みを交わし合う。

「……うう、まともそうに見えたのに兄さんと同じ変人だったなんて……」

横から溜息が聞こえてくるが気のせいだろう。
席に座り直す。

これで彼らの用事である「礼をする」は済んだ訳だが、それで別れるというのも味気ない話なので、お茶を飲みつつ世間話を始める。
出会いは大切にしないとね。

しばらくとりとめもない話をしていたが、これが中々に楽しい。
日々露店の営業に探索と過ごしていると、情報収集以外で普通の会話が無くなってしまふのだ。

もちろん話すことはあくまでも世間話の域を出ない。
相手の探索理由を聞いたりもしない。

若い兄妹が探索に出ているというのも訳ありだろうが、他人の事情に無理に踏み込まないのがこの業界の掟である。

次第に話の内容は次第に迷宮に関係することに変わっていき、私の探索歴がまだ浅いことを伝えたと、結構驚かれた。

ちなみに探索歴など調べればすぐ分かる話なので、無理に誤魔化す気も無い。

「そうですか、だから情報屋の人も知らなかったんですね」

「まあ、上の連中なら名簿自体手に入れているだろうから知っていたかもしれないけど、ほとんど活動して無かった俺のことなんか下っ端は知らないだろうし」

探索者としてではなく、露店の情報で聞けば分かったかもしれないが。

ちなみに協会関係者には守秘義務があり、探索者の個人情報漏らすことはまずない。登録時に同意を求められる規則による例外を除けば、犯罪に手を染めたりしない限り公開されない。
という建前である。

そこは情報屋にかかれれば抜け道があるとか無いとか。

「……正直金銭的には厳しいですよ。今はまだいいですけど、大怪我したら蓄えなんて無いも同然ですから」

話は探索者のお財布事情に移る。

「そう考えるとむしろ怖いのは罨だね。強さ的に安全圏で狩っていても、罨はそうはいかない。何せ歪みのせいで、行きには何も無かった場所に罨が出来ていて、帰りに油断して重傷を負ったという話にはことかかない」

「1層だとまず滅多にないですけど……2層からは多いらしいですね。そうなるとう人数が多い方が対応し易いんですが……」

「妹を妙な目で見る奴と組むわけにはいかない、と」

「その通りです」

互いに頷き合う。

横からはまた溜息が聞こえてくる。

「こないだは組んだじゃないの、いい加減にしてよ」

「あれは仕方なくだよ。いくら僕でも10階で我儘言う気はないさ」

10階か……独りで挑んだ自分が言うことじゃないが、正面から挑めば初心者には2人でも面倒な相手だと思う。

元傭兵や現役騎士とかが挑むのでない限り、大体は攻略用の面子を集めてから挑むらしい。

傭兵や騎士の場合は、熟練者に案内を頼んで余計なリスクを負わずに2層へ向かうという話だ。

気になったので、試しにその時の人数を聞いてみる。

「双角蜥蜴か……余り人数がいても攻撃し辛いが、何人で行ったんだ？」

「それが何と11人ですよ！

危うくお茶を吹き出しそうになった。

一般的には5〜6人と聞いているが二桁とは予想外。
妹さんが遠い目をしながら話し始める。

「募集といっても大雑把なもので、多く集まってしまったんです。
普通ならそこで2つに分かれると思うんですけど、声の大きい人が多くてもいいじゃないかって言い出してそのまま行くことになったんです」

ちよつと考えてみる。

迷宮の構造を考えれば、通路では一度に多人数で戦えないため、「無駄な」戦力が生まれてしまう。また広範囲への攻撃や、飛び込まれて乱戦になった場合の同士討ちの危険が増すなど戦術的に推奨されない。何より人数が多いほど実入りが減るという不利益もある。

しかし、単純に単一目的のため、この場合は「双角蜥蜴の撃破」である場合はどうだろうか。乱戦にさえならなければ交代で戦って疲労を減らせ、10階の広場であれば10人いてもどうにか戦える。

出現する魔物の弱い1層なので範囲攻撃もない。
統率さえちゃんと取れば案外いけるのかもしれない。
結論、互いに邪魔さえしなければいけそう。

もつとも、臨時のパーティーで連携なんて期待できない。それが駆け出しの集まりならなおさらだ。

様子からして成功はしているはずだが、恐る恐る2人に聞いてみる。

「それで……どんな具合だったのかな……？」

兄の方も遠い目をして語り始める。

「いや……正直道中は酷かったですよ？」

一応先頭を進む人は交代制にっていて、真っ向から遭遇する分には大丈夫でした。でも人数が多すぎるとどうしても煩くなって音が聞こえないんです。それで奇襲され易い上に魔物が普段よりも多く集まってきた……」

「人数が多いほど魔物を引き寄せる、か」

「正直疲れました。もうあんな人数で組みたくはないですよ。」

それでもまあ、ごり押しで門番の部屋まで行って……後は楽でしたね」

彼はお茶を一口飲んでまた話を続ける。

「3分かからないで終わりました」

「何!？」

それは駆け出しだけにしては少し早過ぎる。

それなりに腕の立つ者がいたのだろうか。

私が顔に浮かべていた疑問を読み取ったのか、彼は身を乗り出してにやりと笑って答えてくる。

「それがですねえ……術者がいたんですよ、それも法術士です」

「なん……そいつは、珍しい……」

術者。

それはまさしく迷宮における花形ともいえる存在。

そしてその需要とは裏腹に、絶対数がとても少ない存在でもある。

そもそも術者とは、自然にあらざる現象を引き起こす術を持つ者の事を言う。

ただ詳しい情報は流布しておらず、私も協会で閲覧可能な資料の内容までしか知らない。

出来るだけ簡単に解説すると以下の通りか。

術者とは、まず大きく分けて2種類に大別される。

他の存在の力を借りて術を使う者と、自分の能力で術を使う者である。

前者はある程度知られている。古来より存在した神官、精霊術士などがこれにあたる。

神官は神々に祈りを捧げ、自信の生命力を代償に使える神の権能（の極々一部）を借り受けて行使する。仕える神により、神官の行使できる権能には差がある。

精霊術士は精霊と契約を結び、その契約内容に従って精霊に働いてもらう。契約時に代償が必要で、働いてもらう時も対価が必要となる。

どちらも生来の高い素質と修練が必要となり、その道は険しい。

神官については、神殿が素質のありそうな子供を集めて教育を行っているため、一般人でも目にすることができ。しかし、実戦に立てるものなど極々一握りでしかない。

精霊術士は個人の素質に大きく左右され、その才能を開花させるためには熟練した精霊術士の師について厳しい修行を積まなければならない。実際に契約を成立して術者となるまでに死ぬ者もいるらしい。

後者については説明が難しい。

様々な手法が存在するが、全てにおいて共通しているのが『歪みを用いて法則を書き換える』ということである。

歪みの研究から生まれた術式技術を行使する『法術士』と、先天的にその力を持って生まれた『異能士』の2種類が存在する。

どちらも過去において迫害された歴史を持っており、魔物を発生させる災害である“歪み”を用いる法術士は不幸の原因にされ、能力を持って生まれた者は魔物と同一視された。かつての暗黒時代である。

もう何百年も前の話であるが、辺境では未だに偏見が残っているらしい。

法術士はその技術として、古式と現代式に分かれている。

古式は魔物の能力を解析する試みから生まれたという。

「発動体」と呼ばれる道具を用い、それを起点にして自分の肉体を使つて魔物の能力を再現する。

代償は自身の生命力。

術を制御するために、体のどこか（通常は腕）に“制御紋”と呼ばれる模様を刻む。

現代式は近年、およそ150年ほど前から発達してきた手法である。

発動体に多くの触媒を用つて術式を組込んだ道具を繋げ、周囲の歪みを利用して様々な現象を引き起こす。

理屈上、歪みが近くにある場所でしか使用できないため、別名迷宮式とも言われている。今では高価な触媒（消耗品）を用いることで、歪みに頼らず術式を使用できる。

簡単に長所短所を示すと次のようになるらしい。

古式の長所：準備する物は発動体のみ。術者の能力（と生命力）の許す限り、状況に応じて様々な術が使える。

古式の短所：術を発動するたびに消耗する。高い集中力がないと失敗する。

現代式の長所：消耗が少ない、発動が早い、失敗し辛い。

現代式の短所：触媒を消費する（金がかかる）、準備した術式しか使用できない。ほぼ迷宮内限定。

古式は難易度が高いことに加え、発動のたびに消耗していくなど難点が多く、今の主流は現代式らしい。

どちらにしても高い知識と専用の道具が必要なため、独学で使用することはまず不可能。

特定の師につくか、国の養成機関でなければ学ぶことはできない。養成機関の術士はそのまま国に仕えることになるため、やはり一般に活動することは無いと言っていい。迷宮探索も国の部隊と行うことになる。

異能士については千差万別のため、詳しいことは不明である。

胎内にいる時点で歪みの影響を受けると生じやすいという説もあるが……？

以上が基本的な術者となるが、この枠に入らない存在もいる。

調律術士。

歪みを修正する力を持ち、世俗の理に縛られない存在。国家ですらその調律行為を妨げてはいけないという不文律がある。

詳細は不明。秘匿されている。

協会の資料でも公開されているのはこの程度だ。

情報屋にでも大枚はたけばもっと詳しく分かるのだろうが、今その

必要は無い。

さて、話を戻すと、そうそうお目にかかれない法術士が駆け出し組にいたということだ。

「まさか国のお抱えじゃないだろう？」

「ええ。自己紹介の時は家名まで名乗らなかったもので分からなかったんですが、何とあの芦屋一族だったんです」

芦屋一族。

この家名はこの国において非常に有名である。

建国王に仕えた法術士の末裔で、以来連綿と続く法術士の家系。過去、その一族及び門下から多数の優秀な術者を輩出しており、歴史を紐解けば頻繁に出てくるほどの家名である。

私は名前しか知らなかったのだが、彼らは伝統的な古式法術の一族であり、近年は現代式の派閥に押されてこの都市での勢力を大きく減じているという。

件の人物は芦屋の傍系であり、修行の一環として迷宮に挑んでいるそうだ。

「ほー……、それは得難い経験だなあ……」

「一撃目の氷で動きを束縛して、二撃目の雷撃で終了でした。僕達前衛の仕事は壁役と時間稼ぎだけでしたね。正直あの威力を考えれば、術者の奪い合いが起こるっていう話も分かります」

修行中というのになんという火力。羨ましい。

「そうだなあ。でもその人はもうパーティーを組んでいるんだろう

？」

「正式ではないけれど、彼女普段は一緒にいた人達と組んでいるらしいですね。

修行なので、常に迷宮に潜っている訳ではないとか」

なるほど……ん？

「女性だったのか」

「おそらく」

「何故曖昧？」

「いやそれが、仮面を着けていまして」

「仮面！？」

お父さんお母さん、都会は変な人が多いです。

目の前の兄妹は、どうかしましたか？ という表情でこちらを見ている。

変なことでは、ないのだろうか。

「資格証で識別できるので、偽物なんかの心配は無いそうです」

「いやそういう問題じゃ……なんでもないです」

色々疑問はあったが深く聞くのが恐ろしい気がして、私は全力でスルーした。

「ごほん。しかしまあ、10階に限っては人数が多くてもいいし、多い方が楽だよな」

「そうですね。……諒二さんは何人で突破したんですか？」

「ん……ああ、10階か……」

どう言ったものか。

常に正直である必要は無いが、嘘は付かないに越したことはない。
余り吹聴したくもない話だが、まあ、この兄妹なら話しても問題ないだろう。勘だけ。

「ついこないただけど……1人で」

「え？」

「ええ？」

目を瞬いてこちらを見つめる兄妹。

そういった動作が凄く似ていて、間違いなく兄妹だと感じさせる。

「1人で双角蜥蜴に挑んだんだ……突破したけどもうやりたくない」

「ふえー……本当ですか」

「むしろどうしてそんな危険な真似をしているんですか」

兄の方は呆れ、妹の方には冷たく見られる。

驚きはしたようだが、騒いだりしないので良かった。

正直あの戦闘のことは、足の折れる不快な感触まで思い出してしまうので余り考えたくない。

「うーん……それは色々理由があったんだ。見栄とか意地とかね。

でも勝算は十分にあったから決行した。反省はしているけど後悔は

……少しだけ、してる」

「してるんですか」

「あはは……自己嫌悪に陥るから余り聞かないで……」

結局この兄妹とは暗くなるまで話していた。

2人と別れた後、私は再び協会に入り直した。

迷宮には昼も夜もないため、協会は24時間営業だ。夜中から明け方にかけては少人数の職員が当番制で業務を担当しているそうだ。今は特別な用は無く、掲示板の確認をするだけである。

探索を終えた者達が談笑している脇を通り過ぎて、掲示板に向かう。そこには様々な情報が張り出されている。

まず協会からの全体へのお知らせ。

『第3層における大規模な歪みの発生について……』

『注意：第2層深部で剣齒虎の群れが確認されています……』

『現在希少度6以上の鉱石を、通常の2割増しで換金しております

……』

など広く周知する内容。

次に定期更新の情報。

『今月の手配魔物一覧』

『有効賞金首一覧』

『今年度の催事予定表』

その他の呼びかけ。依頼ではない一般の広告なども含まれている。

『嵐山武具店、大売出しのお知らせ』

『剣の道教えます。我が古鷹流道場においで下さい……』

『国境警備隊入隊募集要項』

依頼については依頼者の個人情報が含まれるため、掲示板のような衆目に触れる場所ではなく窓口での公開となる。

到達階層と実績により受けられる依頼が制限されていて、身の丈に合わない依頼を受けることは出来ない。また、協会は一般から依頼

を受け付けているが、内容は迷宮及び歪み、魔物関連に限定されている。

とりあえず一通り眼を通していく。

特に目新しい情報は無い。第3層以降の情報はあっても意味が無いし。

更新されていた手配魔物と賞金首の資料だけ貰っておいた。

依頼も受ける気は無い。今は自分のことだけで精一杯だ。

小銭稼ぎなら露店で充分だし。

まずは体調を万全にしてからだ。

もう用は無いので入り口に戻る。

帰る前に、ちらりと窓口の方を見るが、明美さんはいないようだ。よし、帰ろう。

「今日も色々あったな……」

妹はどうしているだろうか？

ふと郷愁の念に駆られる。仲睦まじい兄妹を見たせいだろう。

村には信用できる商人を介して手紙を届けてあり、住所も知らせている。

先日には父からの返答も来ており、どうにかやっていると書かれていた。

正式な探索者になったことだし、また手紙を書こうか。

私はさつさと休もうと、家路についた。
また探索に出られるまで回復するのに、
1週間ほどかかりました。

10・妹思いと書いて変人と読む（後書き）

読み辛くてすいません。

今回説明した術に関してはあくまで主人公の主観的知識なので、実際はもっと色々な設定があります。

そろそろ設定集を作ろうと思いますので、詳しくはそちらに書きます。

設定集（8 / 10 更新）（前書き）

この頁は作中で登場した内容について、作者の自己満足的な設定集となります。

本編の展開の都合により、前置き無く内容が変更される場合が御座いますので、あくまで参考程度の内容としてお読みください。

設定集（8 / 10 更新）

登場人物

・吉備 諒二

種族：人族（無形種）

性別：男

年齢：プロローグ時点で18歳

主武器：棒

加護：無し

解説：本作品の主人公……のつもり。農家の次男に生まれた普通の村人。異質な記憶の断片を夢に見るが、それ以外特に秘められた能力は無い。鍛えられた肉体は日々の鍛錬の賜物である。

目立たず安定した生活を送りたいと思っており、野心は低い。

迷宮探索自体は楽しんでおり、行けるところまでは進みたいと考えている。

妹を溺愛しており、本人には隠そうとしていたが実はバレバレである。

・楊 子栄

種族：人族（無形種）

性別：男

年齢：19歳

主武器：短刀

加護：Secret!

解説：商家幹部の長男。主人公とは村に寄るたびに遊んでいた悪友。

かなりの美食家。

・如月 慶斗

種族：人族（無形種）

性別：男

年齢：14歳

主武器：槍

加護：Secret！

解説：駆け出し探索者その1。双子の妹と共に迷宮に挑んでいる。槍の扱いについては基礎を修めており、結構優秀。実はある貴族の妾（故人）の子供であり、その貴族が病に倒れたことにより正妻に追い出されたため探索者となった。妹が無事ならそれでいいと思っている。

・如月 愛紗

種族：人族（無形種）

性別：女

年齢：14歳

主武器：弓

加護：Secret！

解説：駆け出し探索者その2。双子の兄と共に迷宮に挑んでいる。弓の扱いについては基礎を修めており、結構優秀。実はある貴族の妾（故人）の子供であり、その貴族が病に倒れたことにより正妻に追い出されたため探索者となった。母が死んだのは正妻のせいだと考えており、見返すための力を求めて探索者になった。

・白泉 巖之丈

種族：人族（獣型種）とドワーフの混血

性別：男

年齢：38歳

主武器：大剣

加護：Secret！

解説：ベテラン探索者その1。特定のパーティーに属さず、人手の足りないところに参加して稼いでは底を尽くまで酒を飲むという生活を送っている。自堕落ではあるが、その戦闘能力は高く評価されており、しかるべき実力のパーティーに参加すれば150階も狙えると言われている。過去に何かあつてパーティーを組んでいないらしいが……？

・林 明美

種族：人族（無型種）とエルフの混血クォーター

性別：女

年齢：Secret！（外見年齢20～25歳程度）

主武器：鉄鞭

加護：Secret！

解説：協会職員その1。個性的な受付嬢達の取りまとめ役をしている。周囲には常に冷静な女だと思われているが、中身はそうでもない。酔った探索者を叩きのめすなどの武勇伝があり、部下には結構慕われている。

世界

世界そのものに名前はない。世界が球体であることは知られている。月（衛星）は1つ。気候は地球と似ているがやや寒い。

北大陸：現在の舞台となっている大陸。その陸地の大部分が赤道より北側に位置する。

南大陸：Secret！

新大陸：Secret！

国家

この世界では魔物の存在により、明確な国境線は少ない（ただし街道に關所などは存在する）

人はその生存圏を迷宮のある地域から少しずつ拡大してきたため、街や砦を造り、開発した地域が国土として認知されている。国はいわば街の集合体であり、人の手が入っていない場所は未開地域としてどの国にも属していないものと扱われる（大体魔物が住み着いている場所だが）

蓬萊国

・所持迷宮

階層連結型地下迷宮“黄泉の岩戸”

・地理・歴史

北大陸東端中緯度付近に位置し、半島と周囲の島々を含む沿岸部を領土とする海洋国家である。気候は内陸部がやや乾燥しているものの総じて穏やかで、農業・工業共に可もなく不可もなく、半島の立地を生かした航路の要所として賑わっている。

建国歴821年を迎え、元々は清華帝国で起こった大乱から逃げ出してきた人々と、当時この地で暮らしていた民族が集まって建国された。現在に至るまで近隣諸国との戦争はあったものの内乱は無く、国体はまとまっている。しかし最近は……？

・外交

成立経緯から、当初は清華帝国と緊張状態にあったものの、帝国が大乱を納めて安定期に入ってから友好条約を結んでいる。

東岳国、パースias北域連合国とは交易・領土問題で緊張状態にあるワダツミ諸島王国とは貿易協定を結んでおり、友好関係にある。

清華帝国

・所持迷宮

広域連結型大迷宮“幽玄の魔宮”

・地理・歴史

北大陸東部、蓬萊国の西側に君臨する大帝国。大陸一の国土を持つ強大な国家。全ての分野において高い水準にある。しかし近年は巨大であるが故、新しい技術の取入れが難しく、技術の停滞等に悩んでいる。

歴史は1000年を超え、前身となった国が周囲の勢力を統合し、清華帝国を名乗ったのが公式記録で1335年前とされる。国土を広げる過程で、多数の民族を取り込んだため軋轢が多く、内乱が起きることも珍しくない。現在は齡60を超える老帝が国を支えているが、その後継者の座を巡って水面下で激しい争いが起こっている。

・外交

周辺国家とはおおむね友好条約を結んでいるが、国力を背景にした条約が大半であり決して仲が良い訳ではない。

東岳国

・所持迷宮：無し？

・地理・歴史

蓬萊国の北西、清華帝国の北側に位置する山岳国家。岩の民が多く、国として工業の発展に力を注ぐ工業国家。周辺国家（主に清華と蓬萊）から迷宮素材を輸入し、自国の鉱石と合わせて独自の加工をして輸出する形態を取っている。

国家の成立はおよそ200年程度だが、以前より岩の民と山岳民族の居住地であつたため発展の歴史はもっと長い。

・外交：Secret！

パースias北域連合国

・所持迷宮：無し？

・地理・歴史

蓬萊国の北に位置する国家。国土の北側は永久凍土があり、厳しい気候である。都市国家が集まって成立している。塩湖を持っているため、主要な輸出品は塩である。

建国は230年ほど前。国土の開発に国力を傾注していたが、近年軍事力の拡大が噂されている。

・外交：Secret！

ワダツミ諸島王国

・所持迷宮：無し？

・地理・歴史

蓬萊の南東に位置する諸島国家。造船技術に優れ、海の魔物を寄せ付けないその艦隊は質の面で世界有数とされる。海産物の輸出が主な産業であり、遠洋に生息する大型魚を安全に捕獲するため専用艦隊が存在している。国の成立は180年程前であり、能力重視で後継者を選定するなど、若い国家である。

・外交：Secret！

アグナス公国

・所持迷宮

階層型地下大迷宮“灼熱洞の迷宮”

・地理・歴史：Secret！

・外交：Secret！

ポセイディア共和国

・所持迷宮

広域型地下大迷宮“深き水の迷宮”

・地理・歴史：Secret！

・外交：Secret！

神々について

・Secret！

精霊について

・Secret！

術者

他の存在の力を借りて術を行使するタイプ：他力型
自分の力として術を行使するタイプ：自力型

神官（巫女、使徒、代弁者）

祈りを捧げ、自身の生命力を代償に神の権能の一部を借り受ける。
借りられる権能は仕える神によって決まり、術者自身の適正によつてさらに種類・効果が制限される。

神の声を聴き、神に祈りを届ける能力が必要。才能と信仰心で決定される。

総称して神術と呼ばれており、使う権能については、「」の権能」

という形で呼ばれている（例：癒しの権能、風神の権能）

基本的に素質と信仰心のあるものが神殿等で修行して使うことができるが、神の寵愛と信仰心によつては独力で術を会得する者もいる。神官の数は各神殿の影響力に直結するため、それぞれ素質のありそうな子供を集めて英才教育を行っている。しかし、民衆に見せられるレベルで術を行使できるまで成長する者は少なく、関係者を悩ませている。

ちなみに神官といっても術を使える者と使えない者がおり、前者を神技官、後者を神務官と分ける場合もある。神々については別項目を参照のこと。

精霊術士（精霊使い、精霊の巫女）

精霊術士とは精霊と契約を結ぶなどして、精霊を使役する者を指す。通常契約には代償が必要となり、精霊の格に比例して代償は大きくなる。代償は下級精霊であれば大したものではないが、中級になれば腕や目など、上級になれば五感の一つというように厳しいものになる。精霊との親和性が高ければ代償は軽減される。

実際に精霊術を行使する際にも対価が必要となる。

これは精霊の種類に応じて変わり、単純に術者の生命力や、貴金属を必要とするなど様々である。

精霊術は個人の素質に大きく左右され、その才能を開花させるためには熟練した精霊術士の師について厳しい修行を積まなければならない。

精霊と契約するには危険が伴い、火の精霊などは契約に失敗して大火傷を負うなどの話に事欠かない。

行使する術に名称や種類は無く、精霊が術者のイメージを再現する。精霊については別項目を参照のこと。

魔獣術士（魔物使い、魔獣士）

魔物の力を借りる、あるいは取り込んで使う者を指す。

法術士が技で魔物の力を再現しようとしたのに対し、直接魔物の力を手に入れようとした結果生まれた術である。

術士は例外なく歪みに捉われて変貌し、発狂するか魔人へと到った。その結果多くの惨劇を生んだため、500年以上前に禁術として公から抹消されている。

しかし、その存在を示す噂が無くなったことは無い……。

法術士（古式）

1000年の歴史を持つ。

迷宮内もしくは大規模な歪みの発生した場所では、歪みを内包した物が発見される場合がある。これが法術を発動させるための起点となる「発動体」となる。

自分の体と生命力を触媒として、イメージを再現するための術式を展開する。その意味では精霊術に近いと言えなくもない（初期の法術は精霊術を参考にしていた）。

術を制御するために、体のどこか（通常は腕）に“制御紋”と呼ばれる模様を刻む。体に制御紋を刻むときには、刺青を入れる時に数倍する苦痛を伴うと言われている。また法術を発動する際にも負荷がかかり、術の規模に応じた苦痛が走る。

術が生命力に左右されるため、実は結構肉体派な職業である。

法術士（現代式）

現代式は近年、およそ150年ほど前から発達してきた手法である。多くの触媒（迷宮産出品）を用いた術式回路を作成、発動体に繋げ周囲の歪みを利用して発動する。術式起動時のみ自身の生命力を消費するが、古式に比べれば微々たるものである。

基本的に歪みが近くにある場所でしか使用できないため、別名迷宮式と言われている。例外的に高価な触媒（消耗品）を用いることで、歪みに頼らず術式を使用できる。

術式回路は使用するたびに摩耗し、規模・効果の高い術ほど寿命が短い。使い切れば一から作成しなければならないため、再度触媒を用意する必要がある。金食い虫と呼ばれる所以である。

流派にもよるが、一般的には発動体としての杖に術式回路を組み込むための機構を設けた専用の杖を用いる。近年では技術の進歩により、大半の術回路が札上の媒体に収められ、専用杖の接続溝に嵌め込むスタイルが主流。接続溝の数は術者の力量に応じてまちまちであるが、国所属の見習い術士が4、王宮法術士が12〜16程度となる。接続溝の数は術者の制御力に比例する。

回路の入れ替えには手間がかかるため、接続する回路の数が多いほど対応力のある術士だということになる。

専用杖はその機構上それなりの重さがあるため、もやしでは務まらない職業である。

異能士

先天性術士とも呼ばれており、発動体無しに特定の法術を能力として使用することができる。

天然の術式回路を体内に持ち、能力使用の際は古式法術同様生命力を消耗し、痛みを伴う。

外では微々たる力で本人も気付いていない場合が多いが、魔物に襲われたり探索者となり迷宮に潜ったりして危機にさらされた時、

防衛本能から一時的に回路が活性化され、暴走（笑）して発動する例が報告されている。巷では「覚醒」などと呼ばれて小説のネタになっているとかいないとか。
つまりいやばーん。

調律術士

歪みを修正する力を持ち、世俗の理に縛られない存在。国家ですらその調律行為を妨げてはいけないという不文律がある。

・ S e c r e t !

変な用語集（工事中）

・ いやばーん

古来より主人公キャラなどの能力覚醒に用いられるシチュエーションのこと。襲われて悲鳴を上げてから覚醒して敵を吹き飛ばしたりするのでこんな言葉が……。最近では違うのかも。

設定集（8 / 10 更新）（後書き）

色々書いておいてなんですが、ストーリーに全く絡まない予定の内容も多数御座います。ご注意ください。

（人物設定とか特に）

11・鬼の足音・1

一寸先も見通せない暗闇の中、水の流れる音が響いている。

複雑に枝分かれした鍾乳洞のそこかしこに、水溜りや小さな川の流
れが出来ている。

湿度は高く、足元は苔に覆われているため滑りやすい。

私は足元に注意しつつ、慎重に歩みを進めていた。

ここは蓬莱迷宮第2層”才無き者を阻む水の迷路”。

全20階からなり、第1層の人工的な石造りの迷宮とは一変して天
然の洞窟仕立てとなっている。

もちろん迷宮である以上、隠蔽された罠があちこちにあり、決して
天然物ではありえない。

下階に行くに従って水の面積が増え、最下部5階層に到っては中央
部に湖並みの水面が存在している。底は迷宮の構造上余り深くは無
いものの（それでも三階建ての家屋が浸かる位の深さはある）、水
棲の魔物が生息しており探索者の行く手を阻んでいる。

出現する魔物は豊富。

上層部では主に吸血蝙蝠、大水蛇、ゴブリン、小鬼、ポイズンスライム、毒粘体、鬼蛙など。

中・下層部では上記に加え水棲の魔物が増える。

私が第2層に足を踏み入れてほぼ2ヶ月が経過している。
既に外は雪が舞い始める寒さになっているが、迷宮内は常に一定、
探索に支障は無い。

最初は地形の変化と新たな魔物に戸惑ったが、ようやく慣れてきた。
そのため、今日はこれまでよりも深く潜るべく準備を整えて挑んで
いる。

万が一を考えて、大枚はたいて帰還用の術具も購入してきている。

この術具は「帰還門」と呼ばれているが、見た目は手のひらより少
し大きいくらいの円盤である。平らな地面に置くと、地上の門に繋
がる簡易門を形成する機能がある。ただし使い捨て。
帰りの道のりを短縮できるため非常に有効な術具なのだが、問題点
もある。

まず設置してから門を形成するまで時間がかかること。具体的には
3分程かかり、緊急時には使い難い。また歪みの影響が使用できな
い場所の存在や、稀ではあるが全く別の場所に捻じ曲げられて飛ば
されたという報告がある。そしてなにより、品薄かつ高価である。
今回購入したのは一番安い代物だが、それでも金10枚もしている。

正直加護を受けるための儀式費用とどちらを優先するか迷ったが、
先立つ物の都合でこちらにした。装備を良くしようとすれば際限な
く金のかかる場所、それが迷宮だ。

水音とは違う微かな物音が聞こえたため、私はそつと岩陰に隠れた。
灯りは布に包んで隠し、息を潜めて耳を澄ませる。

水音に紛れてはいるが物音は近くなり、複数の足音だと分かる。お

そらくは小鬼か。

基本3〜5匹の集団で徘徊しているため、ソロには面倒な相手だ。単体ではそれほど強い魔物ではないものの、武器を持ち稚拙ながらも連携して襲ってくるためである。

私も正面から闘う気は無い。

森で狩りをする時のように、気配を押さえて待つ。

暗闇を見通すことは出来ないが、周囲の地形は覚えており、後は音で把握できる。

「k i s i s i s i」

「g u f u f u」

小鬼共も大声で話すことの愚は理解しているのか、小声で囁きながら歩いている。

足音からすれば3匹。

やり過ごすかどうか考える。

……。

奇襲すればぎりぎり仕留められる数なので、後顧の憂い無く進むためしかけることにする。

音を立てないようにして投擲用の小刀を準備する。

小鬼達が私の潜む場所を通り過ぎた後、僅かに間を置いて奴らの前方に包みを放る。

大した物ではない、先ほど包んだ灯りの球だ。

目論見どおり、飛んでいくうちに包みは解け、連中の目の前で光が洞窟を照らし出す。

「g y a a ! ?」

「n a n d a ! ?」

閃光筒のように盲目状態にすることは出来ないが、ちょっとした代用にはなる。暗闇に慣れきった目には辛いだろう。

連中が眩しさと反射的に目を庇っているうちに素早く立ち上がり、一番後方にいた奴に小刀を二本投擲する。

自分もそれなりに眩しいのでやや精度は落ちたが、1体の首と背中に刺さったのを確認した。

即死はしないだろうが、麻痺毒も塗ってあるし戦闘不能だろう。

間髪を入れずに駆け出して距離を詰め、次の標的の後頭部に勢いを乗せた突きを放つ。

骨が砕ける手応えがあり、一瞬遅れてその体が倒れていく。

と、そこで私は体を捻る。

肩に熱を感じ、すぐにそれは痛みへと変わった。

歯を食いしばり、声を上げないようにしつつ逆方向へ距離を取る。

向き直れば残り1体が振り回した剣を構え直して戦闘態勢に入っている。刃に付いた赤い液体は私のものか。

人外の表情はよく分からないが、恐らく怒っているのだろう。顔を歪めてこちらを睨みつけてくる。既にその視界は良好なようだ。

睨み合いながら肩の具合を確かめる。

痛みは走るが問題ない。

傷を放っておいては不味いが、まずは目の前の魔物を仕留めることにした。

僅かに後退してみせると、弱気ととったのか一気に踏み込んで剣を振り下ろしてくる。

「s i y a a !」

「ふっ！」

錆びの浮いた剣を棒で受け止める。小鬼はその小柄な体に見合わぬ腕力があり、人を殺すには十分な一撃である。受け止めた衝撃で肩に痛みが走る。

思わず顔を顰めてしまうが、一瞬間をおいてから力を込めて剣を跳ね上げ、がら空きになった胴体に蹴りを叩きこむ。

小鬼の体がくの字に折れ、ちょうどよく目の前に差し出された頭部を掴み、そのまま顔面から床に叩きつける。

この時点でほぼ戦闘不能ではあるが、反撃されないよう剣を持った腕を踏みつけ、鉋を抜いて止めをさす。

素早く周囲を窺って、他の魔物などが近寄って来ていないかを調べる。

……。

少なくとも近寄ってくる音はしていない。

後始末を済ませるべく、残り2体についても手早く止めをさした。

「ふう……」

先ほど戦闘した場所から少し離れた所で、肩の傷の手当てを行った。毒が塗られていることを心配していたのだが、何も無いようなので通常の軟膏と包帯で処置を済ませた。

治療中も今の戦闘音に惹かれた敵が来ていないか神経を尖らせていたが、今の所気配は無い。

一息ついて緊張を緩める。

人型の魔物を殺すのも多少の抵抗はあるが、野盗と殺し合うのに比

べれば大したことはない。

闘い易さで言えばむしろやり易い。

人間と骨格が大差ないため、急所もほぼ変わらず、動きが予測し易いのである。

とりあえず集めた小鬼の所持品を検分する。

肉体に興味は無い。

血や内臓の一部が素材として使われるという話もあるが、手間がかかる上大量の血を流すので割に合わないのである。

ここで血を流すのは、吸血蝙蝠を呼び寄せるという意味を持つのだ。

戦利品は錆びた小剣2振りに棍棒1本。最初に仕留めた奴が皮の盾を持っていたが、ぼろぼろで使えそうにない。何に使っていたのかは分からないが銀の鎖……黒ずんでいるが多少の価値はありそうだ。硬貨は無い。

こんなものか。

食糧らしき塊があつたが人の食べるものではない。

小剣2振りと銀の鎖だけ持っていくことにする。

さらに奥に進む。

ここは地下15階、迷宮に入っておよそ3時間が経過しただろうか。無駄な戦闘はせず、手早く倒せる場合のみ自分から仕掛けているため、怪我は少ない。

急がず休憩も取っており、肉体的な疲労もまだ少ないが精神的にはかなり疲れてきている。

判断力が鈍らないよう、無理をせずに進みたい。

動きに支障が出る怪我をしたら、その時点で撤退する予定だ。神官

でもない限り怪我を即治癒することはできない。一部の恩恵や加護には自分のみ回復できる力があると聞くがその程度だ。

私が傷口に塗っている軟膏は簡単な毒消し+自己治癒効果上昇の効果があるが、傷口を塞ぐだけで2時間はかかるだろう。魔物を狩って強くなると自己治癒力も高くなっていくのだが、流れた血が戻る訳でもないため消耗は変わらない。正面戦闘は避けていくべきなのだ。

この階層、蝙蝠・蛇・蛙などはその習性を理解していれば遭遇率は一気に低くなる。

特に気を付けたいのが水場で血を流すことだ。確実に3種のどれかもしくは全部が寄ってくる。後は隠密行動でかわしていく。

蛙や蛇を避けながら30分程歩くと、そこだけ異質な雰囲気を放つ階段に出る。

周囲は明らかに天然の洞窟なのに、いきなり人工物の階段だ。ここら辺のいびつさは迷宮らしいところだろう。

降りると当然地下6階に出るが、私は地図を見て、地下7階への階段とは反対方向の道を進みだす。目的地は未踏査区域だ。

迷宮は、常に変化し続けていることもあり、浅い階だからと言って全ての道が明らかになっている訳ではない。第1層は除くが。

今回私が未踏査区域に向かっているのは、ただの気まぐれではない。むしろ今現在も、結構な数の探索者が同じ場所に向かっているはずだ。

その理由は、つい1月ほど前に発見された、“小迷宮”にある。

小迷宮とは、読んで字のごとく小さい迷宮である。

迷宮を木に例えれば、第1層から最下層までが木の幹となる。そして木の枝のように、迷宮から派生した規模の小さい別の迷宮が存在する。それが小迷宮である。

この鳳来迷宮においても、これまでに発見された小迷宮の数は30を超えている。

新しい小迷宮は財宝も手つかずということであり、最前線で探索する者してみれば興味も湧かないらしいが、中堅以下の面々には非常に魅力的である。

第2層上部という非常に浅い階層に入り口が発見されたこともあり、小迷宮自体の難易度もそれほど高くないことが予想された。

小迷宮が発見されたのが数年ぶりということもあり、当初は相当数の探索者が詰めかけていた。

その日のことを思い返してみる。

その日も私はいつものように露店で営業していたのだが、昼過ぎ辺りから、どことなく街がざわついていた。

人の動きから何かあったということは分かるし、決して悪いことが起こった訳でないのも見て取れた。

調べに行きたかったが、仕事を放りだす訳にはいかず、私自身が落ち着きの無い状態だった。

幸い、しばらくして見知った集団が通りかかったので声を掛けた。

「へい！ その兄さん方、一ついかがかな？」

「うん……？ ああ、週末の兄ちゃんか、そういやここで店を出してるつつう話だったか」

集団の先頭を歩いていた男がこちらに気付き、近寄ってくる。

当然、集団の他のメンバーも後ろから付いてくる。その中の法衣を着た女性が、呆れたように先頭の男に言い放つ。

「なんですかリーダー、まだここに食べに来てなかったんですか？

彼の店は結構評判ですよ？」

「うるせえ、俺は肉の方が好みなんだ。芋じゃ満足できないんだよ」

私は営業スマイルを浮かべながら見守っている。

彼らは第3層を中心に活動している男3人、女2人のパーティーだ。最近2層に踏み込んだことで他の探索者との交流も増え、情報交換するついでに店の宣伝もしている。初回割引は中々好評である。まあなんだ、第1層を超えないと半人前なので、余り相手にされないのだ。

それはともかく、男の食わず嫌いを治すべく私は攻勢に出た。

「まあまあそう言わずに一度どうぞ。他の皆さんは何度かいらしますし、話題作りにもいかがですか」

「兄ちゃん……いつもと口調が違くないか」

「リーダー、今の彼は商売人ですよ。週末とは違います」

後ろにいた神経質そうな男性が指摘する。

ちなみに週末の、と言われているが、それは私が週末のみ活動して

いるためである。

普段は露店をやっていると言うと呆れたように見られるが、副業があるという探索者も多少いるようなので、それほど奇異には受け止められていない。

探索が副業というのはまずいしないそうだが。

そのせいで舐められる場合が多いのだが、一緒に酒を飲んだり殴り合ったりすればそんなこともなくなるものだ。次の日は地獄だったが。

今日の前にいる男とは握手で張り合った仲である。

結果？

引き分けだった。互いに全力ではないけれど。

ただ実際の戦闘では到底敵わないだろう。地力の違い位は流石にわかる。

「お急ぎでなければ、今日の騒ぎについても聞かせて欲しいですね。半額でいかがですか？」

「そうね、私たちは急がない方針だし、夜にはどうせ掲示板で分かることだから。一つ頂戴」

「おい梗香……勝手に……」

「賛成」

「同意」

「異存ありません」

真のまとめ役である彼女　梗香さんの一声で次々と同意する面々。リーダーの威厳もありやしないうが、尻に敷かれている以上仕方ないね。

それぞれ注文を聞いて、手早く準備していく。

リーダーが　伊三雄さんというのだが、ふてくされているので、

おまけとして新作の腸詰も付けておいた。
個人的には、芋と肉だけだと栄養的には問題なので、何か野菜で新しい商品ができないか試行錯誤中である。

立ち話も通行人の迷惑になるため、店の脇にある休憩所に案内する。少し前に売り上げ増を狙い、許可を取って椅子とテーブルを設置したのだ。

元々広場は噴水の周囲に座れる場所が設けられているが、余り数が無い上に中央部で目立つため、端の方に買った食べ物を持って休める場所があればと思ったのだ。

競争相手である周囲の露店にも話を持っていき、共同で広場全体の3カ所に休憩場所を作った。

独断専行はいけない。全体の利益は自分の利益になる。

「はい、お待たせしました。お茶はサービスです」

テーブルの上に手早く並べていく。

女性2人が早速食べ始める。

「ん〜、やっぱりここのは香りが違うわね。なんていうか油臭さが無いもの」

「そうだねえ、どう考えてもバターの差だね。あっちの店のも美味いと思うけど、食べ比べると違うよね〜」

女性陣は好評価だが、男衆はまた違う意見もあるようだ。

「俺には良く分からん……悪くは無いがもつとこつ……あ、この腸詰は上手いな!」

「何一人だけおまけして貰っているんですか、不公平ですよ。」

銅5枚の差を考えると、味に拘る人はこっちを選ぶかもしれません

が、とりあえず食べたい人には余り関係ないのではないですかね」
「お茶が付いて相殺」

しばらく前に出来た類似店舗も、まだそこそ繁盛しているらしい。私は味を変える気は無いので、これ以上値段は落とせないのが辛い。別に赤字じゃないからいいのだけれど。

さて。

もう一人の女性が探索士の明葉^{あきは}さん。小柄で可愛い人だが、畏の発見・解除・隠し通路などの仕掛けの分析に精通している凄い人だ。神経質そうな男性が弓使いの蓮^{れんじ}二さん。片眼鏡をかけている二枚目だ。弓使いと言う割に、素手での格闘術にも長けている参報^{さんほう}役だ。やや口数が少なく、ゆったりとした服を着た男性が剣士の羅汗^{らかん}さん。小剣2振りを同時に使う異色の剣士だ。
この3人に重戦士の伊三雄さんと、神官の梗香^{えいこう}さんを加えた5人がこのパーティーだ。

全員若く、かなりの有望株として協会からも期待されているらしい。組み合わせもバランスがいいし、なにより神官がいるというのは心強い。

現在第3層下部を攻略中とのことである。

他の客が来ないか気を付けながら、騒ぎの原因について話を振る。

「それで、今日の騒ぎは何が原因なんですか？」

彼らは顔を見合わせた。

視線で話す人物を押し付け合つと、蓮二さんがこちらを向いて話し

始める。

余り大きい声ではないが、私には十分聞こえる大きさだ。

「そうですね……端的に言えば、新しい小迷宮が発見されましたね。現在協会が確認している最中ですよ」

「小迷宮!？」

思わず目を瞬かせる。

その意味を理解して興奮しかけたが、階層によっては手の届かない話なので、気を落ち着けて続きを聞くことにする。

「具体的には……どの辺ですか」

そこで蓮二さんはにやりと笑い。

「どの変だと思います?」

「……貴方がたでもいける場所で、急がず攻略する気があるということは浅い場所ですね?

しかもその問いをするということは……私にも目がある第2層ということですか」

「まさにその通り」

そこで、もう食べ終えてお茶を飲んでいた明葉さんが話に加わる。

「普通は多少荒らしてから協会に報告するんだけどね。今回見つけたのはまだ新人の2人組でね、魔物が多くて余り奥に行けなかったらしく、直ぐに報告が来たのさ」

「つまりまだ荒らされていないということで、漏れ聞いた奴らが急ぎ探しに向かっているのが現在という訳だ」

「ははあ……階層も公表されていないのにご苦労様ですね……」

気持ちは分かるのだが。

伊三雄さんが私を見て、真面目な表情で言う。

「行きたいか？……でもすぐは止めときな。宝が欲しくて荒らぶつて連中ばかりだ。

そんなところにソロで突っ込んでみる。うっかり事故が起きても文句は言えねえぞ」

「分かってますよ……。そもそも情報が無いところに行くような真似はしません」

そんな無謀な真似は御免だ。

人数がいれば話は別なのだが……中々都合が合う人物がない。

そんな私の胸中を読んだかのように、梗香さんが声をかけてくる。

「ねえ……まだ独りで挑むつもりなの？

前にも言ったけれど、貴男なら知っているパーティーに紹介しても良いと思っているのよ？」

「そうだな、一々小細工が多いのは気に入らないが、その若さでその筋力は大したもんだし、度胸もある。正直惜しい」

「……でも、その紹介は探索に専念した場合、という前提ですよ」

非常に有り難く、善意からだと分かっているので申し訳ないが、遠回しに断る。

2人とも沈黙する。

「探索のみで身を立てられるという確証があればいいんですけどね……。

今の商売を放り出して全てを賭けるのは……難しいです。自分でも我儘だとは思っているんですけどね」

自嘲する。

すると、何故か近寄ってきた羅汗さんに頭をはたかれる。

「ちょ、何するんですか！」

羅汗さんは、抗議にも動じず重々しく言う。

「我儘を言うのは若者の特権だ。大いに悩め」

「何一見格好良さそうなことを言ってるんです」

相変わらず行動の読めない人物だ。この人だけは何をするのか予測がつかない。

「ま、仕方ないな！」

お前さんに都合が合いそうな奴がいたら、また話を持ってくるとするさー！」

伊三雄さんがわざとらしく明るく喋る。

気遣いに思わず苦笑してしまう。

「今も合う人物がいなかあちこち探していますけどね、見つけたら是非教えて下さい。奢りますよ！」

梗香さんの無言の催促に応え、もう一杯ずつお茶を注ぎながら答える。

そして話を戻す。

「それで、皆さんは小迷宮に挑むんですね」

私の問いに笑って答える面々。

「そうだな、今日は準備を整えて、後は情報待ちだ」

「迷宮の傾向、魔物の種類・遭遇頻度、ある程度判明したら装備を調整して出撃さ」

「特に罠はね、傾向を間違えると危険だから、身をもって確かめてくれる人身御供が必要なのよ」

「是」

「慌てる乞食は貰いが少ないってね？」

彼らの自信に溢れた表情に、羨望の眼差しを禁じ得ない。
いずれはこうなりたいものだ。

「それでは御武運をお祈りしていますよ」

笑って彼らを送り出すと同時に、今後の予定を修正する。

どうせ週末まで動けないが、同業者の多くが小迷宮へ行くと考えて探索の計画を練り直すのだった。

ということがあった訳だが。

本当に騒ぎになったのは、協会が情報を公表した夜だった。

それから2週間ほどお祭り騒ぎになり、少しずつ沈静化していった。
小迷宮は1階毎の規模も小さめなため、既に人海戦術でかなり攻略されているらしい。

最近は流石に少し停滞し始めたようだが。

今回の小迷宮は、出現する魔物の大半が鬼族であることから「鬼ヶ島」と名付けられている。
なぜ島なのかと言うと、小迷宮への入り口が小島のような場所に存在しているからである。

今日も多くの探索者が通っているせいか、遭遇する魔物は少ない。
私は足音を忍ばせながら、鬼ヶ島の入り口を目指す。

途中鬼蛙を2回、大水蛇を1回避けた後、件の小島を視界に収めた。
そこは湖と言うほどではないが、大きな池の様な水場になっており、中央に陸地がある。こちら側からは見えないが、あそこに入り口があるのだろう。
周囲には多数の足跡が残されており、探索者の出入りが多いことを示している。

水際に近づいていくと、小島と岸の一番狭い所に灯りが設置されているのが見えた。

協会で簡易の休憩地点を設置していると聞いていたが、あれがそんなのだろう。

節約のため、手元の灯りを消して近づいていく。

協会の職員だろうか、両岸に2人ずつ人がいるのが見える。

手を上げて挨拶をする。

「お疲れ様です」

「やあ、1人かい？お疲れ様」

ゆったりとした着物をきた壮年の男性が応えてくれる。

もう1人はというと、良く見れば椅子で眠っているようだ。交代制なのかもしれない。

周囲には魔物避けの術具が置かれており、この辺であれば問題は無いのだろう。

「1人でどうにか頑張ってますよ。ここが渡し場ですか？」

「ああ、すぐに渡るかい？」

「せっかくだから少し休憩していきましようか」

男性の表情が、笑っていながらも『淒く暇だ』という風に訴えているように見えたので、休憩を取ることにする。

周囲には余分に椅子が何脚か置いてあり、誰でも休憩が取れるようになっていいる。

「ここで軽く食事をとってもいいですか？」

「構わないよ、そのための休憩場所だしね。まあここに詰めていると熱々の食事が恋しくなるがね？」

「そうですね、どのくらいで交代しているんですか」

「大体4時間ごとにこいつと交代しているかな」

眠っている人物を指して言う。

「それで交代しながら丸1日いるわけだ。後は本部から入替要員がやってきたら上に戻るのさ。面倒だが危険手当は魅力的だね」

にやりと笑った表情に、つられて私もわらってしまう。

さて、私も昼食をとることにしよう。

協会や周囲の店では、保存が利き栄養価の高い携帯食が売られてい

る。効果や味で幾つかの種類が存在するが、基本的には手早く食べられて腹持ちが良いことが優先されている。

迷宮内で調理をすることは殆ど無い。匂いは魔物を惹き付ける可能性の高い要素であり、また調理器具が嵩張るためでもある。

流石に湯を沸かしてスープを飲む程度はするらしい……、固形食だけというのは気が滅入る。

私は店売りの携帯食を持参している訳ではない。

というか露店とはいえ飲食物を売っている者が、そんな既製品で我慢して良いわけがあるだろうか、いやない。

という訳で水筒と昼飯の包みを取り出す。

今日包んできたのは麺麰に肉や野菜などの具材を挟んだものだ。食べやすいよう一つずつ水を透さない紙で包んである。

「ほう、サンドウィッチか。なかなか美味そうじゃないか」

「自作ですよ」

よほど暇なのか、対面の椅子に座った職員の人々が笑いながら弁当を見つめてくる。

サンドウィッチとは、麺麰に具材を挟んだ料理のことを言い、西方から伝わってきた言葉、らしい。

（……だがそれも奇妙な話。既に“記憶の世界”で知っていた訳だが）

良く噛みながら考える。

謎の記憶と、この世界には共通点が多い。動物・植物・鉱物と、同じモノが存在している。

果たして別世界で、全く同じモノが多数あるということがあるのだ

ろうか？

勿論この世界にあつて記憶に無いモノも多い。歪みがいい例だろう。

記憶の知識を使えば、あやふやではあるが幾つかの仮説は考えられる。

例えば平行世界という理論。

近似した世界と仮定するならば、「歪みが存在した場合の世界」ということになる。確かめる方法は無いが。

もしくは同一時間軸上での遠い未来。

「何か」が起こつて今の様な世界になつたとも考えられなくはない。やはり今の所確かめる方法は無いが。

（どちらにしても……私と同じような記憶の持ち主が他にもいる可能性は否定できない……。果たしてサンドウィッチなんて同じ固有名詞が、同じ料理に対し出てくるものだろうか？

記憶から料理を再現した人物がそのまま名付けたと考えた方が、ずんなりと収まるだろうが……）

最も、記憶にしても『サンドウィッチ』の由来は判然としない。人物名からというのが有力らしいが、他にも諸説あつたという……。

結論が出ないため、思考を打ち切る。

水筒の蓋に水を注ぎ、水分を補給する。

本当はお茶が望ましいのだが、いざというとききれいな水は色々なことに使用できるため我慢している。

昼食は冷えてはいるが悪くない出来だった。

鶏を主とした合挽き肉を平たく焼き上げ、肉汁が周りにしみ出さないよう野菜の葉で包み、胡瓜の漬物とともに辛子と発酵バターを塗

って挟んである。

やはり美味しい物は素晴らしい。携帯食とは天と地ほどの差がある。何度か味わった携帯食の味を思い出……すのも嫌なので、頭を振って思考を追い払う。

ふと前を見ると、職員の人はまだこちらを見つめている。正確には手元のサンドウィッチをか。

「……………」

「……………」

「ええと……良ければお1ついかがですか？」

無言の視線が続けられるのに耐えられず、とりあえず一切れ勧めてみる。

すると待っていたかのように、嬉しそうに手を伸ばしてくる。

「そうかい？ いやあ悪いねえ」

全然悪いとも思っていない口調だが、特に反感は湧かない。終始にこやかな表情をされていると起こる気も失せるというもの。分量も多めに作ってきているので、私が空腹になるという訳ではないし、協会の職員の好感度を上げておくのも悪い話ではない。役に立つかどうかは別として。

「おお、これは美味しいじゃないか。これは肉団子を平たくしたのかね？ 時間の経ったサンドウィッチというとはさばさして食べにくい物が多いが、冷えている割に肉汁がしみだしてきて食べやすいな」
「そういう風に作りしたので……その分長くは置けませんね、昼食が限界です」

「なるほどなるほど」

あっという間に上機嫌で食べ終えてしまった。

私はまだ半分過ぎた所である。早食いは胃に負担がかかるため、ゆっくり良く噛んで食べているのだ。

「ご馳走様でした」

職員の人ばかり手合わせて頭を下げてくる。

私は口が塞がっていたので、頭だけ下げておく。まあ、美味しく食べて貰えたならなによりである。

後で露店の宣伝もおこう。

「ところで、……ああ、食べながらで構わないが、鬼ヶ島に行くんだね？」

私はその言葉に食べながら頷く。

「今日もかなりの人数が向かっているが、いささか素行の悪い者が混じっているようなので注意した方がいいだろう」

「……！」

思わず食べる手を止める。職員の表情は真面目なものになっており、先ほどの笑顔は欠片もない。

淡々と話は続いている。

「不慮の事故で身動きの取り辛くなった所に助けに現れ、助ける対価として相当額を要求するそう。それだけであれば慈善事業でもないし仕方のない事だが、最近不慮の事故が妙に多くてね？それに助けに来た者の多くが同一集団に属しているらしい」

大袈裟に肩をすくめている。

「証拠もないし、迷宮の中の事は大体自己責任だから我々からは表立って注意もできない。君がソロなら特に注意した方がいいだろう」

「……ご忠告ありがとうございます」

「なに、肉汁でつい舌が滑ってしまっただけさ」

彼は笑って話を終える。

ほどなく昼食を食べ終えたが、すぐには出発しなかった。

鬼ヶ島に挑むにあたって、体調を万全にしておきたかったからである。

休憩している間にも、何組かの探索者がやってきたが、ここで休憩しようとはせず足早に通り過ぎていった。

私はしばし当たり障りのない会話を楽しんだ後、腕を回して肩の具合確かめる。

傷も塞がり、多少激しく動いても問題はなさそうだ。

「さて、私はそろそろ行こうと思います」

「はは、いつまでいるのかと思ったよ」

「傷の違和感が無くなりましたからね、これで万全です。ゆっくり休めるというのは実にありがたい話ですよ」

「若い者は早く進みたがるものだけど、落ち着いているじゃないか。まあ落ち着きの無い者はソロでやっていけないがね」

私は立ち上がって、忘れ物が無いか確認する。

「ではお願いします」

「了解。船に乗ってくれ」

言葉に従い、そばに浮かんでいる無人の船に乗り込む。

職員の人が手元の器具を操作すると、船がゆっくりと回転し、舳先を小島に向ける。

これは遠隔操作できる船なのだ。

「では、良い探索を」

滑るように船が進みだす。

船自体は大人5人が乗れる程度の大きさだったが、意外に揺れなかった。

ここは波も立っていないので、水に落ちるなどと言う間抜けをさらすこともない。

何事も無く小島に着き、私はこちら側にいた協会職員にあいさつした後小迷宮の入り口へと向かった。

岸からは突き出た岩に遮られて見えない位置に、それはぽっかりと口を開けている。

冷気を含んだ風が穴から噴き出しており、思わず唾を飲み込む。

「ここが鬼の棲む穴という訳だね……」

良く嗅げば、血の匂いも混じっているのが分かる。

この程度で気分が悪くなるということも無いが、心地良いものでは

ない。

躊躇っていても始まらないので、足を踏み入れる。

正確に言えばここは小迷宮への連結部であり、少し進むと様相が一気に変わるらしい。

まだ叫べば休憩地点の職員に声が届く位置であり、何か仕掛けられているとは思わないが慎重に進む。

通路は余り広くは無く、多少圧迫感を感じる。歩いていると、程なく前方が開けてくる。

「ふむ……」

それまでは茶系統の色をしていた周囲の岩が、広くなり始めた辺りから急に青みを帯び始めてくる。

荷馬車が余裕を持つてすれ違える位の幅になる頃には、床から天井までが青灰色の空間へと変貌していた。

広場の様な場所になったところで足を止める。

先にあるのは3方向に分岐した道。

「鬼が出るか蛇が出るか……鬼は確実に出るけどな」

どれを進もうかと悩んだ時、ふと重大なことを思い出す。

「しまった……店の宣伝し忘れた……!!」

なんとという失態だろうか。

商売人としてあるまじき姿。

余りの衝撃に、探索を再開するまでにおよそ3分を要したのだった。

11・鬼の足音・1（後書き）

ファンタジーといえはゴブリン。
素人の大人より大分強いです。

12・鬼の足音・2

私は気を取り直した後、記録用の道具を取り出して地図の書き込みを始めた。

ここからは地図作成の技能も重要になってくる。方向感覚に自信はあるが、それさえも狂わすのが迷宮であるからだ。

それぞれの道に続く足跡を調べ、既に公表されている地図情報と照らし合わせる。

やはり階段への最短経路となる道にほとんどの足跡が付いている。残りは遠回りになる道と、行き止まりになる道なので当然といえるだろう。

階段への道筋はともかく、それ以外の範囲がどれだけ探索されたのかは全く分からない。進んで情報を公開する者などいるはずもないからだ。

迷宮自体が小さ目であることを考えると、7割は探索されていると判断していいだろう。

記録用具を持ったままでは動きが制限されてしまったため、武器に持ち替えてから歩き始める。

書き込みは分岐点や大きく変化のある地点で行えばいいのだ。距離は歩数で概算すればいい。

周囲の環境は、先ほどまでの本迷宮とは一変。水音が無くなり、風の音にとって代わられている。常にどこからか風が吹いており、辺りは乾燥しているといってもいい。

見た目は一言でいえば、青い洞穴。

灯りに照らし出され、周囲が青い色に染められている。

どこか不気味な光景だ。

所々に蔦のような植物が壁面を覆っているが、その部分だけ水気があるのだろうか。

私は時々地図に記録しながら、青い洞窟を進んでいった。

目の前には階段がある。

驚くべきことに、ここまで全く魔物の襲撃は無かった。

多くの探索者が先行しているため、皆片付けられたと考えるのが妥当だろうが、それにしても静かすぎる。

頭のどこかで警戒しろという囁きが聞こえる気がする。

階段の記号を地図に書き込むと、気配を押さえて階段を降りていく。

(……)

階段を降りても何も無く、不安が増していく。

魔物がいない。

探索者もいない。

この静けさ。

風の音だけが響いている。

「……………くそっ」

小声で吐き捨てる。

休憩している間にも同業者は何組も通っているため、人がいないということはありえない。

よく目を凝らせば、所々足跡も付いている。

(……………どういう、ことだ?)

言いようのない不安と焦燥がこみ上げてくる。

明らかに普通ではない。異常だ。

ひとまず落ち着こうと足を止めて壁によりかかり、乱れた心を落ち着ける。

ゆっくりと深呼吸を行う。

「……………ふう」

何も無いからといっておかしくなるのは理に合わない。

何が変なのか整理すべきだ。

やはり、盛大に攻略していて魔物を狩り尽くしたためだろう。

それで皆さつさと下階へ進んでしまっているのだ。私は余り早く進んでいる訳ではないから、追いつけないということだ。

というのが順当な仮説。

小鬼共だつて、すぐ襲われるような上の階には居たくないだろう。

時間が勿体無いため、自分を納得させて落ち着いた所で再び歩き出す。

独りだから静かで余計不安になるのだろう。人数がいればここまで静けさを感じることは無いはずだ。

調子を戻すため、自分の頬を両手で強めに叩く。

「　　っ!」

かなり痛い。

鏡で見ればかなり赤くなっているだろう。
だがこの痛みが今は心地良い。

「敵がいなくても動揺するっていうのは……未熟だつてことだ」

目を閉じ、焦燥が収まっていることを確認する。

不安が払拭された訳では無い。

現状がおかしいのは確かであるため、相応の心構えをして挑めば良いのだ。

無理やり笑って前を見据える。

（とはいえこのまま素直に進むのは、まるで台本通りで好きじゃな

いね。長期戦の準備はしてあるし……ここは……）
現在15階分公表されている地図情報を確認し、私は階段への道筋から逸れることにした。

横道に逸れ、階段からやや遠ざかる方角に進むことしばし。
だんだん同業者の痕跡も少なくなってくる。

私は奥に向かう通路で、足跡が少ない方を選んで進んでいく。

2時間程経っただろうか、ついに人の痕跡が無い分岐点を発見する。
人の足跡が無い道がさらに奥に伸びている。

おそらく位置関係でいえば降りる階段よりも奥側になるだろう。

私は無理に下へ進む気は無い。
適度に成果を挙げられればそれでいいのだ。

いざ進もうとしたところで、灯りの球が明滅を始めたため新しい物に取り換える。

予備の球は後2個あるため問題は無い。

効力の切れた球は飛礫代わりに使うつもりだ。

敵の気配が無いことを確認してからしゃがみ、床面を観察する。

人の足跡は、無い。

だが魔物の痕跡は、ある。

意識を狩をする時の状態に切り替えて、畏に注意しながら足跡を追う。

見立てではそれ程古い物ではない。

雨も降らない迷宮とはいえ、風が吹き続けているこの場所では足跡も塵芥で消えていく。

恐らくここ数日内の物で、奥に向かっているはずだ。

幾つかの分岐を過ぎた後、詳細な痕跡を発見した。

その辺りには蔦が茂っており、他の場所に比べて枯れた蔦が散らばり床に痕跡が残り易くなっている。何か荷物でも持っているのか、足跡が大分くつきりと残っている。

(……3体……いや4体か？ 個体差か種類が異なるのか……何か歩き方が違うのが1体いるな。小鬼なのは間違いないが……？) 魔物の足跡について知識が少ないのでこれ以上はよく分からない

このまま後を追うかどうか少し考える。

小鬼4体は正面きつては不味いものの、闘うにしろ逃げるにしろ惜しまず閃光や煙幕を使えばどうにかなる相手だ。しかしもし通常の小鬼より上位の種類が混じっていたら……例えば小鬼^{ホラ・ユプリン}長や朱小鬼^{レッドキャップ}がいたら、即座に逃げるしかないだろう。

1対1ならまだ勝ち目はあるが、数で負けている時点でお話にならない。

腹を決めて足跡を辿っていく。

最悪あらゆる手段を使って逃げればよからうなのだ。

勝利条件は無事に生き延びること、財宝やらはおまけでしかない。

これまで以上に気配を押さえて歩いていく。
今しがたの痕跡から、足跡はここ1日以内の物だと確信したためだ。
いるかいはいかは分からないが、用心するに越したことは無い。

引き続き足跡を辿るうち、広間のような場所に出た。
魔物の姿は無い。

だが、どこからか吹いてくる風に乗って異臭が感じられた。

(……どこだ?)

広場は行き止まりではなく、今入ってきた入り口とは別にどこかに
続く道が2本口を開けている。

足元に注意しながらそちらに向う。

(……違う)

2本の道からは風が流れてきていない。
ではこの臭いはどこからくるのか?

私は壁面を這っている蔦に目を留める。

風に揺れている……が、問題はその揺れ方だ。

横から通り過ぎる風による揺れではない、むしろ裏から風が噴き出
しているような。

(……蔦の壁の裏側に道というわけか)

音を立てないよう蔦を掻き分ければ、そこに現れたのは更なる道。

はつきりと異臭　血の臭い　が嗅ぎ取れる。

間違いなくこの道の向こうにいる。

突入する前に脳内で段取りを確認する。

襲撃する場合、相手の位置・状態によって変わるが、基本先手を打って閃光筒を使用する。相手に上位種がいるいないに関わらず閃光は有効だからだ。

そして接敵前に小刀と炸裂瓶で可能な限り数を減らす。
後は暴れるだけだ。

（……なんだ？）

いざ通路に入ろうとした時、ふと洞窟が揺れた気がした。

揺れたというよりは、振動が伝わってきたという所だろうか。特に周囲に変わった様子は無いし、中の気配にも変化は無い。

首を捻った後、そつと蔦裏の通路に入り込む。

10歩程度で進んだところで曲がり角になったが、驚いたことに灯りが見えている。揺らめき方からして松明かなにかだろうか。

灯りの球を包み、慎重に向こう側を観察する。本当は鏡などで確認したい所だが、反射した光で気づかれる恐れがあるので使えない。

（そつとね……）

曲がり角の向こう側に広がっていた光景に、私は思わず息を呑んだ。貴族の邸宅が3つは立てられそうなほどの空間。その中に赤く揺らめく松明に照らされて浮かび上がっていたのは、巨大な法陣だった。法陣というのは法術の補助に使われるものだが、目の前にあるものも間違いなくそれだ。

しかし私が驚いたのは法陣があることではなく、それを起動し儀式を行っているのが小鬼だという事実だ。

杖を持った小鬼が陣の中で意味の分からない言葉を唱えており、陣

の周囲で3体の小鬼が何かを手に捧げている。
物体からは血が滴っており、床に形作られている法陣を赤く染めて
いる。いや、陣自体を溝に注いだ血で作っているのか。

そこは明らかに異様な気配に満ちていた。

直感的に、この儀式を止めるべきだと判断し、閃光筒を投げ込もう
と腕をひねる。

だがその時私は気づいてしまった。
血を滴らせている物体の正体に。

松明の灯りでは分かり辛かったが、あれは、人の　。

「……………っ!」

その凄惨な光景に怖気と憤怒が湧き上がり、心をかき乱す。
反射的に冷静になろうと集中し、投擲動作を止めてしまう。

その時激情に任せて閃光筒を投げていれば一旦は儀式を止められて
いただろう。

その一瞬を私はすぐに後悔することとなった。

杖持ちの小鬼が一際高い声を発すると、法陣が光を放ち明滅を始め
る。

まるで生き物の鼓動のように、赤黒い輝きが脈打ちながら輝きを増
していく。

「くっ!」

私は慌てて妨害しようとするが、その瞬間平衡感覚を失ったかのような状態に陥り、倒れそうになって床に手を付いてしまう。

(……うう、何が……)

内臓が、いや体全体が振れる様な感覚。

とても物を投げるところではない。

混乱しながらも、以前に一度近い感覚を味わったことを思い出す。
迷宮初日だ。

あの時味わった肉体が歪む感覚。それに似ている。
つまりこれは。

(歪みが……発生している！？)

目の前で事態は進んでいく。

小鬼達も立ってはいられないようだが、唯一杖持ちのみが立ち続けている。

その目前、法陣の中央部の光景がぐにやりと渦を巻くように歪み、その空間に血のような赤い色をしたあるものを生み出した。

「なん……だと……」

私は驚愕で目を見開いた。

そこに出現したのは、色こそ違えど”門”だった。

小鬼が門を造り出したという恐ろしい事実が私を打ちのめす。

勿論迷宮には知能の高い魔物も存在し、様々な道具や術を使ってく

ることは知られている。

歪みから発生した存在とはいえ、知能があればそれ相応の行動を取るのだ。

特に群れをなす種族は集まって”巢”を造り、団体行動を行う習性があるらしい。

だが人の造り出した叡智の一つともいうべき門創造すら魔物が行うなど……想像もしていなかった。

聞いたことも無い。

そんな噂すら無い。

門というものは、当然何かが通行するためにある。

私が茫然自失に陥っている間に、門から次々と黒い影が湧き出してくる。

小鬼を巨大にしたような影、黒い獣に鬼が跨った影、先ほど儀式を行っていた小鬼と同じように杖を持った影……。

広いはずの空間があつと言う間に埋め尽くされていく。

見つかる前にどうにか我を取り戻し、私は気づかれないように体を曲がり角の影に隠した。

歪みが収まっており、既に体は動くようになっていく。

急展開に対して早鐘のように脈打つ心臓とは別に、頭はむしろ冷え切っていた。

自問自答する。

私：行動方針は命大事に。

私：了解。「にげる」を選択する。

私は鬼の群れに気取られないよう、息を殺しながらゆっくり通路を戻っていく。

出口の蔦を書き分けて出て、ようやく明かりを開放する。
息を付いて周囲を見回すと、そこに小鬼がいた。

「…………え？」

「…………gue？」

目と目が見つめ合う。
互いに目を擦る。

……。

「うわあ！」

「giyaa！」

共に驚きの叫びをあげる。

（しまった！）

後悔するが既に遅い。声が聞こえてしまったのか後ろの気配が変化する。

「ちいっ！」

とつさに間合いを詰め、小鬼の顎を拳で打ち抜く。

腰の捻りを乗せられなかったものの、金属板を仕込んだ籠手のおかげで威力はそこそこだ。

まともに喰らった小鬼が仰向けに倒れ、目を回す。

私は自分が入ってきた通路を確認すると、置き土産に煙幕筒を転がして一目散に駆け出した。

閑話2・前線での出来事

「せいっ！」

旋風の様な斧槍の一撃が、集団を率いていた大鬼オウガの首を跳ね飛ばす。それを見て浮足立った小鬼の集団に、両手にそれぞれ小剣を構えた男が飛び込み、踊るような動きで喉を掻き切っていく。

男が手早く4体目の小鬼を始末した所で、集団の後方に佇んでいた多数の装飾品を身に纏った小鬼が杖を掲げる。

すると杖の先端付近の空間が歪み、人の頭ほどの大きさの渦を巻く炎が出現する。

炎は一瞬の間を置いて、矢のような勢いで小鬼と交戦している男を目がけて飛んでいく。

「ちっ！」

迫る危険に気付いた男は咄嗟に回避しようとするも、周囲の小鬼が飛びついて邪魔をする。

刹那、洞窟内に轟音が響き、その炎の大きさからは予想できない量の爆炎が通路を飲み込み、周囲を赤々と照らし出す。

「羅汗！」

「大事無い！」

小鬼の死体を盾にして直撃を避け、爆風に飛ばされて受け身を取っ

た男　　羅汗が答える。

しかしその服は黒く焼け焦げており、決して軽傷ではないことが分かる。

炎が視界を遮っている内に、法衣を纏った女性　　梗香が駆け寄り、羅汗を後方に引き摺って行く。

「蓮二、呪術士を狙ってくれ！」

「了解です」

歪みから生まれた炎は、一定時間が過ぎるとそこに何も無かったかのように掻き消える。

そこには10体以上の数の小鬼が黒こげになって転がっており、炎の渦の威力と同族ごと攻撃した冷酷さが窺える。

双方の視界が開けた瞬間、蓮二の引き絞られた弓から杖を持った小鬼に向けて矢が放たれる。

「giyuwa！」

けたけたと嗤っていた小鬼呪術士は驚愕の悲鳴を上げ、慌てて杖を掲げて矢を打ち落とす。

直接矢を払っている訳ではなく、杖の周囲に何かが渦を巻いて矢を逸らしているようだ。

だが小鬼がほっとする間も無く次々矢が飛来し、呪術を使う暇もない。

「今のうちに！」

「おうよ！」

射線を遮らないように身を沈めながら、斧槍を構えた男　　伊三雄
が残りの小鬼に接近する。

突破して呪術士を倒そうと試みるが、そこは小鬼達も迎撃の構えで通そうとしない。

この階層にもなると、小鬼とはいえ装備が充実している。

伊三雄が振るった斧槍を、複数体が協力して方盾を構えて耐えしのご。押し込もうとすればその後ろから長槍が伸びて邪魔をする。確実に時間稼ぎに徹していることが分かる動きである。

「ええい、面倒な！」

その内に、矢を捌いていた小鬼呪術士は石筍の影に体を隠すことに成功する。

当然矢は分厚い石の壁に阻まれ、直接狙うことが出来なくなる。

「不味いな、来るぞ！」

言葉通り、石筍の影から突き出された杖の先に先ほどよりも一回り大きな炎が出現する。

伊三雄はまだ小鬼の壁を突破できず、止める手立ては無い。

「はいそこまで」

炎が打ち出される直前、奥の暗闇から湧いて出た女　明葉が呪術士の喉を切り裂いた。

小鬼呪術士は僅かに口を動かすが、血が溢れて言葉を発することが出来ない。呆然とした表情のままゆっくりと倒れていく。

浮かんでいた炎の渦は、一瞬膨れ上がるも制御を失い、火の粉となって消え去った。

「遅いぞ！」

「ごめんねえ！」

掃討戦が開始される。

大鬼と呪術士を失い、泡を食った小鬼の集団など彼らにとっては脅威ではない。

程なくして辺りは静けさを取り戻した。

「……ふう、これで終了よ」

「かたじけない」

梗香の治癒の祈りにより、羅汗の怪我は綺麗に治療されている。先ほどの炎で手足にかなりの火傷を負っていたが、既に跡形もない。彼女は豊穰の神に仕えており、生命力に関する奇跡を多く行使できるため、かなりの重症まで治すことができる。

「でも服が台無しよね」

羅汗の服は袖口や裾が炭になっており、見た目にも酷いものだ。本来この服は特殊な糸で織られており、更に装飾品で術式による強化がかかっているため金属鎧並の強靭さがある。炎への耐性が無かったのが今回の負傷に繋がっているが、それでも優秀かつ高価な防具である。

「大丈夫だ、問題無い」

炭になった部分を払い落とし、羅汗は立ち上がる。

そこに戦利品を集め終わった明葉と蓮二が戻ってくる。その間伊三雄は周囲の警戒を行っている。

「お待たせえ」

「一旦移動しましょう。少し前に通り過ぎた広間がいいかと」

全員が頷き、無駄口を叩かず移動を開始する。死骸が転がっている場所に居ても良いことは無い。

先行して明葉が音も無く暗闇に消えていく。彼女は暗視の恩恵を保持しているため、灯りが無くても支障は無い。

暗視は暗闇での行動を続けていると習得し易いと言われているが、元々の素質も関係しているのか保持者はそう多くない。

敵の有無を確認し、非常時にも対応しやすい広間に腰を落ち着けて休憩を取る一行。

魔物が本能的に嫌う香（人間にはほぼ無臭）を焚き、携帯食を齧りながら話し合う。

「余り大した物は無かったのですが、この呪術士の杖と大鬼の持っていた金棒は価値があります。後は装飾品がこれぐらいですね」

「この杖は……増幅効果でもあるのかしら？ 小鬼があれだけの呪術を使うのを見たのは初めてよ」

「どうかなあ？ 発動体なのは間違いないけどね、後は協会に調べて貰わないと分からないねえ」

「法術士なら分かんのかねえ」

「……（咀嚼する音）」

戦利品について話を終えると、持ち運びやすく纏めて分担して荷物に加える。

金棒については重く嵩張るため持ち帰るかどうかが議論されたが、とりあえずまだ荷物に余裕のある伊三雄が背負っていくことになった。

荷物の纏め方は探索者の必須技能といえる。

如何に動きやすく纏めて宝を持ち帰るかは非常に重要である。欲をかいて動きが鈍くなり、帰り道で魔物にやられた探索者の話は多い。この世界に容積を無視した袋とかいう夢物語な道具は存在しないのだ。重量を減らす効果のある遺物というのは存在するらしいが。

話し合いは今後の方針に移る。

「さて、この22階層もそろそろ半分位かと思うんだが、どうする？」

「物資は問題ないですね、どちらかといえば梗香さんの体力次第ですが……」

神官のいるパーティーの行動基準は、神官の体力が持つかどうかに左右される場合が非常に多い。

問われた梗香は少し考えた後口を開く。

「通常の治癒なら後10回、重症の治癒なら5回かしら」

迷宮内という神経を使う場所では、たとえ睡眠を取ったとしても体力が完全には回復させることは難しい。長期間の探索で消耗した体力は、神官の治療可能回数という形で直接に響いてくる。

「もう3日目だしなあ、無理させちまってすまねえな」
「別に貴男が謝ることじゃないわ」

伊三雄がすまなそうに頭を下げると、そっけなく梗香が返答する。
会話ではこの程度だが、実はこの2人恋人同士である。

神官である梗香が探索者になっているのも、恋人である伊三雄を死なせないためなのだとか。

周囲も慣れたもので、生暖かい視線で常に見守っている。

「お2人には後でいちやついて貰うとしまして、正直敵の強さが急速に上がっています。20階を過ぎてからですが、ただの小鬼でも明らかに連携した動きになっているように思います」

「いちやついてなんかいいわよ」

「はいはいわかってるよう。あの小鬼の呪術士だねえ、問題は。これから先あんなのがほいほい出てこられると梗香ちゃんの治癒が持たないよ？」

呪術士系の魔物って本迷宮じゃ少ないけど……鬼の巣だけに数がいそくだよ？」

呪術士とは、魔物の中で術を使う個体を指す用語である。稀に人間でも外道に落ちた者に対して使われる場合もある。

「そこなんだけど……何か変じゃねえか？」

ぼりぼりと頭を掻きながら、伊三雄が言う。

「何がですか？」

「呪術士は厄介だけどな、さっきの奴はちょっと取り巻きの数が少ない気がしてな」

「ふむ……」

呪術士系の魔物は総じて知能が高いため、術を行使する自分の身を守らせるため格下の魔物を多く引き連れているのが通常である。

「大鬼がいたから、その分少なかつたんじゃない？」

「いや、それも考えられますが……確か大鬼と小鬼呪術士はほぼ同格のはずです。そもそも共に行動しているというのが普通ではないかと」

「ここが鬼族の巣だからかなあ？」

「そうですね、正直これまでの常識で判断するのは危険でしょう。

……これ以上は情報が無いため何とも言えませんので、一度他の探索者を見つけて情報交換をした方がいいかもしれません」

情報は財産である。

それが最前線であればなおのことだが、情報交換を渋って死んだらそれこそ割に合わないということを彼らは良く理解している。

伊三雄が頷く。

「一旦階段の辺りまで戻ろうや」

他の探索者を捕まえるには、階段で待つのが一番効率のいい行動である。

全員が頷いて立ち上がり、移動を開始しようとしたその時だった。

「……！」

羅汗が唇に指を当て、静かにするよう皆に促して目を閉じる。
戸惑いつつも周囲は動きを止め、同じように耳を澄ます。

「……？」

「……聞こえた」
「然り」

表情を陰しくしたのは羅汗と明葉、共に感覚の鋭さでは群を抜いている。

一方他の3人はよく分からないといった表情だ。

しばらくの沈黙の後、2人は振動・音から何が起きたかを推測する。

「響くような重低音……大きく崩れた？」

「大規模な破壊……崩落……畏かもしれん」

しかし情報が圧倒的に足りない。

「何が起きたっていうんだか、まあいい予定通り……！？」

「……っ！！」

よく分からないながらも移動しようとした彼らの機先を制するかのよう、迷宮内の雰囲気が一変する。

「……これは私でもわかりますよ」

蓮二が汗を滲ませつつ呟く。

彼らの探索者として磨かれた感覚が最大限の警報を鳴らしている。

「これは……どう……するの？」

最早迷宮に先ほどの静けさは無く、粘りつくような濃密な殺気で満ち溢れていた。

皆このまま動くべきか迷い、その足を止めてしまつ。

「ふん、何が起きたか知らねえが、やることは変わんねえな。びびってないで警戒しながら階段まで戻るぞお前ら！」

そこに伊三雄の叱咤の音が響く。

その迷いのない声に全員が我を取り戻し、伊三雄の方を見る。

「明葉は戦闘、俺が2番手で羅汗が殿だ！」

この程度で竦んでたら戦場になんかいけねえぞ！」

「そつえばリーダーは傭兵上がりでしたね……」

蓮二が苦笑する。

素早く指示に従って隊列を整え、明葉と羅汗がそれぞれ索敵を行った後移動を開始する。

「殺気は凄いいけどまだ近くにはいないよ」

「後方も居らず……遠くに多数か」

つまり奥から迫って来ているということである。

記録した道を早足で戻っていく一行。

それほど奥に進んでいなかったこともあり、敵に遭遇しなければ30分で階段まで戻れる距離である。

新たな罠が出現していないことを祈りつつ、彼らは途中魔物を見かけても進路上でなければ放置して進んでいく。

三度、伊三雄達は進路上の魔物と交戦し、強行突破して階段付近まで辿りつく。

交戦した魔物には適度に怪我を負わせているため、直ぐに追いついてくることはない。

彼らは既に迷宮内で2晩を過ごし、体力的には大分疲弊している。戻りの道程も急ぐと考えれば、手強い魔物と交戦する余裕は無い。一行は一旦足を止め呼吸を整える。

「よし、階段に行くが異常は無いな！」

「大丈夫よ！」

「問題無い」

「異常なし！」

後方で膨れ上がる魔物の気配に押されるように、階段の方へ歩き出す。

しかし、先行して様子を確認していた明葉が伊三雄達の方を向いて、困ったように顔を歪めて告げる。

「ねえ……階段埋まってるけど……どうしようか……？」

彼らが見たものは瓦礫に埋まった階段。

そして後方より鬼族の群れが姿を現した。

閑話 2・前線での出来事（後書き）

前線の様子を少しだけ書いてみました。

正直主人公より書き易い気がします（笑）

13・鬼の足音・3

目を開ければ、そこは見知らぬ天井だった。

いや、正確には見覚えはあった。ここは治療院の天井だ。以前に足を折った時に世話になったので覚えている。

治療台に寝かされているようで、横に仕切りとなる布が下げられていて周りの様子は分らない。

（さて、何故ここにいるのだったか……）

一旦目を閉じて。自分が今ここに居る理由を思い出す。

「そうか、生きて帰れたのだったな……」

脳裏に迷宮内での逃亡劇が浮かび、安堵のため息が出る。

いるはずのない鬼族の群れが出現して逃げるしかなかったのだ。

結果的にはどうにかこうにか命辛々地上に帰り着くことが出来た。

その間の事は無我夢中で余り覚えていない……というのは嘘だ。よく覚えている、自分がやってしまった事も。

思考が嫌な方向に向いたため頭を振って追い出し、とりあえず状況を把握しようと上体を起こす。

「ひぐつ!？」

体に激痛が走り、奇妙な声を漏らしてしまう。

見れば、体に包帯が巻かれており、激痛は腹と胸の間あたりから生じている。

（これは肋骨が何本かいつてるのかな？）

原因には心当たりがあるので、むしろこの程度で済んだのかと思う。痛みをこらえながら怪我の具合をゆっくり確かめっていると、私がこそこそと動いているのが聞こえたのか足音が近づいてくる。

「ふん、ようやく目を覚ましおったか」

仕切りを開けて顔を出したのは、白衣を着た初老の治療師だ。

「一通り手当はしたがどうじゃ？怪我の内容？肋骨が2本折れておったな。幸い臓器は傷ついておらん。後は打撲箇所と裂傷が多数あったが、そこそこ鍛えておるようじゃし余り問題はなかるう。骨は治療術式で繋いでおいたし、その他の傷は適当に軟膏を塗っておいたわ。代金は通常通りで受付に払っておくがいい。ああそれとお主栄養剤を飲んでおったろう、あれは多量に摂取すると傷の治りに悪影響が出ることがあるからお勧めはできんぞ。若者が薬に頼るもんじゃあない。気合でどうにかせい、気合で」

気難しい表情で一氣にまくしたてられた。

「ええ、はい、わかりました」

素直に返事をしておく。

おそらく反論すると十倍になって返ってくるだろう。そういう人種に違いない。

「ふん。ならよろしい。」

ああ、こいつが痛み止めじゃ、1日2回朝夕に飲むように。とりあ

えず3日分出しておくのでそれを過ぎたら気合で耐えるがいい。あとは何かあるか？ないな？じゃあ休んでないでとっと起きるんじや。さつきから怪我人が多数戻って来てるようだな、すぐにここも手狭になるじゃろうから場所を開けるんじゃ」

「……はい」

反論は諦めてゆっくりと立ち上がる。

できるだけ傷が痛まないようにそろそろと歩き、手近にあった水差しから湯飲みに水を注いで痛み止めを飲む。

「どうもありがとうございました」

治療師に礼をして、脇に置いてあった荷物を持ち治療室から廊下に出る。

治療院の内装は白で統一されており、清潔感溢れる雰囲気を作っている。窓は大きく造られており日光を多く取り入れるようになっていたが、今は夜の帳がおりていて街路灯の灯りが見えるだけだ。照明は天井に等間隔に取り付けられた球体で、院内を明るく照らし出している。

出入り口に向かって歩いていくと、かなり騒がしくなっているようだ。

さっきの治療師の話では怪我人が多数出ているそうだが、この騒がしさはそれだけでもないだろう。私が遭遇した事態と関係があるのは間違いないだろう。

迷宮で起きた事態。惨劇。

助けを求める目、恐怖の表情、伸ばされた手が頭をよぎる。

「……くそっ」

思わず壁を殴りつけてしまう。

「あれは仕方なかった……それは分かってる……」

今まで思い出さないようにしていたが、逃走中に起きた出来事が私の心を苦しめている。

そこで違う判断をしていたら私は生きていなかったかもしれないが、感情は納得していない。

簡単な話だ。

逃げている途中、負傷している探索者と遭遇したものの、手助けしていたら間違いなく追いつかれるため見捨てて逃げ続けた。それだけのこと。

実際その後余り経たず小鬼騎手に追いつかれたため、間違っただけじゃなかったはずだ。

迷宮は弱肉強食であり、判断を間違えた者・運の悪い者から死んでいく世界である。助けるというのは余裕のあるものだけができる行為であり、力及ばず助けられないのは仕方がない。

探索者に必要な能力として、自分に出来ることと出来ないことの見極めがある。

助けなければいけないからといって闇雲に救出に向かうのは馬鹿の

することであり、明らかに無理な場合は涙を呑む精神も探索者には求められるのだ。

悲劇にも耐える精神を造り上げるのは経験のみ（正確には信仰などもある）であり、現在深層で活動している探索者は多かれ少なかれ経験していることだという。

自己嫌悪で鬱になりそうなので、しばらくは自分を騙しながらやっていくしかないだろう。

いずれは慣れることだろう。

非生産的な思考をしているわけにはいけないので、無理やり思考を切り替える。

「……大赤字だ……」

泊りがけで探索する予定だったのが、あえなく失敗。

逃走中に消耗品も使い尽くしてしまい、全く持って割に合わない探索だった。

一番痛いのは転移門を使ってしまったことだが、次に痛いのは棒を捨ててきてしまったことだ。正確には弾き飛ばされて後、拾う間もなく門で逃げてきたので捨てた訳ではないが。

その時の戦いを思い出すと震えがくる。

双角蜥蜴のときを超える恐怖だった。大体多対一というのが良くない。

転移門の準備中、追いつかれたので起動まで迎撃していたのだが、最初に来た小鬼騎手と小鬼の群れを防いだ所までは順調だった。向こうに弓が無かったので、煙幕と閃光と火炎瓶で時間を稼いで、近

くの敵だけを叩きのめすことができた。

問題は助けを呼んだのか、起動まであと少しというところで私よりも二回りは大きな体格の鬼族　おそらく大鬼^{オウガ}だろう　が出張ってきたことだ。

その巨体に似合わない器用さで投げた小刀を全て金棒で弾き逸らし、強靱な脚力で遠い間合いを一瞬で詰めて攻撃してきた。棒で受け止めたはずが、あっさり手から弾き飛ばされて攻撃を胴体にくらってしまった。まあ、受け止めて勢いを削いでなければ内臓まで挽肉にされていただろうが。

無様に転がった所で門が起動したため、握りこんだ砂を近づいてくる大鬼に投げて足が止まった隙に逃げ出したというわけだ。

ああ、無様無様。

とはいえ這いつくばろうがみつともなかるうが、生きて帰ればそれが勝利なのだ。

資金も貯めなければならないし、養生しながら本業に励むとしよう……。

治療院の外に出た途端、凄まじい騒ぎを目の当たりにする。

迷宮の入り口前が様々な人で混み合っている。その大半はぼろぼろの探索者達だ。そこに協会職員と、神殿の神官と、情報屋と、周囲の野次馬が集まっている。

喚き、協会職員に詰め寄っている者達。

「一体どうしたことだよこれは！」

「あんな数がいるなんて聞いてないわよ!!」

「何してんだよ協会は!」

「いやちよつと落ち着いてください。何度も説明しておりますが我々に不手際があった訳では御座いません。察知していれば事前に警告を出しますが、今回の話は突然の事。確かに不幸なことではあります。がそれはあなたの方探索者が自ら対処すべき話であり、あくまでも自己責任となります」

仲間を失ったのか、悲嘆に暮れる者達。

「うう……くそ! 何が『ここは俺に任せて先に行け』だよ、死んじまったら駄目だろうがよう……」

「だから後ろだって言っただじゃねえか……誌村の馬鹿野郎……」

「……何であたしだけがここにいるのよ、みんなはどうしたのよ!」

時間が経って落ち着いたのか、冷静に情報交換を行う者達。私も状況を整理するため、その一団の隅に加わる。

「……つまり手前の所もか!」

「おおよ、騎手がそこかしこにいたんじゃ逃げ切れる訳ねえ」

「……正確な数はしらんがここ数日は40〜60組が潜ってるそう。どれだけ逃げてこられるかな……」

「転移門は品薄だから……日帰りのつもりで来てた連中がやばいんじゃないか?」

「1・2階層の階段から崩れてたらしいぜ……こいつはやばいぞ……」

適当に相槌を打ちながら情報を集める。

情報が錯綜しているため整理しづらいが、ほぼ間違いのない話は以下の通りらしい。

・今日はやけに魔物の出現頻度が少なかった。そのため多くのパーティーがいつもよりも深い階層に進めていたらしい。

・夕方近く？一斉にどこからか魔物の群れが出現した。下層ではなく、上の方の階層からだ。最前線からの帰還者はまだ確認されていない。

・いくつかの階段が埋められて通れなくなっている。原因は魔物の群れの出現前にあった地震？のような揺れではないか。

そもそもこの場にいるのが一部に過ぎないため、事態の全容はまだ分かっていない。

もし階段が埋まってしまったのが事実ならば、最悪の事態だといえるだろう。帰り道は階段しかなく、事実上転移門を所持していなければ帰還できないからだ。ごく一部の例外として、法術士による転移術や神官の奇跡があるらしいが、ただでさえ少ない術士の中でそのような高等術を使用できるものなど極々一握りだろう。

もし外に方法があるとすれば、階段を掘り出せるような能力を持っている場合くらいか。おそらくは魔物の群れに邪魔をされるためまず不可能だが。

「お静かに！」

良く通る声が響き渡った。

集まっているほとんどの人が、声のした方に顔を向ける。

その視線の先にいたのは、協会の紋章を織り込んだ衣装を纏った小柄な年配の女性だった。

「咲ノ宮様……」

「おお、あの……」

途端に周囲が静まり返る。野次馬を含めてだ。

ただそこにいるだけだというのに、その雰囲気をもってその女性が登場を支配している。

その名前は私ですら知っているものだった。

咲ノ宮雫。蓬萊国の名門貴族の一つである咲ノ宮家の一員にして、探索者支援協会副会長を務める偉人だ。若い頃は自ら凄腕の探索者として近隣に名を轟かせ、多くの名付魔物を討伐した。一線を引いてからは協会で後進の育成にあたっており、現在最前線で活躍している者の中には彼女が発掘した人材も多く存在している。その功績より咲ノ宮家の当主にという話も上がったが、公平な判断がでなくなるかと辞退したという。

とりあえず凄い人だということだ。御年67歳らしい。

「まず早急に事態の把握に努めたいと思います。」

迷宮から戻ってきた方々の中で、治療の必要の無い方は協会にお集まり下さい。現在職員による臨時体制を組んでおり、現場と連絡を取り合っています。

まとめられた詳細につきましては、後程公表致しましょう」

その場にいる全員が、異議を唱えることなくその言葉に従って動く。私も余計なことはずいぶん、他の探索者に続いて協会の建物に入った。

階段を上がり、2階の大会議室へ移動する。

中には職員が多数控えており、私たちが着席するとすぐに紙と筆記用具が配られた。
全員に用紙が行き渡ったことを確認し、咲ノ宮副会長が説明を始めた。

「今お配りした用紙には次のことを書いて頂きます。

- 1・ 事態が急変した時の階層。
- 2・ 事態が急変した時のおおよその時刻。
- 3・ 遭遇した魔物の種類……判る範囲で構いません。
- 4・ その他異常と思われる事柄。あるいはこの事態に関係していると考えられる要因について。

簡潔な内容で構いません。無論、情報は財産ですので4番については内容によりますが相応の情報料をお支払い致します。書き終わりましたら近くの職員にお渡し下さい」

皆事態の重要性を理解しているのか、質問が挙がることなく筆を走らせる音が響く。

私も筆を走らせながら、それとなく室内の様子を窺った。

今ここにいる探索者はおおよそ30人程度。

今日あの小迷宮に挑んでいた正確な数は分からないが、噂ではパーティーが50組前後らしい。私のようなソロがいる確率は低いので、まあ3人組としても150人、実際は5、6人の組もいるのでそれ以上の人数か。

つまり5分の1かそれ以下の人数しかないということだ。怪我人は結構いるだろうから、もう少し大目に見てもいいところ3分の1位か。

そして時計を確認してはいないのだが、事態が発生してから5、6時間は経過しているはずだ。帰還できる者は既に戻ってきていると

考えるのが妥当だろう。

大変な話だ。

もしかしたら事態発生前に戻ってきていた者が多かったかもしれないし、未だ迷宮内で抵抗を続けている者がいるかもしれないが、1日で100人以上が迷宮の塵と消えた可能性がある。

迷宮では日々死者が出ているとはいえ数人程度だ。しかも初心者が多い。

今回は訳が違う。

活動の盛んな初級、中級の探索者が一斉に死亡する。この意味は単なる数の減少では済まされない。

そもそも迷宮はその素材でもって国を潤す源泉だ。

現状都市であれば、あらゆる所で迷宮素材を用いた道具は使われており、人々の都市生活を支えていると言っても過言ではない。

夜を照らす街路灯しかり、食材を冷やす保冷库しかり、術具という派手なものだけではなく、一般的な道具にも必須素材としてなくてはならないものだ。

村にいた時はそんなことは全く知らなかったが、ここに来て驚いたものだ。

100人単位の探索者の減少は、その素材の流通量に影響を出すだろう。

決して無視できない数値になるに違いない。おそらくいくつかの素材については買い取り価格が上昇し、それにもなって製品の価格が上がる連鎖になるか。

なんにしても、事態を放っておけばさらに被害が増えるだろうから、経済活動の面でも協会として対応しなければならないのは確かだ。

手早く用紙に必要な項目を書き終える。

私が遭遇した小鬼の転移門については、具体的には書かずに『魔物の出現現場を目撃した』程度に止めておく。詳細については後程個別に呼ばれた時にでも経路と一緒に伝えればいい。情報は小出しにするのが基本だ。

協会は信用しているが、情報が横取りされる危険性がないとは言えない。

近くの職員に用紙を渡す。

手間のかかる内容ではないため、他の人も続々と書き終えている。残っているのは字が苦手な者だろうか？

しばらくして用紙の回収が終わり、副会長がまとめた用紙を置いて礼をする。

やはり貴族の生まれ持ったものなのか、仕草が美しく気品がある。

「皆様ご協力ありがとうございます。一刻も早く事態を収拾するべく有効に使わせて頂きます。記載内容によっては後程呼び出しを……」

話の途中、急に扉が開く。

部屋の入口に現われたのは、一人の老人だった。長いひげを床に突きそうなぐらいに蓄え、頭は禿げ上がっている。ゆったりとした装飾の少ない着物を着ており、どういう立場の人物かはよくわからない。

もっとも、副会長の言葉で私の疑問はすぐに氷解した。

「会長……帰っていらしたのですか」

その一言に、室内がざわめく。

「あれが『千人斬りの翁』か……」

「俺初めて見たよ……」

探索者支援協会会長、九龍^{クイロン}。出身不明、年齢不明、不明尽くしの人物だが、この国の生ける伝説である。この国における協会の創設者であり、今なお実力で頂点に君臨する存在である。もっとも実務は既に副会長以下に任せており、普段は何等かの目的で諸国を巡っているらしい。

「つい今しがた戻ったところじゃ。何やら面倒な事態が起きているそうではないか」

「はい、現在対応本部を設置し、事態の收拾にあたっております」

あの咲ノ宮副会長ですら、緊張を隠していない。
会長はゆつくりと私たちの前に歩いてくる。

「ふむ……素早い対応は実に良いことじゃ。儂の勘が正しければ、悠長に構えている暇はないしのう……」

「勘、ですか」

「うむ……その紙は情報を集めたものじゃな？見せてみなさい」

そついうと会長はまとめられた紙束を手に取り、ぱらぱらと捲っていく。30枚くらいあった紙を1枚3秒程度の速さで読んでいるようだ。

時折、僅かに目を細めて紙面を注視している。何か重要な情報が書かれていたのだろうか。

「……まずは生きて戻り、情報を出してくれた皆に感謝を」

静まり返る室内に会長の声が響く。

「組織だった魔物の襲撃、階段の封鎖……くく、昔を思い出すのう」

「会長……それは……」

「なに、300年前、俺が協会を設立するきっかけになった事件とよく似ておる……」。

間違いあるまい、迷宮の魔物による【逆侵攻】じゃ……」

13・鬼の足音・3（後書き）

時間が飛んでしまいました。

本当は逃亡中の描写もあったのですが、どうしてもじっくりこなく
て書き直してゐるうちにこうなっていました。

結局納得のできるものは書いていません。ひとえに作者の力不足で
す。

14・討伐隊

迷宮は魔物で溢れている。

そして人が迷宮に潜り、魔物を狩るのが常となっている。

そこで多くの人が抱く疑問として、『魔物が生まれ続けるのなら、魔物が迷宮から出てくることはないのか?』というものがある。

一般的には、出てくることは無いということになっているし、実際出てくることも無い。

魔物は迷宮外でも発生するため、別に外に出ると生きられないという訳では無い。

しかし、長年の研究により判明した事実を元に考えると、迷宮内の魔物が外に出る理由は無いのである。

そもそも魔物は本能に忠実な存在である。高い知性を持つ個体も存在するが、本能にはそうそう逆らえない。

魔物は、迷宮内での生存競争も相まって常に力を求める存在である。そして魔物の力の源泉は歪みであり、歪みは迷宮深くに行くほど強くなる。

結果として、魔物は本能的に強さを求めて下に向かうのであって、態々歪みの無い外になど出ようとも思わないのだ。

これが最新の学説である。

勿論反論は存在するし、あくまでも主流というだけだが、知識人層

では広く支持されている。

結局何が言いたいかと言うと、迷宮都市の住人にとって魔物は狩るものであり、潜りさえしなければ決して自分たちに牙をむいてくる存在ではないのだ。

これが常識である。

その常識を覆すのが“逆侵攻”だ。

『まあ、儂等が勝手にそう呼んでおるだけじゃがのう。

実例が余りにも少なすぎる現象じゃ。世界中を見ても数えられる程度しか発生していない特殊な事態なのは間違いないのでな。儂も長いこと生きておるが、実際に遭遇するのはこれで2度目でしかないので、余り当てにせぬようにな？

後は話として聞いたのが数例しかない程度で、場所・時期・規模・魔物の種類などがバラバラで共通点を探す方が面倒な位じゃ』

『先ほどの話ですと、昔にもこの迷宮で発生したという話ですが、その時とも違うのですか？』

『無論違う。しかし、協会結成前の話であり、当事者の儂ですらその全容は未だ把握しておらん。何故かと？発生時迷宮の該当する区域にいた連中は皆殺しにあったからのう、何が原因かも迷宮の闇の中じゃて。

そしてその時に尽力した中心勢力が呼びかけて、今の協会が出来上がった訳じゃな。

……なに、当時の話を教えてくれとな？

余裕もないし手短に話すでしょうかの。休憩所の者に偵察に行かせているので、報告があがってくるまでじゃ。

当時に比べれば今回はずっと条件が良い。昔は帰還用の術具など開発されておらんかったからな。おかげで少なくともこれだけの人数が戻ってきてくれた。ただ、当時は階段を物理的に封鎖するということは無かったはずじゃ。

……あの時起きた場所は皆知らぬじやろう。今では封鎖されておる【伏魔殿】（パンデモニウム）という小迷宮じゃ。今は許可が無ければ何人たりとも立ち入ることはできん」

【伏魔殿】とは。閲覧制限がかかっているため詳しいことは不明だが、闇に属する魔物が多く出没する小迷宮だったらしい。会長も多くは語らなかつたが、当時の長期間に亘る激闘の結果、人の立ち入れない程汚染された領域となってしまったという。現在は入り口事態を封印し、探索することはできないそうだ。

「……うむ。職員の偵察により該当迷宮の1、2階層間の階段が崩落した瓦礫で埋まっているのが確認されたそうじゃ。しかも明らかに人為的……この場合は鬼為的とも言えはいいのかの、自然に生じたものではないという報告じゃ。

探索者諸君！

これより蓬萊国探索者支援協会は、協会則第15条の規定に基づき、非常事態宣言を行い非常体制に移行する。同時に迷宮内に取り残された者達の救出及び組織的な魔物のせん滅を行うための討伐部隊を編成する。

協会より適任と思われる登録者には協力を要請したい。また王宮・神殿・諸侯にも支援を要請し、早期の決着を図るものとする。無論要請を受けるか否かは任意であるし、罰則は無い。要請した者以外でも希望者は随時受け入れを行う。支援・掃討・調査・拠点の護衛

と手が足りぬ故、多数の参加を期待している！

今適任かつ動ける者で先行部隊を編成し、明朝より各所の協力を得て本隊を編成して小迷宮入り口に拠点を設営する。なおこの行動中の食事・治療に関しては協会で負担するとともに、仕事に応じた報酬を別途支払うものとする！

……こんなところかのう。詳細はこの後迷宮前及び協会内に張出すので確認しておくれ。儂はこれから王宮に向かうので、その間の指揮は副会長に一任する。以上じゃ」

「……ということが昨晚あった訳だ」

「なるほど、それでこの騒ぎな訳だね」

「というか階段が通れなくなるなんて悪夢ですよ？」

「当事者の人たちには申し訳ないけれど……昨日潜ってなくてよかったわ」

一夜明け、迷宮入り口前広場。

時には軍の部隊が集合することも前提として整備された空間であるため、かなりの広さをもった場所である。そして広場は現在、今回の話が広まったせいで普段以上の人混みとなっている。

もつとも、協会の職員が誘導や整理を行っているため、人が通れなくなるような事態にはなっていない。

私たちがいるのは協会の隣にある喫茶店……の2階にある席だ。

まだ朝早いため他の客は少ない。ちなみにこの店は早朝から深夜まで開いている。

私は自前で朝食を取っているので飲み物だけだが、他の3人は軽食を注文している。

隣に子栄、向かいに慶斗・愛紗兄妹という顔ぶれだ。

実の所、一緒にいるのはただの偶然でしかない。

討伐隊の様子を窺いに協会前に来たら、同じように話を聞いてやって来ていた3人と出会っただけなのだ。

混んでいて話もし辛いことから、ほか3名の腹ごしらえも兼ねて広場が良く見える位置にいるという訳だ。

広場の様子を眺めながらゆつくりと茶碗を傾ける。取手付きの茶碗で、西方ではカップという呼び方をされている。

元々この辺りの地域では取手の無い碗が主流であったが、交易路の発展に伴い次第に西方・南方の様々な食器が輸入されるようになった。そしてここ100年程度で一気に輸送にかかる費用が値下がりし、一般にも出回るようになったのだそうだ。ただし今私が持っている茶碗は、蓬萊の職人が西方の技術を取り入れて作成した物らしい。形は西方風だが、釉薬や色遣いなどは間違いなくこの国のものである。

図柄はこの国の守護聖獣である鳳凰だ。建国王をこの地に導いたとかうんたらかんたら。

店内を見回せば、同じような西方風の食器・装飾品はかなりの数が確認できる。いくら普及しているといっても、まとまった数を揃えるのは結構な金と手間が必要だ。そういった雰囲気もこの店の売りの一つなのだろう。商売としては重要な部分である。

口の中に香ばしい苦味が広がっていく。焙煎された豆から抽出され

た黒いお茶の醸し出す味わいは、通が好むものとして最近人気が広がっている。

このお茶は珈琲と呼ばれている。

「……少し物足り無いな」

「ん、どうした」

「いや、なんでもないよ」

珈琲を味わっていて無意識に言葉が漏れてしまったようだ。

物足りなくても店内で余り不満を漏らすべきではない。ちなみに砂糖・牛乳は有料だ。

「おい、神殿の連中が来たぞ」

子栄の言葉にはつと我に返り、窓の外を見る。

見れば、神官の一団が広場に入ってくるところであった。

「あれが今回の作戦に協力する方々ですか？」

「先頭にいるのが……太陽神殿の高位神官、天野様ですよ」

「良く知ってるな、あの方が出てらっしゃるということは神殿も本腰を入れている訳か」

皆が話している中、私は無言で観察を続けている。

蓬萊国は多神教国家だ。

いや、凡そ世界のほぼ全ての国家が多少の差はあれ多神教と言えるだろう。一神のみ奉じる国など極一握りに過ぎない。神が神官を通じて実際に力を奮うこの世界において、一柱のみの神を拝むなど、国家にとって不利益しかないといってもいい。物事においては、最適な権能を持つ神（神官）を用いるのが有効なのだから。もちろん何事にも例外は存在するのだが。

それはともかく、この国にも多数の神殿が存在している。国の主神としては太陽を司る神天照を奉じているが、特に他の神を排斥したり、貶めたりということはない。

とはいえ教義の違いから神殿同士の間には当然あり、それを調整する場として神殿協議会という組織が設けられている。協議会は各神殿の代表が集まって物事を調整する機関であり、この国に神殿を構えている所は大体が所属している（もちろん例外あり）。

協議会に参加している神殿同士は緩やかな協力関係にあり、災害の様な事態が起きた場合人員を派遣することもある。今回は協会の要請に応えた形になるが、ざっと見て30人はいるだろうか。結構な人数だ。

実際は各神殿から2人程度ずつの派遣だろうが、昨日の今日でこれだけ纏まって数を派遣できるということは特筆に値する。うちの協会長の影響力を示しているともいえる。

見たところ、派遣部隊に参加している高位神官は3人。

神官の地位については見た目で大体判別がつくためすぐに分かる。

後は普通の神官が20人程度、残りが装備からして神官戦士か。

先頭の金色を基調とした装飾を身に付けた人物が太陽神神殿の高位神官、天野清陽様あまの きよひこだろう。この都市において徳の高い人物として有名だ。実際はどうだかしらないが。

その後ろにいる高位神官は……分かん。

「後ろの恰幅の良い高位神官の方は誰かな？」

「……憶測だが、豊穰の神に仕える魯南虎様ろなんこだろう。他にあの体格の方はいないはずだ」

恰幅が良い、と言えば聞こえはいいが、ようは肥満体。
茶色を基調とした装飾品を纏った人物だが、その体は樽を連想させる。

「体からして豊穡の恵みに満ち溢れているわけだな？」

「誰が上手いことを言え……微妙だな」

「ああ」

「あちらの方は月神様の高位神官の、月乃兎鷺様つきの うさぎですね……お美しい」

慶斗の言葉につられて、残り一人に目を向ける。

銀色を基調以下略。まだ若い方で、街でも人気は高い。

まあ、私にとつてはどうでもいい事なのだけれど。

しいていえば南虎様は確か、「食の迷宮倶楽部」の一員だという噂があるのが気になる程度だろうか。噂が事実であれば今後関わることもあるかもしれない。

しかし普段できるだけ怪我できない身としては、これだけの支援をもって迷宮に入れる討伐隊がかなり羨ましい。

「……これだけ神官がいれば、大分楽になるんだろうな」

「そうですね、長期戦になりそうですから、これは凄くありがたい話ですよ」

「……神殿といえども聖人君子の集まりではない。ある程度は義務としても、協会がどれだけ支払ったのかは気になるな」

何事も金ですね、分かります。

また歓声が聞こえてくる。

協会と神殿が打ち合わせを行っている間に、王宮及び有力諸侯から派遣されてきた人員が到着したようだ。

王宮はともかく諸侯については任意だという話だが、動ける人員がまったくいないというのでもない限り、人を出すだろう。

今回の事態に対する現場での情報収集は当然として、協会等に恩は売れるし、他の探索者の技量も間近で観察できる。支援に神殿がついているため死亡率も低くなっているなど言うことなしだろう。

以前聞いた話によれば、有望な探索者数人を後援者として抱え込んでいる貴族は結構多いが、自前で大規模な探索隊を組織している貴族は3家に限られる。

それが西の太刀洗家、東の西條家、南の近藤家である。

それぞれ30〜50人程度の人員がこの街に常駐している。探索日が決められているらしく、週末は基本休日ということなので、迷宮内で遭遇することはほとんどない。

まあ太刀洗家の連中を除けば特に関わりは無いのでどうでもいい話ではある。

眼下には3家と、その他の貴族お抱えだろうか、家紋の入った装備を身に着けた集団が並んでいる。王軍の部隊は、統一された装備を身に着け整然と整列している。

これに比べると正直協会側、普通の探索者達の数はい少ない。自由な連中が多いから、流石にこの短時間では呼べない者も多かったのだろう。先発隊を合わせれば同じくらいの数になるのだろうか。

「……最前線組の方々はほとんどいないようだね」

「多分連絡自体がつかないんだと思います。下では1カ月籠ることもあると聞きますし、通信具も遮断されるそうですから」

「とはいえ、今いる面子もそう見劣りする顔ぶれじゃあない。“永劫の戦鎚”“漆黒卿”“荒魂の巫女”、二つ名持ちがこれだけいれば十分だろう」

有名になれば色々な呼び方が出てくるものだ。私的には痛々しいので御免蒙るが。

とはいえ二つ名（他称）は強さの証でもある。その実力は間違いない。

ふと気づけば珈琲がすっかり温くなっている。

観察に夢中になっている内に大分時間が経ってしまったようだ。

眼下でも討伐隊がもう出発するところだ。

協会長の合図の後、迷宮に次々と突入していく。

ぼんやりとその様子を眺めていると、子栄から声がかかる。

「で、諒二はあれに参加しないのか？

後詰にもそこその人数がいるようじゃないか」

私は半ば無意識に脇腹を撫でながら返答する。

「……絶賛療養中だから足手まといだね。それにどれだけ期間がかかるのか分からない。副業にかまけて本業をおろそかにする気はないよ」

「ほんとぶれないな、お前。浪漫に生きる気はないのか」

「浪漫だけで老後も安定して飯が食えるならいいけどね」

子栄に呆れられたが、慶斗と愛紗も呆れたようにこちらを見ている。間違ったことを言っただけはいいのだが、何故だろうか。私は温くなった珈琲を飲み干し、言葉を続ける。

「それにさ、今のままじゃ少々能力的に辛くてね」

大鬼相手には手も足も出なかったことを思い出す。

本来あの深さで出現する相手ではなかったとはいえ、何が起こるか分からないのが迷宮だ。力不足はそのまま死に繋がる。

「ちよいと副業はお休みして、しばらく貯蓄と戦力の向上に努めようかと」

「戦力……装備の底上げですか？」

「それもあるけど……いい加減加護を貰いにいこうかと思う」

「ええ！？まだ貰ってなかったんですか！」

愛紗が驚きの声を上げる。

「いやでも、あの儀式費用は中々捻出できないだろう。だから後回しにしてたんだが」

加護とは、他の高位存在から受ける祝福（あるいは呪い）のようなものである。

今でこそ儀式の手法が確立され、人の方からある程度任意で選択できるようになったが、昔は高位存在からの一方的なものだったそうだ。

加護を与える存在に定義は無く、人より靈的に上位の存在で力があ

ればいいだけである。例としては神々・精霊・英霊（人が死後に輪廻の輪に乗らず、力ある存在へと昇華したもの。聖霊と呼ぶ場合もある）が挙げられる。その他には妖精・神獣・魔獣・邪霊（聖霊の対義語）があるらしい。

加護は人が儀式でもって選ぶ場合（現在はこれが大半）もあれば、向こうの方から勝手に授ける場合もある。後者はいわゆるお伽話における祝福というやつで、前者に比べて加護の力が総じて強いものとされている。

加護の力は「ないよりはまし」から「神々の依怙贖肩」まで幅広い。とりわけ生まれながらにして加護を受けている者などは後者の代表格である。噂ではある大神殿の神子とか、ある帝国の巫女とか語りたくない位に反則的な力の持ち主らしい。

また各神殿の神官は総じて仕える神の加護を受けている。むしろ加護がないと奇跡を起こすことができない。

関係ない話はこれ位にしよう。

加護の儀式を受けるには、神殿に対しそれなりの寄進（という名の儀式料）が必要だ。ここが数多の神殿が集まる迷宮都市であるからこそそれなりの金額で済むが、これが辺境だとそもそも儀式自体を行うことが難しい。儀式を執り行う能力の持ち主、儀式に必要な触媒などが揃わないのだ。したがってその地方で権勢を奮っている神殿や術者の一門でないと儀式を行えず、それゆえに儀式を受けられる者も限定されてくる。

迷宮都市であれば、人材は豊富だし触媒も迷宮から手に入るため金さえ出せば儀式を受けられるというわけだ。

しかしこの加護の儀式、一つだけ問題がある。自分に加護を与えてくれる存在を呼ぶ訳だが、その結果は本人の能

力次第である。

簡単に言えば、高位の存在が興味を持つて来てくれるだけの能力・意思がなければいけないのだ。例を挙げると、自墮落に暮らしている良家のお坊ちやまが金を積んで儀式を執り行ったとしても、まともな加護はまず得られない。むしろ下手をすると邪霊が近づいてきて、甘言を持って混乱を招くための呪いを与えかねなかったりする。つまり状態で儀式を行っても金の無駄になるということだ。

だからこそ協会では、儀式の許可を出すのが第1層を突破してからとしているのだ。私ももう少し頑張ってからと思っていたが、余り自虐的な努力をする気もないので、そろそろ受けるべきだろう。

そういえばこの兄弟、既に加護の儀式は受けたとか前に聞いた気がするが、よく金が足りたものだ。
思わず考え込む。

「うーん……」

「あの、もしかしてと思うんですけど」

「何？」

「儀式費用は協会で手続きすれば分割払いで払えるのはご存知ですか？」

！？

「……なん……だと」

初めて聞きました。

「あー……、知らなかったんですね」

「割高になるわけじゃないですので、大体の人がそうしていますわ」
今まで悩んでいたのはなんだったのか。
頭を抱えてしまう。

「ははは、お前もたまに抜けてる所があるよな」

子栄が肩を叩いてきた。

友よ、余計な慰めは不要だ。

「あー、うん、分かった。いい勉強になったよ……」

疲れを感じてぐったりと座席に背中を預ける。

ちらりと迷宮入口の方を見ると、もう討伐隊は全員突入した後のよう
うだ。

集まっていた人々も次第に散り始めている。

見物も終わったことだし、私達も店を出るべきだろう。

そう思って顔を戻して3人を見ると、皆同じように考えているよう
だ。

「さて、これからどうする？」

僅かな沈黙の後。子栄が口火を切った。

兄妹がそれに答える。

「私達は迷宮に行きますよ。鬼ヶ島は討伐隊でないと入れなくなり

ましたが、その他に制限はありませんので普通に第2層を探索しようと思います」

「協会も平常通りの探索を推奨していますし、人手が討伐隊に取られるせいか素材の買い取り価格も上がるそうなので、稼ぎ時ですわ」

なるほど、確かに稼ぎ時だ。

私は今後の予定を修正しながら口を開く。

「俺はまあ、さっきも言った通り療養中だしね、探索はまた今度さ。今日は材料の仕入れと儀式の手配と、あちこち回る予定だ」

言い終えて子栄の方を見ると、奴は肩をすくめた。

「俺か？普通に商会の仕事だ。休みは不定期でね」

「それも大変だな……」

「立場上仕方ない話だ。……さて慶斗君に愛紗さん。何かご入用の際はぜひ当商会にお越し頂きたい。食糧から兵器まで、迷宮産出品を除けば品揃えに自信が御座います。」

俺がいれば多少は割引もしてあげられるし、宜しく」

子栄の宣伝に兄妹は苦笑している。

当然の話だが、彼らが会ったのは今日が初めてだ。私が紹介した形になるが、どちらにとっても悪いことではない。

席を立ち、会計を済ませて店を出ると、白いものが舞っていた。

「雪か……そろそろ本格的に積もりそうだな……」

蓬萊は温暖な気候にあり、中部以南は1年を通じてやや乾燥気味である。したがって雪もそれ程降るわけではないが、真冬になればそれなりに積もる時もある。

空を見上げていると、子栄が言う。

「もうすぐ年越しだしな、こうして雪が降ると、暖くなる商品がよく売れているよ」

「年越しか、年末には一旦村に帰ろうと思う」

「……なんだ寂しくなったのか？お前らしくもない」

「俺を何だと思っているんだ。手紙だけじゃなく、一度は元気な顔を見せに戻らないと無用な心配をかけてしまうじゃないか」

寂しいのは否定しないが。

それに私がない間に妹に悪い虫がついていないか確かめておかねばなるまい。

そうして私達は、別れてそれぞれの行動に戻っていった。

15・買い物編・1（前書き）

まだ日常編です。進みが遅いのはご容赦下さい。

15・買い物編・1

私は子栄、慶斗兄妹と別れた後、買い物に出かけた。

最初に行ったのは加護の儀式を受ける手続きだ。

直接神殿に行つて依頼することもできるが、協会の窓口から手続きが可能なのでそちらから申し込むことにする。

協会の窓口は、現在非常体制のため2箇所に縮小されているようだ。通常業務をしている職員が目に見えて少ない。残りの職員は討伐隊関係の事務処理に追われているのだろう。

窓口が埋まっていたため、整理券を取って待つ。

手近に丁度手続き関係の資料が置いてあったので、待っている間に読むことにした。

.....。

協会での手続き自体は無料。

また各神殿での費用と、その他付随する特典等についても事細かに資料に記載されている。

こうして比較すると、やたら基本費用が安い神殿もあるが、値段だけで選ぶのも早計だろう。

最終的な儀式の成否は本人の能力によって決まるとはいえ、儀式を執り行う術者の能力が関係しない訳では無いと聞いている。

また、望む加護との兼ね合いもあるだろうか。例えば特定の神の加

護が欲しければ、その神の神殿で儀式を受けると良いという都市伝説がある。根強い噂だが、統計を取っている訳ではないので真相は不明だ。

とりあえず、選ぶ基準としては自分が得た加護について明らかにする義務が無い所が良いだろう。

この資料の内容によれば、基本費用が安めの所は、何の加護を受けたのか申告する決まりがあるものが多い。自分が何の加護を受けられるかは分からないが、易々と重要な情報を渡すなど考えられない。まあ、嘘の申告をするという手もあるが、下手に危険は冒さない方が無難だろう。もしかすれば嘘を見分ける手段を持っている可能性もあるのだから。

「……うん？」

資料を読み進めると、神殿ではない名前が出てきたので思わず目を留める。

どうやら法術士の組織のようだ。神殿だけかと思っていたが、そうでもないらしい。

先頭に記載されているのが法術院……国が抱える法術士（現代式）の養成機関だ。費用は安めなので、真つ当に執り行ってくれるのか、修行中の見習いの練習台にされるのか不安な所はある。

後は民間の研究機関と、幾つかの術士一門でも受け付けているらしい。

まあ私は神殿にするけど。

「番号札13番でお待ちの方」

私の番号が呼ばれた。

資料に夢中になっていっているうちに窓口が空いていたようだ。資料を置いて窓口に向かい、手続きを開始する。

受付嬢に簡単な説明を受けた後、分割払いの手続き書類に記入し、提出する。

「はい、宜しいです。それでは次に、申請する団体をこちらの用紙に記入してください。上の欄に希望する日時又は期間と、下の欄に希望する団体を第1希望から第3希望までお願いします。まだ決まっていない場合はこちらの資料をご覧ください」

私は神殿に対する質問を幾つか受付嬢にしながら、用紙に記入を済ませる。

候補は学問の神の神殿と、農耕の神の神殿、そして水の神の神殿だ。資料の隅に載っていた儀式申し込み人気順位表（協会調べ）によれば、人気があるのは（特典も含めた上で）、やはり戦いに関係した神の神殿の様だ。しかし私が思うに人生において戦いは最優先事項ではない。それに学問の神の神殿などは、付属の図書館への出入りが自由になる特典があるため、総合的に見れば私には魅力的である。後は勘だ。

記入した用紙を提出すると、受付嬢は記入間違いが無いかを確認し、頷いた。

「はい、それでは今空きがあるかどうか確認しますので少々お待ち下さい」

私は頷いて、背もたれによりかかって力を抜き、受付嬢の動きを眺めることにする。

彼女は奥の方へ行き、何かを操作して会話しているようだ。空きを

確認すると言っていたので該当の神殿と連絡を取っているのだろう。

ぼつと眺めていると、5分ほどして受付嬢が戻ってきた。

「お待たせしました。第一希望について、明後日の夜に予約ができましたのでご確認下さい」

渡された書類を確認する。

学問の神の神殿で明後日夜7時から開始だ。

「当日はこの書類を見せればいいのですか？」

「はい、それと本人確認のため資格証を提示して下さい」

「分かりました。どうもありがとうございます」

「いえ、良い加護が得られますように」

受付嬢に一礼して受付を立つ。

ここでの用事はもう無いので次に行くことにする。時は金なりだ。

協会を出た後、しばらく歩いてやや寂れた裏通りにある店の扉を開く。

裏通りといっても大通りの喧騒が聞こえているような位置で、特に危険な場所ではない。

入ると同時に、扉についていた鈴が鳴り、澄んだ音色が店内に響く。

「いらっしやい……、おや、あんたかい」

すぐに奥から顔を出したのは、小柄な年齢不詳の老婆だ。この店の店主で、何度もここに通っているため顔見知りである。

「どうも、憐華さん。お久しぶり……でもないですね」

「ひゃひゃひゃ、つい一昨日きたばかりじゃないかい。ま、来る分には歓迎するさね。若いお客は少ないからねえ」

楽しそうに顔をしわくच्याに歪めて笑う。

ここは術具等を主に扱っている探索者用の雑貨店だ。私が普段使っている閃光筒・煙幕筒や、灯りの球などは全部ここで買ったものだ。一昨日来た時は転移門を購入している。

余り有名な店ではないが、この店も白泉さんの紹介だ。

別に隠れた名店という訳でも無く、店は小さいが品揃えは十分で値段も良心的な事、店主が親切であることから紹介したそうだ。

あの人には色々お世話になりっぱなしで申し訳ない話ではある。

とりあえず店内を見て回る。この店では駆け出しにも分かり易いよう、店内に見本品を並べている。在庫が無い場合は売り切れの札が置かれているのだ。

補助術具は大体あるようだが、転移門は品切れのようだ。

念のため在庫が無いか確認する。

「んー……、転移門は品切れですか？」

「すまないねえ、昨晚何組が来て全部無くなったのさ。次に入荷するのは1週間位先になるね」

「そうですか……分かりました」

今回の事件の影響だろうか、元々品薄の商品なので仕方がない。

頭の中で使える予算を計上しながら消耗品を補充にかかる。ある程度纏めて購入すれば割引してくれるので、どれだけ買うかは難しいところだ。

「今日は……閃光筒を20個、煙幕筒と炸裂瓶10個ずつ、採取壘10本、採取袋30枚、後は……」

「ほほ、結構買うじゃあないか。こないだ買ったのにもう使い果たしたのかい？」

売れるのは嬉しいんだけどねえ、あんたくらいの探索者が余り道具に頼ってはいけないよ。成長を阻害しちまうことがあるからね」

「……耳が痛いですが、緊急事態だったので……」

「身の丈に合った場所でじっくり鍛錬しな。無理に背伸びしても良いこたあ無い。死ぬ確率が高まるだけさ」

この店主、駆け出しにも相談に乗ってくれて非常にいい人なのだが、よく話が説教に逸れる癖がある。いや、言っている事も正しいので反論できないのだが。

大人しく説教を聞いている間、ふと視界の端にある棚が目に残った。

「精進します。……そういえばこちらの棚にある商品は何ですか？先日来た時は無かったと思いますが」

「んん、それらかね。大半はあんたには関係の無い代物だが……術士の道具さね。術の効果を高めたり代償を緩和したりする補助具や……外でも術が思い切り使えるようになる蓄力筒とかね。知り合いの技師工房が新しく手を出したそうでね、試しに置いてみたのさ」

なるほど、確かに関係の無い道具ではある。

万が一加護で何かの術が使えるようになったりすれば別だが……。とはいえ興味深い物なので、店主が購入物をまとめている間に観察

する。

(……これは高い)

明らかに他の道具とは桁が一つ違う。そういった意味でも無縁の代物には違いない。

ため息を付きながら見ていると、その中の青い色をした物体が目に残まる。

「魚……か？」

装飾品のようで、魚の鱗一つ一つが丁寧に造形されている。見てみると表面がまるで水面のように波打つかのような錯覚を覚える。

「それは水系統の術を補助する物さ。何事も見た目が肝心だからね」「ふーむ」

何故目に留まったのか、自分でもよく分からないが……。

「……どうしたんだい」

「……うーん？ 魚か………おお！」

悩んでいた私に電流走る。

「丈夫な糸はありませんか」

「糸？」

「はい、できれば見えづらくて、引っ張りに強いやつが欲しいんですが」

「いきなりだね……ちょっと待ちな、今確認するよ」

「お願いします！」

思いついたら止まらない。

（そうだ、釣りをしよう！）

無性に楽しくなってくる。

迷宮都市に来て以来まともに遊んでいた記憶がないので、たまにはいいだろう。

すぐに憐華さんが戻ってきて、目の前に2種類の糸巻を並べた。

「何に使うか知らないけどねえ、こいつならどうだい。この灰色の糸が特殊な触媒で鋼を柔軟な糸状にした柔鋼糸。耐久力は折り紙つきだが、少し重いね。こっちの白っぽい半透明の糸は迷宮の背銅苔蜘蛛から採取した糸を薬液に浸してより合わせたものさ。軽くて強靱だが、熱に弱いのが問題かね。」

「ちなみにお値段は」

「こんなもんかね」

「……まかりませんか？」

「ふえふえ、これは大量生産品じゃないからまけられないね」

「……蜘蛛糸の方を一巻き下さい」

眼力に屈して言い値で支払う。

楽しんでいた気分が嘘のような敗北感。

「毎度あり」

「く……はあ、また来ますね」

「いつでも来な、ひひひ」

不気味な笑い声に見送られながら店を出た。

余計な出費をしてしまったが、気を取り直して本業の仕入れに向かう。

芋は備蓄してあるが、足の速い食材はこまめに買わなければならぬ。まあ今日は調味料と、研究用の材料を買い込むだけだ。

市場の一画、遠方の輸入品を主に取り扱っている並びに向かう。市場は管理組合によって区画分けされており、商人（商会）によって店を出せる場所が決まっているのだ。

他の生鮮品を扱っている区画に比べ、日中賑わうのがこの区画である。鮮やかな反物や、色とりどりの細工物などが目を引く。しかし、ここに並んでいる品物に素人が手を出すのは危険である。別に市場でなくとも輸入品は取り扱っている訳で、街中の呉服屋や雑貨の店に比べ、それなりの値段で保障された品質の物を売ってくれるだろう。比べれば市場は玉石混交。買い手の目利きが必要とされ、粗悪な品を掴まされても文句は言えない場所なのだ。

私は立ち並ぶ店の中、食料品を主に扱っている店に入る。

食材は、遠方から運んでくるため保存の効く物ばかりである。目につくのは香辛料・乾物が主だが、奥には塩漬けの肉や魚が入った樽も見える。

「御免」

私は勘定台で帳面に筆を走らせている中年の男性に声をかけた。

男性は私が入ってきた事には気付いていたのか、特に慌てもせず顔を上げ、片眼鏡の位置を直しながらこちらに視線を向ける。

「いらつしゃい」

愛想の欠片もない声だ。

この店に来たのは初めてなので、私は商品を見せてもらったために断りを入れる。

「商品の方、見せてもらっても？」

「好きにしな」

男性は素っ気無く言って、傍らに置いてあった湯飲みを口に運ぶ。

「……む」

顔を顰めたのは、おそらくお茶が冷めきっていたせいだろうか。

そんな表情を横目に、私は商品を物色し始めた。

今回この店に来たのは当然輸入品が目的である。

これまでも暇を見て街の店を回っていたのだが、今一満足できる成果が無かったため、市場に足を延ばしたという訳だ。実際は街中でも色々取り扱っている商家はあるのだろうが、そういった店には伝手が無いのだ。

子栄の所は蓬菜と清華の製品が主だし。

まず香辛料の山を見ていく。

恐らくはこれを使いこなせるかどうかが私の命運を決めることになるだろう。

香辛料の類は店頭にあるだけで30種類以上並んでいる。そこから見覚えのあるものを除くと27種類が未知の食材だ。

……………多いな。

目的とする料理への組み合わせを探すだけでも大変だが、全部試すとすれば費用も凄いことになりそうだ。

輸送技術の発達で、昔のような『香辛料 等量の銀』等と言う話はなくなつたものの、決して安い物ではない。私が普段使っている黒胡椒にしても、倅約する家庭では使わない値段だろう。

困つたときは店の人に尋ねるのが一番だ。足元を見られない程度に。

「申し訳ないがこちらの品について聞いてもいいですか？」
「うん？」

私の行動を眺めていた片眼鏡の男性が、眼を瞬かせる。
僅かに間をおいて、了承の返答が返ってくる。

「はいよ、何が聞きたいんだい」
「こちらの香辛料について説明をお願いします」
「……全部か？」

だるそうな表情だ。まあ何十種類も説明しろと言われれば面倒臭くも感じるだろう。

「いえ、細かい説明は代表的な十種類程度で構いません。後はそれと比べての説明で」

種類は多いが、似たような物が纏めて置かれている。恐らく同系統の物が細かい品種や産地で分かれているのだろう。代表的な品種を一つ説明して貰って、後はそれと比べて甘い辛い酸っぱいで充分だと思われる。最後に判断するのは自分の舌だし。
更に懷から白銅貨を5枚ほど取り出して台に置く。

「やれやれ、他に客もいねえし仕方ねえな。2度は説明しねえぞ」

私は頷いて帳面を取り出し、男性が指差した香辛料を見つめる。

「まずはこいつだ。丁字ちようじと呼んでいる。独特の甘い香りがあるが消臭作用もある。色々な料理に使われるが薬にも使うそうだ。こいつは香辛料としてもかなり強い臭いだが、少し熱を加えらるともっと強烈になるので注意した方が良い。主に肉を使った煮込み料理に使われている。そしてその右横にある丁字を大きくしたようなやつだが、少し品種が違って甘みが……」

要点を素早く書き込んでいく。

特に香の変化する要因や、現地で使われる料理についてはしっかりと書き留めておく。

見る見るうちに帳面が八角はっかく、馬芹ばぎん、小荳蔻しょうじゅうくといった香辛料の名前と概要で埋まっていく。なんとなく聞き覚えのある名称も混じっているが、細かいことを訪ねている余裕は無い。

「……大体こんなところか。ふん、話し終えるまで他の客がこないとか、景気が悪いぜ」

「手間をとらせて申し訳ありません」

礼をすると、男は私を見つめて言う。

「……お前さん、料理人なのかい？」

「料理はしますが、料理人というのはまだ早い所ですかね」

「まあそうだろうな、その体で料理人と言われても違和感がある。なんつうか引退する傭兵が店を出そうとしてるって雰囲気だな」

そう言つて男は笑いだした。

前も言つた気がするが私は体格のいい方だ。それなりに鍛えていて、迷宮に来てからはまた筋肉がついた感じがしないでもない。今日の前にいる男性は、この辺では平均的な体格の持ち主（少し太っているが）だが、並んで立てば私の方が頭一つ大きい。

探索者の大半は体格が良いため余り意識しなかったが、結構差があるものだ。

「……似たようなものですが。ええと……これとこれとこれとこれを一揃いずつ下さい。後はここに下がっている香草を一束ずつお願いします」

「微妙な量だな、お試しつてところか」

並んでいる中でも煮込み料理などに使われる種類を買っていく。こうして香辛料を色々買っているのはある料理を再現してみたいがためなのだが、実の所作り方が分かっていないのだ。正確には作り方はおおよそ分かつているが、使われる香辛料が分からないと言ふべきか。仕方ないので自分で試行錯誤して作り出そうという目論見だ。まあ、まったくの零から始めようという訳でも無く、何種類かの香辛料には、うる覚えではあるがあたりが付いている。後は分量と、追加の他の香辛料の組み合わせを頑張るだけだ。

満足できる物ができあがるまで、どれだけ時間と金がかかるか考えると憂鬱だが、出店を計画している店がこの先生きのこるには特色ある料理が必要であるため、耐えなければならぬ。

他の品も物色しているといくつか興味を引かれる品もあったが、今必要とする物ではないので買うのは止めておいた。
金を払いながら私は男に尋ねる。

「この辺で珈琲の豆を売っている店がありますかね？」

「珈琲だあ？」

「はい」

「あんな泥水みてえな物なにがいいんだか……」

悪態をつきながら首を捻っている。

「それくらい自分で探せ。街中にもあるだろう」

「そこをなんとか、また買いに来ますから。街中の店だと一見には面倒なので……」

「ちっ、仕方ねえな。ここを出て左に進み、2本目の通路を右に曲がれ。そのまま進むと突き当りに食器やらを売ってる店があるが、その隣に確か遠方の茶や豆を扱ってる店が出てたはずだ。他にも扱ってる店はあるがそこなら質は保障する。値段は保障しないがな」

「どうもありがとうございます」

「ふん、また買いにこいよ」

私は頭を下げ、荷物を袋に入れて肩に引っ掛ける。量が増えて大分重くなってきたが、鍛えた体には大したことはない。

その後、教えられた場所に向かって適当に豆を購入した。帰りがけにその他の食材を買って帰宅。

というわけでクッキングタイム！

「早速昼食を兼ねつつ香辛料の研究を始めたいと思います」

何はさておき竈に火を入れて水の入った薬缶と鍋をかける。

燃料は燃錬炭という特殊加工された炭だ。簡単に火が付き、安定した火力で長時間燃えてくれる優れものだ。火を止めたい時は、灰に埋めることで燃焼を抑えられる。この都市の一般層の主要燃料になっている。

火加減の調節は炭を灰から出したり埋めたりする手作業と、鍋などを置く場所の距離で行っている。

湯が沸くまでに下準備。

買ってきた魚の内臓を取り、適当な大きさにぶつ切りにする。火が通り易い野菜を刻んでまとめ、貝の燻製を取り出して軽く洗う。香草を選別し、用途を分けて刻んでいく。

麺麴にバターを塗り、燻製肉を適当な厚さで切って香草と一緒に麺麴に挟む。今日買ってきた香辛料の一部を細かくしてかけておく。最後はちようど麺麴を挟めるような窪みの付いた小さな鉄板で挟み込み、取手を付けて灰の中に突っ込む。後は熱が通るのを待つばかりだ。

ちようど湯が沸いたので、薬缶は一旦火から離して置いておく。鍋に準備しておいた魚と貝を投入して軽く煮立たせた後、魚醬を加えて味を見る。

「薄味だがよし……と」

いい具合に出汁が出た所で野菜と香草を放り込み、塩胡椒に？さしらい夫藍ふらんを加えて味を調える。

余り煮込むと魚のえぐみが出てくるので、10分程で火を止める。灰の中に入れていた鉄板を取り出し、取手をひねって開くと、こん

がりときつね色に麺麭が焼けており、立ち昇る肉と香辛料の匂いが食欲をそそる。鉄板の内側には薄く油を塗っておいたので麺麭が焦げ付くことは無い。

麺麭を食べやすいよう2つに切り、海鮮汁を椀に取り分ければ昼食の出来上がりである。

食材への感謝を込めて手を合わせる。

「いただきます」

まずは汁を一口。

具は普段の材料と変わらないが、違う香辛料を用いたことで新鮮な味わいが口の中に広がる。蓬菜の家庭料理はどちらかといえば薄味の物が多く、香辛料は臭み消しの用途が多い。しかし今回使用した香辛料や香草はかなり自己主張が強い物ばかりである。

「まあ初めて使ったにしては旨い」

店の人から聞き取った用法で使ったということもあるが、まずまずの出来だと自負できるだろう。

魚や貝にある独特の臭いを緩和し、全体の味をまとめて上げている。それだけだと逆に風味が強すぎる所だが、一緒に入れた野菜を食べることにより適度に口の中がさっぱりとし、食が進む。

「はふはふ……白菜旨し」

次に麺麭に手を伸ばす。

がぶりと大きく噛み千切る。肉自体はややぱさぱさしている（庶民が買える肉はこんな物だ）が、そこはバターの油分で補っている。いつもなら香辛料は胡椒だけの所だが、今日は一緒に焼いた香草が

さらに強い辛みを加えて、冬だというのにどんどん汗が出てくる。
いや、汗自体は料理中にも火の傍なので掻いていたのだが。

「や、やばい……い……入れ過ぎた……」

食べる手は休めずに水を飲む。

辛さで口の中が熱くなり、むしる痛みの様にすら思えてくる。

「はふい、はは、げほっげほっ」

（辛い、が、止められない）

麺麭を食べ切り、水で口の中を冷やしてようやく落ち着いた。

「ふー……」

ゆつくりと残りの汁をすすする。口内がまだひりひりしているため、
迂闊に熱い汁を飲むと危険なのだ。

とはいえ決して悪くない。

辛さはもう少し調節する必要があるかもしれないが、辛い物好きに
は受けるだろう。

喉元過ぎれば辛さを忘れる、というやつだろうか。

昼食を食べ終えた後、片付ける前に根菜の類を刻み、まだ量が残っ
ている汁の残りに放り込んでいく。再度煮込んで夕飯にするのだ。
煮た後火を止めて冷やせば食材に味が染み込む。

「さて……」

今日のように遠方の食材を試すのは今日が初めてではない。今後探索によらず身を立てていく上で、短期的に一番可能性があるのが料理だと判断したためだ。

料理人になって一生を終える気は無いが、今安全に金が稼げるのは料理で間違いない。

正直言えば、謎知識を応用すれば他の分野でも稼げないことはないだろう。詳しい知識は無くとも、発想という点で先んじることができるからだ。既存の道具を改良する案という程度であればかなりいけると思う。

しかし、それはやはり危険なのだ。

稼げる分野というのは、当然既得権益を持った集団が存在する訳で、一旦自分が表に立って活動してしまえば果たしてどうなるか。大集団に上手い事属してやればいいが、いらぬ嫉妬ややつかみ、恨みを買うかもしれない。さらに権力者に目を付けられるような真似は御免である。

結局の所、危険なのは『有用な技術』だ。

その観点でいけば、料理は素晴らしい。斬新な発想も許容されるし（売れるかは別問題）、目立った所で所詮料理なので危険視されることも（多分）無い。

まあ上手くいけば客を奪われた同業者の恨みくらいは買っのだろうが、そこは仕方のない所である。

私程度の腕では純粹に旨さで稼ぐのに無理があるので、斬新な料理

で客を呼ぶのが一番だと判断し、こうして研究しているのだ。
幸い、毎日作っていることと機材が充実していることもあり、村に
いた時よりも多少は腕も上がっている。

私は煮込んでいる鍋の味を見ながら呟く。

「腕の不足を補って余りあるこの刺激的な味。我が野望が達成され
る日も近い……」

だが、この時の私はまだ気が付いていなかった。
“迷宮”というものの真の恐ろしさを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9954u/>

探索はあくまでも副業です

2011年10月5日22時41分発行